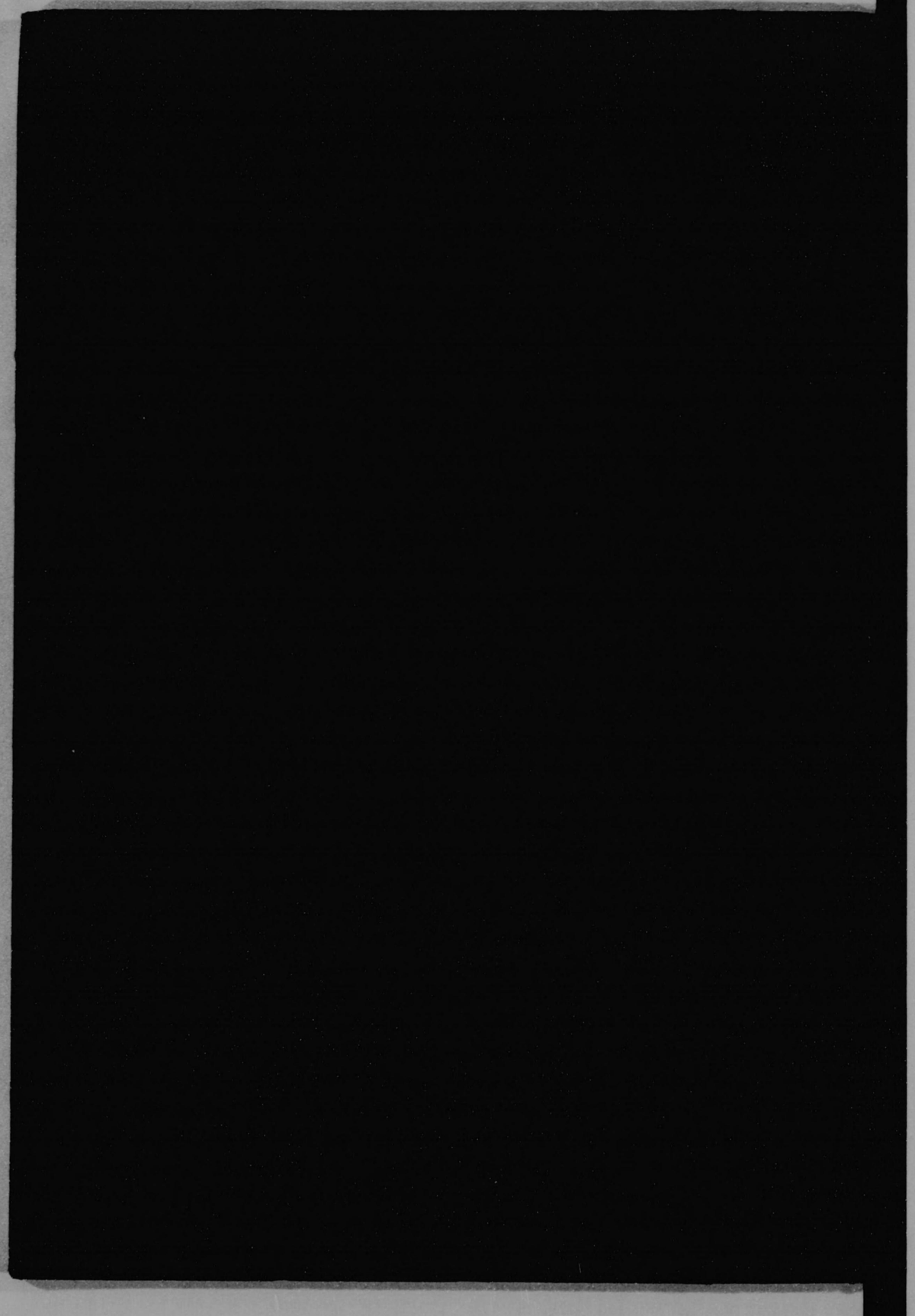


2

0053365000

0053365-000

５５６－２３２

世界の奇習異俗

藤井常陽・著

一誠社

昭和２

AIA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

556
232

269

別

藤井常陽著

世界の奇習異俗

東京 一誠社

昭和二・六・二三 内交 帝圖

556-232

目次

四月馬鹿……一
エイプリルフール——その起原——ノアの方舟と四月馬鹿——四月の魚馬鹿な魚——カイゼルの観兵式——大事件が突發した
クリスマス……一〇
その由來——クリスマスの木——ミツルト——クリストスカードー——サンタ・クロウス——クリスの花——ドイツクリスマス
ヨーロッパの手相判斷……三一
手相判斷の沿革——最も大切な諸筋——重要な三箇の隆起——四角張つた手——藝術家向の手——特別に大きい手——指の長短と性格——母指とその節——各指とその關節——掌の諸筋と運勢——戀の勝利者
ヨーロッパの成年式……四四
成年式と元服——成年式とその準備——儀式の內容
ヨーロッパの婚禮
一一般の風習……四九
婚禮の時期——婚禮の指環——密

月——花嫁の面帕と衣裳——婚禮の後さはぎ

二 イギリスの婚禮……五四
イギリス教會の結婚法

三 ギリシヤの婚禮……五六
許嫁さするまで——婚禮前の一週間——婚禮當日には——結婚式——結婚に關する迷信

裏祭時の奇習……六一
臨終の蠟燭——出棺時の奇習——埋葬時の火と燈明——臨終の水——死體洗滌——出棺の水——墓に水を注ぐ風習

決鬪奇談……七〇
決鬪の現狀——決鬪は北方民族固有の風習——手紙で勝負——珍妙な決鬪——自轉車上の決鬪——婦人の決鬪

アメリカの私刑……七六
私刑の起原——私刑とは如何なるものか——私刑の目擊談

イギリスの大學生……八五
オックスフォード——宛然一幅の風景畫——水の都——田園の都——歷史的な大學——大學の組織

スペインの鬪牛……九四

殘酷な遊戲——鬪牛の沿革と現狀——定設鬪牛場——驚くべき人氣——競技の實況——頭目役の苦心

モナコの話……一〇三
世界の不思議——公認賭博場——小氣味のいゝ勝負——年收一千萬圓——惡辣な手段——自殺者數三千餘人——一挿話——監獄のない國

アメリカの新犯罪……一二九
物騷な世界一——だらしのない警官——盜難保險——半分は嘘の盜難——五十萬圓の毛皮の行方——

壁の穴——棚の釘——嘘の盜難の一例——小切手僞造事件——惡漢の組織——銀行家側の對策——僞造王現はる——最新式の防禦裝置

歐米のポスター……一三四
ポスターの全盛地——ボヴリル停車場——ブーア・メンス・ギャラリー——政戰とポスター——英米のポスター——表現主義のポスター——政府のポスター

ヨーロッパの迷信……一四五
惡日と不吉な數——茶番のやうな事件——頭痛とヨハネの頭——西

洋の吉兆と凶兆——子供についての迷信——出産と迷信——運動家の迷信——寶石にまつはる迷信

歐米の見世物……一六二

パリーの寄席——オレンヒヤ——フオリー・ベルゼール——ジプシー・ショー——イギリスのローヤルターナメント——サーカス

子供の話……一七五

果して日本は子供の樂園か——子供の遊場——子供と遊戲——學校

女尊男卑の弊風……一八二

恐ろしく強い女の鼻息——裁判にまで女尊男卑

精神を失つた動物愛護……一八九

厄介な運動——驢馬を蹴つて罰金——烏屋もできない

支那の芝居……一九五

各派の歷史と現狀——支那劇の樂器——俳優の役割——舞臺裝置——演技の型

師娘奇話……二〇六

看香頭と闘夢の術——闘夢で失敗した話——師娘が逃げ出した話——師娘の本山

支那の婚禮……二一四

結婚成立まで——輿入當日の模樣——江蘇浙江の珍風——順德地方の奇習——福建省石澳の奇習

支那婦人のお産……二二四

姙娠中の風習——出産時の處置——變つた出産祝

奇藥靈藥……二二七

不老長命が目標——靈藥何首烏——補賢妙藥紅鉛丸——六神丸とその原料——四川省に行はるゝ靈藥

阿片奇談……二三五

恐しい征服力——奇怪至極な現象——製法と種類——中毒患者

支那の戰爭……二四一

支那の兵隊——謀叛は珍らしくない——宣傳大切な理由

苦力の生活……二四七

苦力の特色——簡易な生活——滿洲最大の苦力收容所

年中行事……二五四

お正月——花期(二月)——解天餉(二月)——清明節(三月)——立夏(四月)——佛誕會(四月)——端五(五月)——蟲干し(七月)——中元節(七月)——中秋(八月)——重陽(九月)——十月朝(十月)——冬信

至節(十一月)——小年夜(十二月)
——除夕

蒙古人の生活……二七一
蒙古包——蒙古人の常食物——唯一の食器——質素な衣服——呑氣な挨拶——婚姻の習俗——奇抜な葬禮——蒙古の社會組織——無理遣に出家させる風習

蒙古人の迷信……二八四
極端な天然物崇拜——奇抜な迷信
——オボ(鄂博)

蒙古旅行……二八八
旅行の困難——蒙古旅行記の一節

シベリヤの土人……三〇二
ブリヤート人の生活——ツングース人——コリヤーク人の天幕と神——ギリヤーク人とウオグール人——チユクチヤ人の迷信——サモイエド人の風習——キルギス人の生活

ダライ・ラマの話……三一三
變つた王位繼承法——珍らしい葬禮

チベット人の奇習と迷信……三二八
錦襴の着物——常食物と無二の好物——チベットの家——奇抜な徹

禮——亂雜なる男女關係——鳥葬
——奇抜な迷信——チベットのお祭

シヤムとアンナム……三三〇
シヤム人の服飾——シガーと檳榔子の實——シヤムの家——シヤム人の元服式——托鉢旅行——シヤムの葬禮——女が働いて男を喰はせる國

パルマ人の生活……三四四
服裝——飲食物と嗜好品——家——寺小屋式教育と僧院生活——女の子の元服禮——極端な動物愛護の風——熱烈な信仰——娯樂

マライの文化……三五七
マライ人——民族と職業——マライの文化と異民族の影響——マライ文化の特色——家屋——服裝——飲食物——マンデイ——ワヤン——面——クリス——毒

インドの風俗……三七六
ヒンヅー教徒の服裝——男女の服身具——諸神信徒の配號——刺青——肉食とインド人——インドの酒——斷食——沐浴——面白い挨拶

種姓の話……三九〇
種姓の現狀——種姓の由來——種姓と一般民衆
インドの婦人……三九九
その境遇の變遷——極端なる早婚——早婚制度の弊害——教育と男女間の差別——家庭に於ける宗教的生活——處女の學ふべきこと——既婚婦人の義務——悲慘なる寡婦の生活
インドの婚禮と葬式……四一四
結婚媒介業者——見合ひ式——許婚式——結婚式——葬式
ヒンヅー教徒の祭禮……四二
宗教萬能國インド——ポンコル祭——シヴアラートリ祭——ホリー祭——ラーマナヴアミー祭——クリシナヂヤンマーシタミ祭——ナレリブルニム祭——ガネツシヤ祭——ドウルガ祭——カリ祭——デイバヴアリー祭
インドのマホメツト教徒……四三五
インドに於けるマホメツト——マホメツト教徒の習俗——クトバ・エ・ラムザン祭——バクルイード祭——モハレム祭——ブクリ・チズ祭——アフガニスタンの女——アフガニスタン婦人の迷信
トルコ民族の風習……四七三
アナトリヤ——トルコ人の村——親切な村人——村の宴會——寢床——コンスタンチノブル——異樣なスタムブールの街路——トルコ料理店とトルココーヒー——トルコの菓子——トルコ人の米の飯——バザール——トルコの新しい女——變化の過程——婦人の新聞と學校——マホメツト教の托鉢僧——托鉢僧の祈禱會——苦行僧の集
ヤル・シヤム祭
○インドの奇民……四四四
洗濯が法度の村——盜みを名譽と心得る種族——極端な女尊男卑の實行者——男女とも赤裸々の民
インドの蠻人……四四八
生蠻ナガ族の生活——女天下のカーシ族——トーダ族の村——アンダマンの小人
イラン諸國の民俗……四五九
ペルシヤ人の服裝——家屋の構造と室内の模樣——婚禮——饗宴の模樣——最大の年事行事ナウ・ラ

會——トルコ風呂

アラビヤ人……三〇一

アラビア人——マホメット教——コラーン——信仰と眞言の禮拜祈禱——禮拜の型——斷食と巡禮——割禮——婚禮——葬式——男女の關係——アラビヤ人の魔除け——ベトウインの天幕——ベトウインの服裝

アフリカ……三二八

アフリカの住民——純黒人の一般習俗——ニヤムニヤム族の蟹風——バリ族の奇習——ディンカ族の雨乞ひ——ヌーバ族の迷信——マンジヤク族の葬禮——黄金海岸の土蠻——シエランオネ蠻族の秘密結社——バンツー族の結社——ネグロイドの風俗——ネグロイドの武器——ズールの計算法——ネグロイドの迷信　アフリカの小人——ブツシマン——ホツテントツト

アメリカ・インド人の風習……三五六

アメリカ・インド人——エスキモーの生活——プエブロのアメリカインド人——中央アメリカの土人

——南アメリカの蟹人

太平洋諸島の住民……三六七

ハイカラな土人——オーストラリア土人の風俗——メラネシヤ人——メラネシヤ人の生業——メラネシヤの家——ポリネシヤ人——ポリネシヤの家——ポリネシヤ人の服裝——奇抜な刺青——ポリネシヤ人の卜筮——タブ——メラネシヤの美術工藝——ミクロネシヤ人——ミクロネジヤ人の衣食住——カノーポリネシヤ人——

挿畫目次

第一圖　クリスマスの玩具……一二
第二圖　クリスマス・カード……一八
第三圖　スウイート・ピー……二二
第四圖　手の筋……二四
第五圖　婚禮……三三
第六圖　婚禮の棒……六〇
第七圖　イートンの學生……九一
第八圖　イートンの學生その母姉を學校につれて來るところ……九三
第九圖　スペインの鬪牛……九八―九九
第十圖　モンテ・カルロ……一〇四
第十一圖　モナコのルーレット……一〇八
第十二圖　賭博臺（二分の一の圖）……一〇九
第十三圖　賭博の光景……一一三
第十四圖　ラジオを持つたアメリカの巡査……一一三
第十五圖　ロンドン北西鐵道會社案内所入口……一二六
第十六圖　洋服屋の廣告ポスター……一二七
第十七圖　イギリス政府の發行したポスター……一二九
第十八圖　イギリスの政黨のポスター……一四〇
第十九圖　お茶の廣告……一四一
第二十圖　フランスのポスター……一四二
第二十一圖　ドイツのポスター……一四二
第二十二圖　ドイツ政府の發行したポスター（その一）……一四四
第二十三圖　ドイツ政府の發行したポスター（その二）……一四五
第二十四圖　ドイツに行はれる安産のお守……一五六
第二十五圖　ルビユイー……一六四
第二十六圖　ハダカ・ダンス……一六六―一六七
第二十七圖　すリンピア……一七一
第二十八圖　サーカス……一七四
第二十九圖　砂遊びをする子供……一七八
第三十圖　犬の墓……一九一
第三十一圖　婦人猫を愛撫する圖……一九三
第三十二圖　梅蘭芳……一九九
第三十三圖　支那の女優……二〇一
第三十四圖　一輪車……二〇七
第三十五圖　支那の葬式……二一一
第三十六圖　支那の行商……二一三
第三十七圖　支那少女の禮式……二一六
第三十八圖　爆竹賣……二一八
第三十九圖　支那の家庭……二二〇
第四十圖　煙館の圖……二二六
第四十一圖　阿片吸食の圖……二三八
第四十二圖　燈籠……二五八
第四十三圖　蒙古包の内部……二七二
第四十四圖　遊牧民の部落……二七三
第四十五圖　蒙古の喇嘛僧……二八三
第四十六圖　高原を行く馬車……二九一
第四十七圖　農家の石臼……二九八
第四十八圖　ブリヤート人の家……三〇三
第四十九圖　サモエード人と橇……三一一
第五十圖　キルギス人の酒宴……三一三
第五十一圖　チベットのラマ僧……三二四
第五十二圖　チベットの貴人……三二七
第五十三圖　ラサの景……三三一
第五十四圖　チベット人の敬禮……三三三
第五十五圖　若きチベット人……三三六
第五十六圖　チベット人の祈禱……三三七
第五十七圖　チベットの黒人……三三九
第五十八圖　シャムの踊り子……三四二
第五十九圖　アンナムの寺……三四七
第六十圖　アンナムの許嫁……三四九
第六十一圖　インドシナの田園……三五一
第六十二圖　インドシナの家鴨飼ひ……三五三
第六十三圖　バルマの上流婦人……三五五
第六十四圖　バルマの交通整理巡査……三五八
第六十五圖　バルマの高僧……三六一
第六十六圖　バルマ人の高僧を崇敬する圖……三六五
第六十七圖　マライの女……三六一

第六八圖　マライの貴人……二六四
第六九圖　ワヤンの面……二六九
第七十圖　南部インドの子供……二七八
第七一圖　タムール人……二八四
第七二圖　インドの行商……二九一
第七三圖　インド王の象……二九五
第七四圖　シヴァ神の像……四一四
第七五圖　インドの舞踊者……四一九
第七六圖　カリ神の像……四二四
第七七圖　インドの神輿……四四二
第七八圖　ペルシャの女……四四七
第七九圖　アフガン人……四七一
第八十圖　トルコの軍人……四七五
第八一圖　コンスタンチノープルの景……四八〇
第八二圖　トルコ風呂……四九九
第八三圖　モスレムの禮拜……五一三
第八四圖　メッカなるカーバの黒石……五一四
第八五圖　ブラビヤの女……五一七

第八六圖　アラビヤ人の葬式……五一〇
第八七圖　ベルベル族の舞踊……五一九
第八八圖　ソマリ人……五二〇
第八九圖　スダーン人と家……五二二
第九十圖　バビンガ（カルメンの土人）……五四一
第九一圖　ズールの舞踊……五四四
第九二圖　ウガンダ人……五四八
第九三圖　ズールー人……五四八
第九四圖　ズールー人の家……五四九
第九五圖　エスキモーの家……五五九
第九六圖　カナダ・インド人……五六二
第九七圖　アマゾン・インド人……五六五
第九八圖　ニューギニヤ人……五七四
第九九圖　メラネシャ人の大家屋……五七八
第百圖　メラネシャの道具……五八〇
第百一圖　ミクロネシャ人の舟……五八六
第百二圖　ポリネシャ人の衣服……五九〇
第百三圖　マオリの禮式……五九二

世界の奇習異俗

四月馬鹿

エイプリル・フール

「おい君、支配人が呼んでるぜ。早く行つて見たまへ、いゝことだよキツトの事だから」こいはれて取るものも取りあへず支配人の部屋に行くと、

「何だ、何しに來た。用なら後で來い。」と、苦蟲を噛みつぶしたやうな顏をされる。ビツクリして廊下に出るとさつきの奴、

「ヤア、かゝつたな四月馬鹿！（エイプリル・フール）」

いつもなら差詰、靑筋を立てるかだが、「エイプリル・フール」こいはれては怒る

わけにも行かないから、仕方なしに苦笑ひをして仕舞ふ。

かういつた、たちの悪い冗談・英語のプラクティカル・ヂョークさいふやつで人をびつくりさせる習慣が、ヨーロッパ到る處で行はれる。隨分莫迦げた習慣だが、これはなか〳〵止みさうもない。

一體この「四月馬鹿」なるものはごんな由來を持つてゐるのだらう。それにはいろ〳〵な說がある。一七六〇年のプーア・ロビンス・オルマナックにはその起原について妙なことが記してある。——

人によつては四月の朔日（ついたち）が
馬鹿の日ださいふけれごも
何故この日が馬鹿の日なのかは
私も知らないし、さういふ人も知らない。

「私も知らないし、さういふ人も知らない」ではドウモいさ〳〵か物足らないから一寸厄介だがさういふことを根掘り葉掘りよく調べてゐる好事家の說を二つ三つ紹介して置かう。

その起原

先づエイプリル・フールを以てローマ時代に行はれたケレアリアの遺物こなす說。

ケレアリアさいふのは往時四月のはじめ頃に行はれた祭禮(?)であつて、プロケルピナさその母ケレス及び地獄の王プルトに關する神話から來てゐる。——

プロケルピナはエルシャの野で水仙を摘んでゐた。美しい彼女がまさに腕一杯、香の高い水仙の花をかゝへて立ち上つた時、突然大地が裂けて、地獄の王プルトが現はれ、泣き叫ぶ彼女を地獄へつれて行つてしまつた。可愛いゝ娘の叫び聲を聞いて母のケレスが驅けつけた時にはもはやエルシャの野邊には人影もなく、たゞプロケルピナの「聲の木魂（エコー）」があるばかりであつた。……

これがその神話の大要。

つまり、ケレスが空しき「聲の木魂」を追つて走つたのがエイプリル・フールのそも〳〵の起原ださいふのだ。

ノアの方舟と四月馬鹿

また、四月馬鹿は例の「ノアの大洪水」に關係があるといふ説もある。この話は一寸面白い。

創世記の第八章を讀むと、ノアがその一族郎黨ともに一町四方もある大きな方舟（アーク）で漫々たる水の上を漂流してゐるうちに、どうやら水が少し引いたらしいので、「彼地の面より水の減少（ひき）しかを見んとて又鴿（はと）を放ち出だしけるが、鴿その足の跖を止むべき處を得ずして彼に還りて方舟（はこぶね）に至れり。其は水全地の面にありたればなり……」とある。

その鴿が、何の役にも立たぬ使者に飛び出して行つたのを紀念するため、何時の頃からこの四月馬鹿の習慣が行はれ出した、といふのである。で、四月一日はどこから來たかといふと、その鴿の放ち出された日が「ヘブライ」族の正月元旦で、それは『われ等』の四月一日に當る……といつた次第なのだ。

キリスト教は、もう一つ四月馬鹿に關する説明——キリスト裁判といふことを——を持つてゐるが、これはどうも後からこぢつけたものとしか思はれないし、餘り面白くもないから略すことにして、最後に我々が最もさうらしいと思ふ説を記して置かう。

四月の魚馬鹿な魚

フランスでは「四月馬鹿」にひつかかつた人を「四月の魚（ポアソン・ダヴリール）」と呼ぶ。

ポアソン・ダヴリール、四月の魚——それは鯖のやうな魚で何でも喰ふ——從つて容易に針にかゝる——つまり馬鹿な魚。無暗矢鱈と人にかつがれるやうな奴はこの魚によく似てゐる。といふところからだ。

ところで、フランスに於いて四月馬鹿の習慣が行はれ出したのは何時の頃からであるかといふとそれは今からザッと、三百五六十年前、今日我々が使用する暦（カレンダー）がこの國に用ひられてから間もなくのことであつた。

一體、現在殆んど世界中で使用されてゐる暦（カレンダー）——今の一月一日を以て一年の最初の日なりとするを——を、最初に使用したのはフランスである。シャルル九世が一五六四年に、勅令を以てそれを命令してゐる。その時までは、いはゆる年賀、お年玉は四月一日に行はれた。即ち四月一日が一年の第一日となつてゐたのだ。

何しろ今まで何百年間も使ひなれた暦を捨てゝ、まだ世界の何れの國にも行はれてゐない新暦を用ひなければならなくなつたのだから、勢ひ頭の堅い連中はシャルル九世の命令を喜ばなかつ

た。なんだ新暦だなんてくだらない、まだ雪がチラつくのに新年もないものだ……といつたわけで、表面はさもかく、そのお仲間うちでは依然として、四月一日をお正月にしてゐる。自然かかる人達は新らしいもの好みの連中からは馬鹿にされた。

即ち彼等の氣持を尊重するやうな顔をして、四月一日になると、或ひは彼等に贈物をし、或ひはまた彼等を新年の宴に招待する……無論、面白半分にだ。頭の堅い連中は覺りも鈍いから、「新年の宴會」と思つて喜んで出かけて行く。と、會場には「お目出たう！」てな貼紙が張りつけてあるだけで誰もゐない。「お年玉」をあけて見ると、何重にも包んだ中から石ころが現れる。對手が誰だか判らないのだから怒つたところで仕方がない。……そこで「四月馬鹿」、「容易に針にかゝる魚ボアソン・ダヴリール」といふことになつたのだ。——これが最もさういいと思はれる説。

さて、起原の詮索はこのくらゐにして置いて、次にその實際行はれた方面を少し調べて見やうと思ふ。

カイゼルの觀兵式

それはまだドイツのカイゼル、ウイルヘルム二世がベルリンで威望隆々たりし時のこと。

突如シトラスブルクの町に『本日午前十時カイゼル來りて觀兵式を行ふべし』の飛報が來た。頃しもバルカン半島には戰雲靄びき、ヨーロッパの天地は不安の念に包まれ、ドイツ、オーストリア、イタリヤ三國の同盟軍は、ロシヤ、フランス兩國の國境に油斷なく眼を注いでゐた最中であつたから、この飛報がシトラスブルク市民を驚かしたことは實に想像以上であつた。

急遽、忠勇なるシトラスブルク師團の兵は武裝して繰り出す。師團長、市當局をはじめ諸々の官公吏はみな正裝し、勳章をブラ下げて觀兵式場へ集る……まるで動員令でも下つたやうな騷ぎである。

然るに持てご暮せごカイゼルは愚か、侍從武官すらもやつて來ない。そこでいさゝか怪しいといふわけで、その電報を改めて詮議して見ると、電文には明らかに

『シトラスブルク全衞戍兵は武裝して兵營を出づべし。余は直ちに自動車には觀兵式場に臨むべ

し。ウイルヘルム」

と、なつてゐる。こゝろがよく〳〵調べて見ると、發信局は、飛んでもない田舍の町、到底カイゼルの行きさうもない處の郵便局だ。これは、こいふので狼狽てゝベルリンの陸軍省に照會すると、「そんな催しはない」との返事。そこでヤット何者かの惡戲だらうこいふことになつたが、ヒドイ目にあつたのは軍當局だ。新聞には散々に叩かれる、お役は御免、世間からは間抜けの標本にされるこいふ始末。

後でよく〳〵調べて見ると、その電報は、休職を命ぜられて喰ふに困つた一軍吏が、ヤケ酒をあはつた揚句やつた仕事だつたこいふことだ。

大事件が突發した

しかし、それは一つの笑ひ話を製造しだけで濟んだからまだよかつたが、今度は笑つて濟ませない大事件が突發した。

時はそれから二三年後の四月馬鹿の日、場所はハイデルブルクである。

ある一人の剽輕な男が、何か奇拔な、萬人をアツ！と云はせるやうなことをやつて見たいものだこいふ不穩な考をいだいて町を歩いてゐた。が、なか〳〵いゝ妙案が浮ばない。

こう〳〵考へながら停車場へ來た。見ると、今日が四月馬鹿の日だなどゝは考へもしないやうな紳士淑女がゾロゾロ歩いてゐる。驛長が嚴格めしい顏をして發車の合圖をする。ピー！と答禮をして長い列車が走り出す。「あゝつまらないな……」と、この時彼の頭にはトテモ素的な考案が浮んで來た。「ウン、さうだ！これだ！」

そこで彼は大いそぎで町へ驅け出した。そして、とある古着屋に飛び込んで、スツカリ驛長の扮裝を調へると、飛ぶやうにしてまた停車場へ引返した。

一體、彼は何をしやうこいふのだらう？　賢明なる讀者よ、この「不穩な考をいだいた男」が何を仕出かしたこ思ふか……おどろくべし、彼はいきなりプラット・フォームに飛び出して、折から停車してゐた列車に發車の合圖をしちまつたのである。

列車は至極平凡な答禮をすると、いきなり全速力で走り出した。そして、極めて勇敢に貨物列車をつき飛ばした。こころが、折惡しく其勇敢なる列車には、「四月馬鹿」を輕視した人間が滿ちあふれてゐた。

その日の夕刊新聞は何れも大標題でこの椿事を報道した。道學者は得たり賢しこ「四月馬鹿」

の習慣に「惡」の字を附し「惡習廢止論」を唱導した。法學者は徹夜してこれが禁止法案を書き上げた。當局者は取りあへず「以後、公安を害するが如き行爲は『四月馬鹿』と認めず。これを犯す者は嚴罰に處す」旨を布告した。こはマルで嘘のやうな話である。

クリスマス

その由來

クリスマスはヨーロッパの最大祝祭であり、最も重要な年中行事である。我國では元旦が三百六十五日の中で最も大切な日であるが、ヨーロッパでは元旦よりもこの十二月二十五日が重視されてゐる。

一體この大祝祭は何時の頃から行はれたものであらうか。不幸にして確かな文獻がないが、現今のやうな祝祭は中世時代にドイツのシトラスブルクで行はれたのが抑もの始めで、それが約二百年間にライン河沿岸地方一帶に擴がり、十九世紀の初葉にはゼルマン全國に、それから五十年の後には、各キリスト教國に傳播して、今日のやうな盛大な年中行事となつたのだといふ說がある。

しかし、よく詮索して見ると、次のやうな說もある。

デサロニケ人が知事に反抗したといふので、大いに憤慨して、その嫌疑者七千人を大劇場の中で虐殺したテオドシウス王が、ミラノの大寺院に入らうとした時、『多くの良民を虐殺した罪惡の手をもて神を禮拜することはできない。』と云つて、斷然會堂に入ることを拒絶したので有名な、アンブロウスといふローマ教會の監督が、まだ

〔第一圖〕クリスマスの玩具

地方の知事を務めてゐた頃、一人の妹をローマの尼院に送つた。するとその時、教會の監督が彼女に對して、『多勢の人々は今日しもキリストの降誕を祝ふために、かくの如くこの一堂に集つて來た。』と語つた。然してその日は、西暦三百六十年の十二月二十五日であつたといふのである。もし、この說が事實だとすれば、西暦三百六十年のローマ人は何等かの理由によつて、十二月二十五日をキリストの誕生日だと信じて、現今のやうな盛大な祝祭はしないまでも、教會に集つて『久しく待ちにし主は來ませり。』と歡びの歌を唄ふ程度のことはしてゐたといふ結論が生ずる。

しかし、原始文化の研究に於て世界の權威と尊敬されてゐたタイラア博士は、その著『原始文化』第二卷に於てクリスマスの起原に說き及び、それを東方の太陽禮拜と結びつけやうとした。その博士の言には耳を傾くべきものがある。試みにその所說を拔萃して見る。

『近代の大抵のキリスト教國には、古代の太陽崇拜の祭儀が、二つの方法で取り入れられてゐる。その一つは、東を向くことに結びついてゐる儀式であり、他の一つは、キリスト教と合體してゐる太陽祭典である。春季は大抵の民族に新年だと考へられてゐるが、それの含んでゐる太陽崇拜的特質が多量に復活祭に取り入れられてゐる。北ドイツでは復活祭に山々で大篝火を焚く風習がまだ廢れてゐない。サクソニヤやブランデングルクの農民は、復活祭の朝早く山頂に登つて、此朝に限つて嬉しさうに三度跳るといふ太陽を眺める。この風習はイギリスにも古くからあつたかのサー・トーマス・ブラオンは『太陽は復活祭の日にも跳りはしない。』と放言したため陳謝せしめられたことがある。』

タイラーは更にクリスマスに說き及ぼして『ローマの冬祭は十二月二十五日に擧行されたが、それは紀元百七十三年、オウレリヤヌス帝が、太陽神のミツラの崇拜に結びつけて特に制定せられたもので、その祭日は『不滅の太陽の誕生日』と名づけられた。この祭日が紀元四世紀の頃西方の教會に採用せられ、それからだんだんと東方の教會に輸入せられて、遂にキリスト降誕祭と化したのである。』

かく根掘り葉掘り調べて行くと、結局クリスマスはローマの冬至祭が轉化したものであるといふことになる。が、起原はともかくも、今日の社會に於て、クリスマスほど兒供達に喜ばれ、彼等の宗教心と道德心とを向上せしめる手引となる祝祭は少いであらう。

ここの教會でも、また家庭でも、クリスマスの祝祭を行ふには、必ず室内に常磐木を立てるが、その由來については種々の傳說がある。その二三を擧げて見やう。

クリスマスの木

◇

古代エジプトには、冬至祭にナツナ棕梠を以て家を裝飾する風習があつた。この樹はエジプト人にこつては、『死に對する生の勝利』（卽ち不死）の象徵（シンボル）であつたから新たに迎へる年の生々の象徵ともされたのである。――つまり我國の門松と同意味のものだつたのだ。

◇

スカンヂナビヤの神話の中に『祭木』といふものがある。これは打ち殺されたある相思の男女のために立てられたものであるが、クリスマスの頃になるとその幹からも枝からも美しい光を發し、雨や風に會つても消えなかつたといふ。

◇

マルチン・ルーテルが、輝く星空の下の、雪に蔽はれた林のまたとなく美しい光景を自分の妻や子に話して聞かせた時のことである。彼は自分で庭に行つて樅（もみ）の枝を切つて、その小枝に數十本の小蠟燭をともし、林の光景は恰度こんな風だつたと說明した。

この中のどれと最も密接な因緣があるのか、不幸にして自分は知らない。が、思ふにクリスマス・ツリーは我國の門松と同巧異曲のものではあるまいか。

ミヅルトー

クリスマスにはまたミヅルトー卽ち寄生木が附き物になつてゐる。フレーザー教授は、クリスマスの前夜祭にヨーク・ミンスタアの廟へこのミヅルトーを持つて行く儀式習慣が存在してゐた點に着眼して、それがサツルヌス祭に起原してゐることを暗示し、ミヅルトーで寺院を飾る風習は、ガリヤ人やブリトン人や古代のヨーロツパ北部のケルト種族の間に擴つてゐた迷信に基いてゐることを『ゴールデン・ボウ』において述べてゐる。

いつからともなく、遠い〳〵昔からヨーロツパではこの寄生木（ミヅルトー）が尊敬の的となつてゐた。

プリニウスの記載によると、ケルトの祝人（いはひびと）はこの木を崇拜して、その親木が樫である場合にはそれまで神聖視したといふ。何故そんなに寄生木を有難がつたかといふと、彼等はそれを天から

クリスマスの木

ここの教會でも、また家庭でも、クリスマスの祝祭を行ふには、必ず室内に常磐木を立てるが、その由來については種々の傳說がある。その二三を擧げて見やう。

◇

古代エジプトには、冬至祭にナツナ棕櫚を以て家を裝飾する風習があつた。この樹はエジプト人にとつては、『死に對する生の勝利』（卽ち不死）の象徵（シンボル）であつたから新たに迎へる年の生々の象徵ともされたのである。——つまり我國の門松と同意味のものだつたのだ。

◇

スカンヂナビヤの神話の中に『祭木』といふものがある。これは打ち殺されたある相思の男女のために立てられたものであるが、クリスマスの頃になるとその幹からも枝からも美しい光を發し、雨や風に會つても消えなかつたといふ。

◇

マルチン・ルーテルが、輝く星空の下の、雪に蔽はれた林のまたとなく美しい光景を自分の妻や子に話して聞かせた時のことである。彼は自分で庭に行つて樅（もみ）の枝を切つて、その小枝に數十本の小蠟燭をともし、林の光景は恰度こんな風だつたと說明した。

この中のどれと最も密接な因緣があるのか、不幸にして自分は知らない。が、思ふにクリスマス・ツリーは我國の門松と同巧異曲のものではあるまいか。

ミヅルトー

クリスマスにはまたミヅルトー卽ち寄生木が附き物になつてゐる。フレーザー教授は、クリスマスの前夜祭にヨーク・ミンスタアの廟へこのミヅルトーを持つて行く儀式習慣が存在してゐた點に着眼して、それがサツルヌス祭に起原してゐることを暗示し、ミヅルトーで寺院を飾る風習は、ガリヤ人やブリトン人や古代のヨーロツパ北部のケルト種族の間に擴つてゐた迷信に基いてゐることを『ゴールデン・ボウ』において述べてゐる。

いつからともなく、遠い〳〵昔からヨーロツパではこの寄生木（ミヅルトー）が尊敬の的となつてゐた。

プリユウスの記載によると、ケルトの祝人（いはひびと）はこの木を崇拜して、その親木が樫である場合にはそれまで神聖視したといふ。何故そんなに寄生木を有難がつたかといふと、彼等はそれを天から

降つた種子から生えた木であるこ信じ、その親木は特にそれを育たしめるために神が選んだものだこ考へたからである。當時でも寄生木はさう澤山はなかつたものこ見え、見附かるこ直ぐ祝人はそれを採取して、神聖なる藥品の材料にした。が、それを採取するには、恐ろしく面倒な儀式を必要こした。卽ち祝人は月初めの第六の日を選び、犧牲こ宴會こを用意をした後、自分は白衣を着けて寄生木の生えてゐる樹上に登り、黄金の鎌でそれを伐り取つて恭しく白衣に包んで下りる。そして、犧牲を供へて、神にそれを受ける人々を幸福に導くやうに祈るのであつた。

彼等の間には、この寄生木で作つた藥業は、それを服すれば仔を産まぬ動物も仔を産み、それをふりかければ、植物は如何なる毒にも冒されないこいふ信仰があつた。また現に我國のアイヌ族もこれを尊重し、これさへ服めば如何なる病氣も快癒するこ信じてゐる。

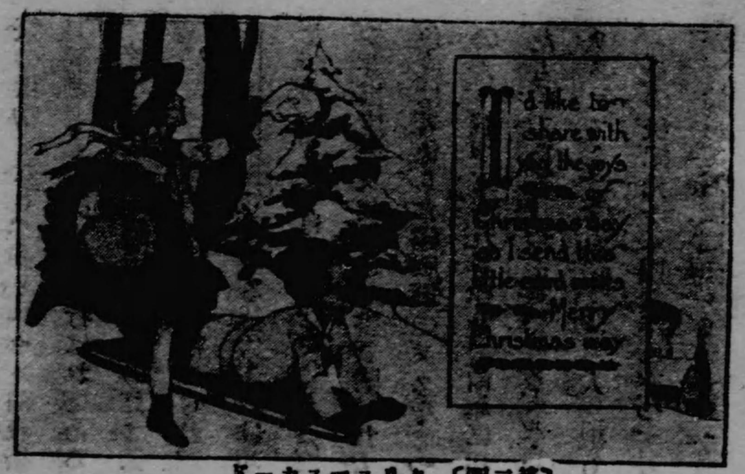
要するに古代人は寄生木が根を地に下すここなしに生育するのを見て、非常に奇異な感に打たれ何かしら不思議な力を有つてゐるものゝやうに考へたのであらう。それが人智の進歩するに從つて單なる迷信に過ぎないこ知れても、それを尊敬し、それを懐しんだ習慣だけは殘つて、冬至

祭の供物こなり、クリスマス前夜祭の景物こなつたものこ思はれる。

クリスマス・カード

現今行はれてゐるクリスマス・カードは、所謂『スクール・ピーシス』なるもの發達したものだこ云はれてゐる。スクール・ピーシスはまた『クリスマス・ピーシス』こも稱せられ、十九世紀の中葉の始め頃流行つた一種のクリスマス・カードである。が、これは現今のそれのやうに繪葉書屋の店から買つて來るわけには行かなかつた。必ず自分で作るべきものこなつてゐたからである。通常は適當な大いさの紙片に、詩歌や芽出度い文句なごを書き附けたものであつたが、中には丹念に鳥や渦卷模樣を描いたものや、無色或は着色した鋼版刷のワクをこつたものもあつた。クリスマスが近づくこ、學校の生徒達はおの〳〵競つてこれを作り、前年に作つたのこ比べて、筆跡や作文の巧くなつたここを人々に示したものである。つまり『スクール・ピーシス』は、我國の書初めの御清書のやうなもので、現今のクリスマス・カードのやうに、人こ取り遣りするためのものではなかつたのである。

その後紀元一八四六年に至つてジョセフ・カンタルこいふ人が、（一說にはホースリイこいふ人が）始めて石版刷のクリスマス・カードをロンドンで發賣したが、要するに好事家を喜ばしたゞけ



〔第二圖〕クリスマスカード

で大した反響もなかつた。

然るに紀元一八八三年頃、市場に現はれた駒鳥や聖技の浮出し繪や、風景を刷出した美しいカードが、偶然人氣を呼び、吾も吾もこれを用ひたので、今まで冷眼視されてゐたクリスマス・カードは急に非常な勢を以て流行し始めた。かくて僅々四五十年間にすつかりヨーロッパの生活化してしまつたのである。

クリスマス・カードと云へば、ハップグッドの女史の『ロシヤ紀行』に面白い噺がある。アメリカの友から女史の許へクリスマス・カードを送つて來た時、ロシヤの官憲は何と思ひ違ひをしたかそれをワザ〳〵檢閲官の手に回附した。その結果は知れてゐる——美くしいカードは檢閲濟の太鼓判で眞黒にされて了つたのだ。』間違ひだらうから噴飯もで

きないが、ロシヤ人は兎角に他國人と見ると危險視する』と女史は苦り切つて書いてゐる。

サンタ・クロウス

明治七年に東京築地の第一長老教會で行はれたクリスマス祝會に現はれたサンタ・クロウスは、麻の袴を着て、靴を履いてゐたさうだが、一般に知られてゐるサンタ・クロウスは、白い羊毛の縁を取つた眞紅の衣を着て、大きな袋を背負ひ、自然木の枝を杖にした、白髭の老翁である。

このサンタ・クロウスの由來について二つの說がある。

その一つは、四世紀の頃ミラの監督をしてゐたセント・ニコラスといふ高僧が、非常に子供好きだつたので、クリスマスの前夜、靴下にいろ〳〵な玩具を入れて、子供の枕もとへ置いて廻つたのが起りだといふのである。また、他の一つは、

昔、ロシヤにニコラスといふ青年があつて、十二月二十三日に町を歩いてゐると、一軒のあばら屋の中から女の泣聲が聞える。不審に思つてソッと窓から覗いて見ると、一人の老人と三人の娘さが、もう飢えて死ぬより外に途がないといつて嘆いてゐるのだ。そこでニコラスは大いに氣の毒に思ひ、親から讓られた金塊の一つを、その晩老人の家の窓から投げ込んでやつた。すると、

老人は神の賜だといつて感謝の祈を捧げた。で、ニコラスは二十四日の晩にもまた一つの金塊を投げ込んだ。老人も娘も前夜のやうに神の賜に違ひないといつて感謝した。ところが、その翌晩最後の金塊を投げ込みに行つた時、ニコラスはその老人に正體を見つかつたが、彼は『それは神樣が私を通して、あなた方に下すつたのだらう。』といつて、強ひてその金塊を受け納めさせた。

それからこのニコラスは、髭が眞白くなるまで、毎年クリスマスの夜には、大きな袋にいろいろの贈物を容れて、ソリに乘つて貧しい家や子供の多い家に配つて歩いたので、何時しか人々は彼を聖ニコラスと呼ぶやうになり、それが訛つてサンタクロウスとなつたのであるといふのだ。

果して何方が眞物か解らないが、兎に角、厚ぼつたい毛皮の外套を着て、大きな防寒靴を履きオマケに橇に乘つて來るところを見ると、南の國の生れでないことは明らかだ。

クリスマスの花

クリスマスには、食卓の裝飾用として、或はまた贈答品として種々の草花が珍重されるが、先づ食卓の裝飾用として最も普通に用ひられてゐるのは左のやうなものである。

ポインセチア　これは別名イースター・フラワー或は猩々木と云ひ、赤い葉の變態である赤色素の濃厚な花で、主として盛花の中心に用ひられる。

スウイート・ピー　我國では麝香連理草ともいふ。イギリスでは恰度我國の菊花と同樣に所謂國花として珍重する。その芳香と花姿のやさしさは、盛花の二段目に盛るに適してゐるので、クリスマスの時だけでなく、平常でも食卓の盛花

〔第三圖〕　スキートピー

用として珍重される。

プリムラ　我國でいふ櫻草。

その他、シクラメン、ペコニヤ、木犀草、水仙、百合の早咲等。

然して、これらの花を盛花とするには、なるべく丈の低い硝子器を撰んで、その中心に前述の

ポインセチアを置き、第二段目には、スウイートピーの桃色のものを配置する。そしてその周圍にシクラメン、ベコニヤ、プリムラ等を適宜に混ぜ合せて挿し、最下部には、ネフロレピス（羊歯類）かアジアンタムを下草として生けるのである。

ついでに食卓の飾り方を記せば、先づ卓の中央に右の盛花器を置き、それからスマイラックス（蔓性草）を引張つて、それで客の頭數だけ食卓に區劃をつける。そして、各區劃内に匙、ナイフ、フォーク、スプーンの類を置き、その左手には、プリムラ、アスパラガス、スウイートピーの小さなボタン・ホール（洋服の襟又はボタン穴に挿す花）を、右手には、お土産用の花束をパラフイン紙か何かに包んで置く。

花束は勿論各花の表象する意味を考慮して作られる。例へば少年、少女に贈るものには、

スウイートピー……愉快
プリムラ（櫻草）……少年時代
ミグノネツト（木犀草）……汝の品性は優れたり
これにアスパラガス、プリモーサスを添へる。

また二十歳以上の人へ贈るものには、

マガレツト……眞實
ミグノネツト……前掲の意
ポインセチア……吾心は燃ゆ
カーネイシヨン……熱心
これにネフロレピスを混へて川ひる。

こいつたアンバイ。たかゞ草花を贈るにも、吾々の如き頭の悪い人間は差詰め百科辭典でも用意してかゝらなければ、思はぬ不覺を取らなければならないこいふ次第である。

さて以上は花の贈答に關する形式であるが、クリスマスには、また餘興として『花占ひ』こいふ聞白い遊戯が行はれる。その遊び方を一寸紹介して置かう。

先づ名刺か厚紙かで小形のカードをつくり、各カードに次の様な草花の名を一種づゝ記入する。

（性質の部）

いはれんけ——活潑

いさらん――雄壯
らうばい――仁慈に富む
ハイドランジヤ――自慢家
バルサム(鳳仙花)の黄――短氣
にはこ――熱心
ベゴニヤ――懇切
ベラゴニユーム――意志の純潔
クロバー――勤勉
ナーシサス(水仙)――冷淡
まつばぼたん――無邪氣
花しようぶ――優しい心の持主

(職業の部)

きく――學校の先生

さるすべり――代議士
こばんさう――銀行家
パンジー(三色すみれ)――詩人
アカンサス――藝術家
時計草――僧侶
もくれん――畫家
なでしこ――軍人
ボティトーの花――慈善家
きすみれ――農業に從事するもの
あしの花――宗教家
あざみ――學者
きだちろさう――醫者

(未來の部)

むらさきれんげ――警戒を要す
すゞらん――幸運
シネラリア――最後は幸なり
石竹(藍色)――獨想通りに成功する
松蟲草――悲しみに包まる
はるしやぎく――常に歡びあり
夾竹桃――未來は幸福に送れる
ほけ――平凡
パンパスグラス――未來は輝く

ここには便宜上、各草花の表象する意義を附記したけれども、それは勿論カードには記入しない。

さて、カードが出來上つたら、それを集つた人々に引かせ、占者は各草花の表象する意味を覺えてゐて解答を與へる。若し覺えてゐられなければ、何かに書附けて置いてもよいが、その場合

にはそれをひきてに見せないやうにしなければ面白くない。

これでクリスマスに關する講釋は一通り濟んだから、次に在ベルリン某氏の見聞記によつて、ドイツの智識階級の家庭に於ける聖誕祝會(ヴァイナハテン)の模樣を偲ばう。

ドイツのクリスマス

その日は小雨がソボ降る寒い日でした。加ふるに夜に入ると靄が立ちこめて半町先きも見えない位。私は外套の襟を深く立てゝG博士邸へと急ぎました。

待合室に入ると早速二三の先着の客に紹介され、暫くの間それらの人々とお話をしてゐるうちに時間が來たといふので一同次の部屋へ移りました。その部屋には例の聖樹があつて。銀絲、消石玉、蠟燭、花火、お菓子、小型の玩具などが美しくブラ下つてゐます。

電燈を消して、先づG夫人のピアノに合せて聖誕を祝する讃美歌を唄ひ、次にG博士の末子ウイントフリードといふ九歳の少年が、可愛らしい水兵服を着てお父樣(とうさま)の前に進み出て、アイヘンドルフの作『ヴァイナハテン』といふ詩を諳誦して大喝采を博しました。

その詩を譯して置きませう。

(一)

市場に街に　人を見ず
家に差す燈も　物靜か
物思ひつゝ　行く道は
祭の宵の　はれやかさ

(二)

女は窓に　うちつゞひ
樹を美しく　飾る間を
兒等は興じて　眺めたり
こよなき幸に　いさみつゝ

(三)

都門に沿ひて　さまよへば
いつか廣野に　出にけり
燿きは空　身に踊やく
この世の廣さ　しめやかさ

(四)

星は星座を　うち廻り
雪の廣野の　寂しさに
微妙の歌の　おころかさ
光榮の時　やがて來つ

やがて點燈されるこ、お店のやうに陳列された贈物（プレゼンツ）の前に主人から下女までが竝びます。いろいろこ欲しさうなものがあるので、兒供達は眼を丸くしてゐます。こいふのは、この贈答品はこの時まで、何が誰に贈られるか夫婦間こ雖も絶對に祕密にして置くこゝになつてゐるからなのです。私は三人の兒供達に各望むまゝ種々のものを買つて贈りましたが、私が貰つたものは、ドイツ譯の「ハムレット」の筋本、汽車時間表、ネクタイ、百年前の古銅版畫こ擴大鏡（これは博士の母堂から）なごでした。面白いこ思つたのは、主人から夫人への贈物です。それは普通の小さ

な人形でしたが、その手に着物一着の代金受取證が結びつけてあつたのです。つまり、それは夫人のために着物を買つて贈る筈だが、ごんな色合、様式がよいか判らないから、兎に角その代金だけを拂つて置いた、だからお前の好きなものをその服屋で勝手に撰んで拵へるがよい、といふ意味なのです。陽分洒落た、しかも氣の利いた贈物ではありませんか。

贈物が濟むと、此度は夫人のピアノに合せて次男のヘルムトがヴアイオリンを奏しました。それから聖樹の花火線香に點火し、それをしほに、美しく飾つた食堂が開かれました。その御馳走の數々、食卓はビール黨とボンチ黨とに別れて着席しました。

宴を閉ぢたのち餘興の「人形芝居（カスペルテアーテル）」が始まりました。芝居の筋は最近博士の家に澤山馬鈴薯を買入れたことから思ひついて、博士自身が脚色せられたもので、舞臺は遠くエジプト。ユダヤ人や巡査や鰐などが現はれ、最後に主人公の親孝行な兒が鰐退治をするといふ風なもので、中には馬鈴薯で作つた人形の首などがあるのも愛嬌でした。

幕が閉ると、同じ舞臺へサンタ・クロウス爺さんが現はれて、人々の名を呼びます。呼ばれた人が一人づゝその前へ行くと、お爺さんはチャンと宛名の書いた包物を與れます。早速開封して見るこ、中には何か品物こ、それに添へた各一篇の詩が入つてゐます。これは何れも博士が卽興的にものせられた詩で、私の貰つた包の中には一本のビールに添へて次のやうな意味の詩が入つてゐました。

『貴下は好んでお茶をお飲みになるが、酒も隨分召し上る。ドイツでは酒よりもビールの方が普通です。この瓶に馴れるこ、廉い値でおなかを充たすことができます。若しドイツのこの習慣に從つてビールをお用ひになれば、ドイツ語の上達も速かでしよう。』

なかゝ〳〵面白いこすつかり感心させられました。中には隨分皮肉なのもあつて、貿易商のK氏なごも小さな二十日鼠を貰ひ『汝はこの鼠のやうに活動し發展し過ぎる。』といふので『こりやヒドイ、ヒドイ。』こ頭をかゝへて閉口してゐました。下略。（最後の一項週間朝日四―二九による）

ヨーロッパの手相判斷

手の形や掌の筋を左見右見、こつくりこ拜見した上、さて、こいやに改まつて、『ハハア、あなたの御一生には苦勞が絶えない。此處二三年は八方塞がりの體ぢや。それに近く女難があるから愼しまつしやい』なごこ、おごかして置いて若干の占料をせしめる手相判斷なるものが、綠日にでも行くこ其處此處に店を張つてゐる。當るも八卦當らぬも八卦、何だ馬鹿馬鹿しいこいつてしまへば何でもないが、氣にするこいやに氣になるもので、殊に自分の弱點でも云ひ當てられるこ、最初は馬鹿にしてかゝつた者もつい眞劍にそれを信じるやうになる。そこがまた手相見や人相見のつけ目なのだが、人間である以上誰でも自分の弱點については人に云はれなくこも相當神經過敏になつてゐるのだから、まるで見徹したやうにそれを云ひ當てられれば、氣味が悪くなるのもまた無理はない。

それにしても手の筋こ人間の運命こに關係があるなごこ考へ出したのは、一體何處の何者なのだらう。易は東洋では支那、西洋ではカルデヤが本場だこいふここになつてゐるが、手相占ひの起原は明らかでない。だがインドの婆羅門僧は紀元前數百年こいふ古い時代からこれを心得てたこいふここだ。

かのギリシヤの碩學アリストートルがペルシヤに遊んだ時、同地で發見(?)して、アレキサンドル大王に獻じたと傳へらるゝ金文字の「手相占術書」もインドの婆羅門僧が著したものだこいふ。そしてその飜譯書——ラテン文、譯者イスパヌス——こそは、始めてヨーロッパに「手相占ひ」を紹介した文獻なのである。卽ちヨーロッパの「手相占ひ」は、インドから傳つたものなのだ。

無論その頃のここだから、書物を讀むここができたのは極めて少數の人だつたに違ひない。殊にかういふ奇書は餘程物好きの人でもなければ讀まなかつただらうから、一般にこの占術が知られたのはズッと後のここだらうこ思はれる。

現今では殆んご全ヨーロッパに流布してゐるが、イギリスやドイツでは、『報酬を取つて占術を行ふ者は相當の刑罰に處す』こここになつてゐるので、これを傚の種にしてゐる者はない。——とはいふものゝ、それは表面上の話で、內密には隨分あるやうだ。殊に例のジプシー——主こしてサーカスなごの野天興行をなしつゝヨーロッパ全土を放浪つてゐる特種民の中には、この「手相占ひ」を商賣にしてゐる夥しい「女占者」がゐる。

無論これに手相を占つて貰ふのは、大道の易者先生に人相判斷をお願ひするくらゐの氣持、面

白半分でだらうが、妙によく當るので、つい過分のお心附けを置いて來るやうになるさうだ。

西洋の「手相占ひ」の術さいつたところで、我國のそれと全く違ふわけではないが、多少趣を異にした點がないでもない。彼我對照して見ればかなり面白い。

しかし、一々例を引いて說明するほどのこともあるまいから、こゝにはたゞその原則なるものを紹介するだけに止めて置く。

最も大切な諸筋

【第四圖】

い　ヂユピター　先づ最初に術語の說明をしてからう。

ろ　サタン

は　アポロ　圖にあらはした通り、掌指を除く四本の指にはヂユピター（人差指）、サタン（中指）、アポロ（紅差指）、マーキユリー（小指）こそれぞれギリシヤ神話の神の名をこつたのち　運命の筋

に　マーキユリー

ほ　ピナスの帶

へ　情緒の筋

と　頭腦の筋

ち　運命の筋

り　生命の筋

ぬ　ピナスの山

る　月の山

名稱が附いてゐる。各指の附根は「山」さいふ。

掌の筋は最も肝要だから、細かい筋にまで一々もつこもらしい名稱がついてゐるが、その中で最も重要なのは圖に示した三筋、卽ちヂユピターの山の下から横に走つてゐる『情緒の筋』こ、その下の『頭腦の筋』こ、『頭腦の筋』の起點から下方に向つて斜に走つてゐる『生命の筋』こである。

この三本の筋は大抵の人にあるものだが、『情緒の筋』こ『頭腦の筋』こが、密着して一本になつてゐる人も尠くない。

それからこの三筋に劣らぬ重要な筋は、通常サタンの山から、竪に下へ向いて走り『生命の筋』に溶け込んでゐる『運命の筋』だが、これも人によつては『頭腦の筋』の邊で止まつたり、『情緒の筋』まで來て立消えになつたりしてゐることがある。この筋の判明してゐない場合には、その人の運命は動搖してゐるこ見ていゝ。

この外、比較的鮮明に現はれてゐる筋で『健康の筋』——普通マーキユリー卽ち小指の山から起つて、掌の眞中か、又は『情緒の筋』の邊まで延びてゐる——こいふのがある。が、この筋の意義象徵は、少しく曖昧なやうに思はれるから、說明は除外する。

掌には、指の根元にある四個の『山』の外に、大切な隆起が三個ある。

重要な三個の隆起

その一つは拇指の下方にあるビナス(愛と美の神)の山と稱するもので、これは名稱通り、愛情の深淺をあらはす。

も一つはマーキュリーの山の下方、掌の外側へふくれ出してゐるマース(軍神)の山で、これは勇氣の有無をあらはす。

他の一つは、マースの山の下方にあるルーナ(月)の山だが、これは他の二個の山ほど判然たる意義は有してゐない。

以上が手相判斷に缺くべからざる豫備智識である。さて、いよ〳〵本論に入らう。

四角張つた手

手はその形狀によつて大體三種に分類される。卽ち圓錐形のもの(藝術家)、四角張つたもの(事務家)及び特別に大きい粗野なもの(豪氣磊落な人物)である。

四角張つた型の手は、最も普通な形式であるが、この型の手は、健實な人物をあらはす。冷靜沈着、果斷にして規律正しく、するべきことが至つてきちやうめんといつた風で、すべて物質的には成功する質の人物である。

この型の手は、通常、中指(サタン)の長さと掌の長さとが等しい。故に、自分の手が果してこの型に當はまるや否やを最も簡單に調べるには、右手の中指の尖端を、左手の中指の根元に當てて、中指の根元のところと掌の附根とが、ピッタリ一致するかどうかを見ればよい。もし、一致するやうだつたら、その人は前述の性格を表徴する四角張つた手の持主である。

藝術家肌の手

卽ち物質的には成功する人だ。しかし、氣の毒だがこの型の手の持主は、色戀の沙汰には至つて縁が薄い。女に手出しは無用也。たとへ手を出しても先づ成功は覺束ないといふ覺悟が必要だ。石橋を叩いて渡るといふのはこの型の人物で、律氣で萬事に用意が周到、しかも、理性が勝つてゐるから極めて專制的で、狂熱なさは薬にしたくもない。卽ち、女にとつては餘りアリガタクない人物。

圓錐型の手――すらりと長く、しなやかで。指の尖端の方が尖つてゐる手の持主は大體に於て藝術家肌の人物。

この場合、指尖の尖り具合が、ひどければひどいほど藝術愛好の念が强い。が、その代り物質に對しては至つて無頓着で、加ふるに浮氣者だ。贅澤で懶惰者であるところもその特徴。

だから、この型の手の持主は、商賣などに野心を持つとキット失敗する。

特別に大きい手

特別に大きいガサツな手の持主は、氣質もまた荒つぽい元氣者で、細かい事務的の仕事よりも戸外の仕事に適する。冒險家や探險家は大抵この型の手の持主だ。尤も特別に大きいガサツな手といつても、荒くれた勞働などのために大きく太く逞しくなつたのは別物で、それは氣質や才能には全然影響しない。卽ち先天的に大きくてガサツでなければ、この型には當てはまらない。

指の長短と性格

指の長短もまたその人の性格をよくあらはす。

短い指の持主は、行動も考へもスバシコイ、何事にもくよ〳〵しないといふ質の人。

長い指の持主は一概には云へないが、概してその反對——鈍くさも苦勞性であることは否まれない。

皮膚の色も、氣質判斷の材料になる。白い手の人は利己主義者で、赤いのは、人から好かれる類もしい性格を表はしてゐる。

拇指とその節

拇指は、手の中で最も大切な部分で、その發達がよければ、手の他の部分に表はれた不良傾向を打消すが、反對にその發達が悪ければ、他の部分のいゝ徴候を壞なしにする。

なほ部分的に云へば、その一の節は『意志の力』をあらはしてをり、二の節は『推理判斷力』を示してゐる。然して、一の節と二の節との長さが同じであればそれは申し分のない全くお誂へ向きの性格——意志の力と、理性の力とが平均に發達してゐる性格の持主。若し第一の節が長くてゴツ〳〵してゐれば、それは極めて獨斷的な、滅多に『自分が間違つてゐた』『これは僕が悪かつた』などといふやうな言葉は口外しない、平たく云へば强情な人物だと斷定していゝのである。

理性判斷力の發達のよいことをあらはしてゐる指節の持主は、よし意志が鞏固でなくとも、敏感で、恰悧で、決斷力に富んでゐる。

各指の節と關節

ヂユピターの指は、野心を表はす。卽ち、それが、短かければ、野心が乏しく長ければ野心が強い。ナポレオンは、この指の恐ろしく長い人だつたさいはれてゐる。太閤樣のヂユピターも相當長かつたにちがひない。

思慮分別さ、道德心さは、サタンの指にあらはれてゐる。この指の破格に長い人は十中八九まで憂鬱性だ。

アポロの指は、技藝の表徵で、事務の才さ辯口の才さは、マーキユリーにあらはれてゐる。然して、それらの指の附根の山も、またそれ〳〵の指のあらはす才能や氣質の巧拙を示してゐる。

サタンの指が長くて、その下の山の高い人は、慨して病的で陰險である。

拇指さその人の性格さの間に密接な關係があることは既に記したが、拇指以外の四指の節や關節にもまたそれ〳〵意味がある。

卽ち各指の尖端から數へて第一の節は直覺力を、第二は理性の判斷力を、第三は物質的な慾望をあらはしてゐる。また第一の關節——第一節さ第二節さの關節——は、智能の才を、第二は物質慾の强弱を示す。

掌の諸筋と運勢

いつもキチンさした服裝をして、靴なさもピカ〳〵光らしてゐる人物の指の第二の關節に注意して見給へ。キット上の關節よりも幾分かよく發達してゐるであらうから。

その他、拇指の上の節がよく發達してゐる人は、事理明白に判斷ができて、するこさなすこさ思ひ通りになる。卽ち大事業なさのやれるのはこの型の人物だ。それからまた、さの指の關節もすんなりさ滑らかに美しく發達した人は、藝術家さして成功する。

『情緒の筋』さして最も理想的なのは、ヂユピターの指の下から起つて、同じ長さの派出線を有するもので、それは高雅、健實な人物であることをあらはす。がもしそれが、サタンの指の下から起るさ、サタンの指の持つ特徵に影響されて幾分か氣質が憂鬱に傾いたり、利己的になつたりする。然して、この筋は通例アポロの指の邊まで延びてゐるが、あまり極端に延び過ぎたのは、嫉妬心の强い證據で、のべつ『犬も喰はぬ』やうな活劇を演ずる主役には、さういふ筋を授つてゐる人が多い、早速檢査して見たまへ。ウソは云はないから。

普通によく發達した『頭腦の筋』は、サタンの指の下まで行つてゐて、そこから掌の方々へ分岐

してゐる。その場合には、當人が智能のすぐれた人物であることをあらはし、もしこの筋が、サタンの指の下方から『月の山』をさして曲つて走つてゐる場合には、想像力の強い人物であることを示し、同じくサタンの指の下方から『情緒の筋』の方へ向いて走つてゐる場合には、常に感情に支配されてゐる人であることをあらはす。

「生命の筋」は、通例、上方から數へて見て、人々の命數の長短を推定する。この筋が中途でキツパリ切斷してゐるのは、何歳かに達すれば必ず死ぬといふ凶相である。またその筋の半頃に、恰度南京玉を絲に通したやうな形の島ができてゐる場合は、近く大病にとりつかれるといふ徴候であり、その島が短形の筋で包圍されてゐる時は、如何に悪くなつても癒るといふ表徴である。

「運命の筋」は、人によつてみな起點が違つてゐる。が、大體に於てこの筋が掌の眞中から出てゐる人は、結局は成功するが、それまで非常な苦勞をしなければならぬ——いはゞ大器晩成型。またこの筋が、グラついてゐて、切れたり合つたりしてゐる人は、ムラ氣で落附がない。若い時から目的を定めて一途に猛進し、立派に成功する人は、この筋が掌の底から眞一文字に立つてゐる。

精密に調べると、まだ掌中には、無數の細い筋があるが、その中で、ビナスの山の上方を、『生命の筋』と並行して走つてゐる一線は『病氣の筋』といつて非常にいゝ筋だ。これがハッキリしてゐる人はたとへ『生命の筋』が切れてゐても心配する必要はない。病氣が出ても、ものゝ見事に退治してしまふといふ吉兆を表徴してゐるのがこの筋だからである。

戀の勝利者

「生命の筋」と「頭腦の筋」とが近寄り過ぎてゐる人は、意志なり何なりすべて弱い。反對にその二筋間の距離の遠い人は、獨立心に富んでゐる。が、極端にその間隔が廣いのは、えて尊大で、人を人とも思はぬといつた嫌ひがある。

また、『運命の筋』が『生命の筋』から離れ、手の外側に向つて切れてゐる場合には、運命が外界によつて左右され勝ちだとされてある。つまり不可抗力の災害に屢々遭遇するとか、種々の羈絆や束縛のために己むを得ず心にそまぬ仕事に從事しなければならないとか、やうやく商賣がうまく行き出したところへ、恐るべき不景氣が襲來して、せつかくの苦心も水の泡になつてしまふとか、ここにかく絶えず外界からの災を蒙るといふのだ。

以上はすべて右の手について說明したのだが、この原則はそのまゝ左の手にも當てはまる。が此際、右の手は、ごちらかゞ云へば各自の後天的素質、卽ち境遇や修養の力で育て上げられた氣分才能の特徵を多く表はし、左の手は主として、遺傳的素質を表はすごいふことを心得て置く必要がある。

まづこれで大體述べ盡したやうに思はれるが、たゞ一つ大事なことを書き殘してゐる。それは『ビナスの山』が特別に大きい——或は高い人は戀の勝利者となるポシビリテイーを多分に持ち合せてゐるごいふ原則だ。

讀者よ、若し、この『山』が特に低いやうであつたら、ラブ・レターを書くのは止めにして體操でもやり給へ。

ヨーロッパの成年式

成年式と元服

一般にキリスト教國では、男女ごも十四歲乃至十六歲の間に、成年式を擧げることになつてゐる。成年式はもごより宗教的儀式の一つで、イギリスでは之を『コンファメイシャン』ごと云ひ、ドイツでは『コンフイルマチオン』ごと呼んでゐる。この言葉の意義から觀るごも、寧ろ『確信式』ごでも譯する方が應はしいかも知れないが、子女はこの儀式によつて益々その信仰を堅くするごごもに、親または社會からいよ〳〵一人前の人間ごして遇せられるのであるから、成年式ごは見做しても差支へはない。

併しこの成年式は我國の所謂元服式ごは大分趣を異にしてゐる。元服式はヨーロッパの成年式ほごには宗教的意味を持つてゐないのみならず、それを行ふものは、主ごして公卿、武士の上中流階級に限られてゐたが、ヨーロッパの成年式は、下流社會の子供も必ず之を受けるごごになつてゐる。また我國の元服式は男子のみのものであつたが、ヨーロッパの成年式は男女共通である。換言すれば、我國の元服式は、これを受くる者の人格竝びに社會上の地位を決定する意義が勝つてゐたが、ヨーロッパの成年式は、寧ろ宗教的意義がより多く含まれてゐるのである。

成年式とその準備

ヨーロッパの成年式は、舊教、新教の別なく苟くもキリスト教を信奉する國民はみな之を行つてゐるのであるが、こゝには主としてベルリンの新教の教會に於けるものに就いて記して見やう。

成年式を受ける年齢は先にも記したやうに、十四歳乃至十六歳の間であるから、上中流階級に屬する家庭の男兒なれば中學校(九歳から十八歳に至る九年間の課程)の五六年生の頃に當り、下流社會の男兒なれば、國民學校を卒つて實業補習學校に通つてゐる時代に當る。また上中流社會の女兒なれば、高等女學校(六歳から十六歳までの十年間)の八九學年の時に當り、下流社會の女兒なれば、家庭で働いてゐるか、或は實業補習學校に通つてゐる頃に當るわけである。

式を受ける場所は、無論その所屬の教會であるが、その時期は春のオステルン祭の時、並に秋のミカエル祭の時が最も多い。

然してこの式を受けるには、或一定の準備をなす必要がある。即ち、半年乃至一年半の間教會の主なる僧侶に就いて、特に成年式を受けるための宗教上の教義並びに禮式を習得しなければならない。通常は區々の教會、或は僧侶の私宅で教授を受けるのであるが、希望者の多い場合には特別の學校が設けらるることもある。中學校や高等女學校では多くの場合、この確信式の準備教育を受くる者に對しては、水曜日若しくは木曜日の午後、或は土曜日の半日を自由に休ませ、また級の當番なごを免ずる習慣になつてゐるが、時にはそれがために教會の僧侶と、學校の教師との間に意見の衝突を來すこともある。

儀式の内容

かくていよ〳〵準備教育が完了すると、前述の時期に各所屬の教會に於て成年式が行はれる。この式典にはその教會の全職員が出席し、通常住職が式を司どり且つ洗禮を施す役に當ることになつてゐる。

式が初まると、司式者は受式者に向つて、「已に確信式を受くる年齢に達した以上は、自覺に基ける確固たる信仰を持つて、世のため、國のために働かなければならない。」といふことを經典の言葉を引いて訓戒し、然る後、一人一人に改めて一生涯守るべき經典の格言を授け、洗禮を施す。

式が終ると、列席してゐる親戚、知人はそれぞれ思ひ思ひの贈物をして、お祝の詞を述べる。

またその受式者の家が餘裕のある家庭であれば、盛大な祝賀の宴を張つてそれらの人々を招待する。

この儀式が濟むといよ〳〵受式者は社界の一員として正式に認められるのであるから、服裝も普通になり——即ち男兒はそのズボンが半ズボンから普通の長いズボンに變り、女兒はそのスカートが長くなるとともに、頭髪も所謂お下げから普通の結髪に變る。尤も近年頭髪を短くする風習が流行し出したので、この區別はハッキリしなくなつた、が、尠くもお下げにしてゐる者は未だ成年式を受くべき年齢に到達しない少女であると見て差支へはないやうだ。——それにつれてその態度も何となく大人びて來る。かくてその少年少女はいよ〳〵一人前の男女として人生の行路を辿り初めるのである。

ヨーロッパの婚禮

(一) 一般の風習

婚禮の時期

ヨーロッパでは一般に四月を以て一年中で最も婚禮によい月としてゐる。それは時期が所謂花咲き、鳥歌ふ陽春の候で、暑からず、寒からず、最もこの儀式を行ふに適はしいからでもあるが、また一には二月の半頃から三月末まで例の四旬齋（レント）に當り、五月はまた忌み月となつてゐるといふ關係からでもある。

四旬齋（レント）といふのは復活祭（イースター）（三月二十一日以後の滿月に次ぐ第一日曜日）の前の四十日間を指し、キリスト教——ことに舊教の方ではこれを精進潔齋すべき週間としてゐるので、結婚式などもこの間は遠慮するのである。また五月を忌み月とするのは古くローマ時代からの迷信で、當時偶像信者がこの月に變死者の追悼祭を行つたといふところから、この月に結婚すれば必ず不慮の災難に見舞はれるとか、生れる子供が病身であるとか言つて忌むやうになつたのである。

併し、現今では事實上忌み月も何も餘り問題にはされてゐない。三月でも五月でも双方の都合次第でごし〳〵結婚しつゝある。殊に八月と九月とには休暇が多いので、この間に式を擧げる人

が近來非常に增加したやうである。

かく月の好い惡いは近來餘り氣にしなくなつたが、日に關してはまだ相當注意が拂はれてゐる。古い詩句にも、月曜は有福、火曜は息災、水曜は吉、木曜は苦曜、金曜は損曜で、土曜に幸はなかりけり——とあるが、今でもそれが信じられてゐるらしい。また、お婿樣の誕生日に結婚すれば、最も幸が多いといふやうなことも言ひ傳へられてゐる。

結婚の指環

指環を結婚の印に取り遣りする風習は隨分古くからあつたことらしい。古代のバビロンやエジプト時代にはどうであつたか不幸にしてそれを知るべき文獻がないが、ギリシヤ、ローマの時代にこの風習があつたことは幾多の記錄によつて明らかである。

一體人類が指環だの腕環だの脚環だのといつたものを身に着け初めた動機は、決して身を飾らんがためではなかつた。環を帶びてゐれば、惡魔除けになるといふ信仰からだつたのである。從つて指環にしろ脚環にしろ、本來金屬製に限つてゐたわけでなく、木或に皮革などのものも隨分用ひられてゐたのである。現に未だこの信仰を捨てぬ未開人中には木製のマルデ桶の箍のやうな不細工な環を足首にはめてゐるものが尠くない。こもあれ指環や脚環は太古の民にとつては最も大切なものであり、神聖なものであつた。從つて結婚といふ最も重大な契約の印に取り換はすものとしては、これくらゐ適當な、そして有意義なものはなかつたのである。

結婚指環（マリッジ・リング）は、我國でこそ白金（プラチナ）製だの金剛石（ダイヤモンド）入りだのといつたものが珍重されるけれども、歐米では無飾の黃金製——所謂揷鉾形延べ打ちの金指環に限れてゐる。

そして、それは必ず左手の第四指にさすべきもので、それ以外の指にさしたのでは、結婚指環の意義をなさない。何故左手の第四指が選ばれたのかは不明だが、俗間の云ひ傳へによると、「この指からは一本の動脈が直接に心臟へ通じてゐるといふ信念からかく定つたのだ」といふ。

しかしこれは餘り本當のことゝは思へない。むしろ十本の指の中で最も使ひ途の尠い指はこの左手の紅差指だから、指環のやうなものをはめて置くには一番都合がいい。そこで自然この指でなくてならないやうに考へらるゝに至つたでも解釋する方が妥當ではあるまいか。

蜜月

蜜月（ハネムーン）の習慣は、未開時代の掠奪結婚の遺風である——なぞと云へばヘエーと眼を丸くする人もあるかも知れないが、それは決して牽強附會の說ではない。これを思ふ女を暴力で以て奪つて妻とする風習即ち掠奪結婚が極く普通の結婚法であつた未開時代には、新夫は必ずその奪ひ取つた妻を連れて一時身を隱し、騷ぎが靜まつてから改めて女の親元へ許しを乞ふのが例であつた。だからその旅は今の新婚旅行のやうに、公然（おほびら）の旅ではなかつたのであるが、因襲の久しき遂にこれが一つの形式となつて、掠奪結婚なるものが全然行はれなくなつた今日でも、新婚夫婦は必ず幾日間かの旅をしなければならないものゝやうに考へられてゐるのである。

掠奪結婚の遺風はそれ以外にもある。即ち現今のヨーロッパの結婚式に證人の役を勤める『新夫の介添人』（男）は、往時新婦をその兩親の家から奪ひ出す手助けをした友人に當るものと云はれる。

また蜂蜜は、ごの宗教でも尊い神聖な贈物ごなつてゐるが、これも原始時代の遺風ご見られるご思ふ。

〔第五圖〕婚禮

花嫁の面帕と衣裳

花嫁が被る面帕は、本來『惡魔除け』の目的で用ひられたものらしいそうして以前には新婦は婚禮の日夫以外の男の前では如何なる場合にもこれを脫がぬごごになつてゐた。この帕を外すのが、新夫の權利だご考へられてゐたのである。現今でも舊教國には幾らかこの風習が遺つてゐる。

またヨーロッパでは結婚式に花嫁が、白無垢を著る。我國の風習とは同じやうであるが、その心持はまるつきり違ふ。即ち單に白色は純潔を表するごいふので喜ばれるのである。從つて白衣でなくてはならぬごいふ規則があるわけではない。用

ひてもいゝのである。正式に教會で結婚するほどの者は大抵白衣を着るけれども。結婚登錄所で簡單に式を濟ます者は、餘り白衣は用ひない。しかし、如何なる理由か黄色の衣裳は不吉だと云つて忌み嫌ふやうである。

婚禮の後のさはぎ

ヨーロッパにはまた結婚式場（通常は所屬の教會、略式には結婚登錄所）から退出する新郎新婦の周圍に近親緣者が群つて、手に手に細かく切つた五色の紙片を浴せかける風習がある。

これは往時種々の美しい花を撒いて結婚を祝し、新郎新婦の前途に幸多かれと祈つた風習の轉化したもので、紙片を用ひるやうになつたのは何時の頃からか判らないが、何でもその以前には米?を撒いたこともあるといふことだ。

（二）イギリスの婚禮

イギリス教會の結婚法

イギリス國教教會では、何人の結婚式を行ふにも、必ず『バンズ』――結婚擧行の豫告――を廣告をすることゝなつてゐる。で、若し、この『バンズ』が廣告せられない場合、或はそれに僞名を用ひる等の不正が行はれた場合には、その結婚は法律上無効となる。然して『バンズ』は結婚式を擧げる三週間前に當該教會竝びに結婚當事者の居住する町村役場に掲示さるゝのであるが、若し何等かの理由で結婚式が延期となり、『バンズ』を掲示してから三ケ月を經過した場合には、再び之を行り直さなくてはならない。これは要するに『この當該結婚に對して異議ある者は申し出づべし』といふ趣意の廣告であるから、不幸にして異議を申し立てる者が現はれ、その申し立てが教會の當事者にモットモだと思はれる場合には、その結婚は勿論認可されないのである。

しかし、この『バンズ』を廣告されることを好まない者、或は三週間も待つてはゐられないといふ者に對しては、チャンと拔け途が設けられてある。

その一つは民事裁判所に三十ポンド（約三百圓）納めて、カンタブリーの大監督が發行する『特別免許狀』を受ける方法。この『特別免許狀』さへ持つて行けば、何處の寺院（但しイギリス國

教教會に屬する寺院に限る）に於てでも卽座に結婚式が擧げられるのだ。

三十ポンド拂ふのが嫌なら廉い方の『免許狀』を受ければいゝ。これは各地の大僧正又は僧正が發給するもので、その料金は二ポンド乃至三ポンド。料金が廉い代りにこの『免許狀』はそれを發給した大僧正又は僧正の管轄に屬する寺院以外には通用しない。そして、之を受けるには、結婚當事者のどちらか一方がその寺院の管區内に、十五日以上居住して現にゐる者であることを證明した上に、その結婚に對しては絶對に他から故障が起る恐れはないといふ宣誓をしなければならない。が、とにかく二三十圓出せば、變な廣告はヌキにして貰へる。

（三）ギリシヤの婚禮

許嫁をするまで

今日ギリシヤで行はれてゐる婚禮の風俗習慣中には、よほど面白いと思はれるものがある。

先づ適當の配遇候補者が見附かると、然るべき仲人を立てゝ許嫁をする。一體ギリシヤに限らず、バルカンの諸國では青年男女間の交際が他のヨーロッパ諸國に於けるほど自由ではないので配遇者の取捨撰擇は兩親によつてなされるのが通例である。然してその仲人卽ち媒介役には大抵その地方の僧侶が賴まれる。

さて媒介人の盡力によつて話がまとまると、先づ女家から男家へ『ノータ』といふものが贈られる。これは花嫁の持參金或は嫁入道具の目錄である。それを見て男家では、花嫁の兩親及び親戚に贈る物品――通常は織物、裝身具、靴等であるが、金子を代用する場合もある。――を用意する。

婚禮前の一週間

婚禮は通常土曜日の夜擧げられるが、その前の週の土曜日から婚禮當日までは殆んど每日種々の行事がある。

先づ婚禮當日から一週間前の土曜日には『米篩の宴』とでもいふべき祝宴をやる。この日、男家では近い親類――殊に若い人達を招待し招かれた人々は各々米を入れた篩、或はそれに無花果だの胡桃（くるみ）だの扁桃（あんず）だのといつた果物を添へて贈る。然して、宴酣なる頃を見計つて、男達はその日の定めの祝歌を合唱し、娘連はその調につれて篩の米を篩ひ下ろすのである。

次の火曜日の晩には、また男家で今度は比較的緣の遠い親族を招待する。そして、俱に晩餐を

樂んだ後、その席上で一人の若者――但し双親さも揃つてゐることが必要條件――にパンを作らせる。粉を篩ひ、水を注ぎ、パン種を混ぜて酵母を作り上げる間、娘達はその日の定めの歌を合唱し、いよ〳〵酵母が出來上ると、その器の中へ花聟が結婚の指環と小貨幣とを故意に落し入れて。その青年に『口で卵へ出して下さい』と注文する。粉を捏ねた器の中へ顔を突込むのだからたまらない。滿面粉だらけ、それがまたお可笑いさて一同ワッ！ワッ！といふ騒ぎ。卵へ出した指環は花聟がお禮を云つて受取り、貨幣は骨折賃さしてその若者のものさなる。それから汚れた顔を洗つた水鉢を、娘達が持つて廻ると、各人達は各自應分の貨幣をその中へ投り込む。

このお集めの金子は、娘達が配分して、それで『婚禮のパン』を作るのである。このパンは、その水曜日に作るのが通例であるが、土地によつては木曜日に燒く。その際にも定めの歌があつて、それを唄ひながら作ることになつてゐる。

金曜日には男家で『花嫁のパン』といふものを製造する。原料や製法は通常のパンのそれと全く同一であるが、數五つ、七つ、九つ、或は十一と定つてゐる。然して担るにも燒くにも矢張一定の歌を唄ひ、出來上ると美しい籠の中へ納めて置いて、翌日――婚禮の當日、花嫁の許へ贈り

婚禮當日には

届ける。卽ち『花嫁のパン』と呼ばれる所以である。

婚禮當日には、大抵午後の三時頃、男家の近親者數名が、僧侶及び花聟の介添人と同道して、女家へ花嫁の道具を受取りに行く。その時、一行中のある者は件のパンと大きな酒德利とを馬に附けて行き、また或ものは、三匹、五匹……乃至十一匹の小羊（但し去勢したものか又は牡に限る）を引張つて行くこれは男家から女家への贈物である。

一行は花嫁の家に到着すると先づ恭しく口上を述べて、それらの贈物を差出し、引替へに嫁入道具を受取つて、馬に附けて持ち歸る。土地によつてはこの際、花嫁の父或は母が、嫁入道具の中から何か一品を取り出して、それに自分の頤をつけて新夫婦の前途に幸多からんことを祈願する習慣がある。

またアルバニヤ人の部落では、男家に花嫁の道具が到着すると、婦人や兒供が大勢門前へ出てそれへ米粒を投けかけ、また屋根の上へ枕を投け上げる習慣になつてゐる。然してその枕は結婚後一週間はそのまゝにして置くのが例である。

〔第六圖〕婚禮の幕

結婚式

結婚式は教會で擧げられるこゝもあれば、男家で行はれるこゝもあるが、何れにしてもすべてキリスト教の儀式によつて行はれる（尤も例外はある）のであるから、至極簡單なものである。キリスト教式の結婚式は我國でも廣く行はれてるこゝ故、改めて記述する必要はないだらう。

婚禮の翌朝には、大勢の親しい友人が新夫婦を訪問して款待を受ける。それからその翌々日（火曜日）には新夫婦が花嫁の里へ行く。この際、男家側の近親者は打揃つて新夫婦に隨行するのが通例である。八日目には花嫁が男兒女兒各一名を同伴して、近くの泉へ行く。そして、器に水を滿た

して、その中へ一箇の小銀貨を入れ、それを同伴した男兒に取出させる。それから八日後、卽ち婚禮後十六日目には、花嫁が所屬の寺院結婚後最初の參詣をする。

結婚に關する迷信

先づ結婚に最も緣喜のよい月は、九月と十月とで、二月、三月は惡いと一般に信ぜられてゐる。尤もペロポネススの二三の地方では、九月は不幸を齎す月だとして忌避されるやうである。

同一家族中の息子と娘とが同時に嫁を貰つたり緣付いたりした場合には、二人の姑が初對面の時、必ず水を口にふくんで自分の身體に吹きかける。これは實に不可思議な習慣であるが、若しさうしなければ、その二組の新夫婦中の誰かが不幸な目に遭ふと信ぜられてゐる。

新婚者は結婚後滿一ケ年間、止むを得ざる場合の他は、葬式に列ならない、のみならず、これを見るこゝも不吉だとして、葬式が自家の門前を通れば、大急ぎに奥へ驅け込み、これに路上で遭遇した場合には、横道へ逃けるか、目を閉ぢるかしてそれが通過してしまふのを待つ。

喪祭時の奇習

臨終の蠟燭

先づ臨終時の風習から記して見やう。

フランスの或地方では、受洗式に用ひた蠟燭を貯へて置いて、之を臨終の際に點す風習がある。かのルイ十五世の御臨終の時、ヴエルサイユ宮殿の窓に燈を置いて、崩御ごとにそれを消したと傳へられてゐるが、その燈は多分この蠟燭の燈だつたのだらう。

南ドイツでも、聖燭禮に供物とした所謂『ローマ人の蠟燭』又は『死の蠟燭』と稱するものを、臨終時に用ひるが、それは窓に點すのではなくて、病人の枕もとに點すか、或はその手に持たすのが通例である。尤も病人の手に持たせる場合には蠟燭の代りに小形の松明を用ひることもある。また土地によつてはその場に集つてゐる人々が各自一本宛この蠟燭に燈を點して持ち、病褥の周圍に立つて祈禱をする風習がある。

これと同じ風習はボヘミヤ地方にもあつて、同地方ではこのことを『病人のために燈を點す』とか、『冥土の旅に明りをつけてやる』とか言つてゐる。尤もこの地方には、蠟燭の代りに小さな鈴を持つて病床の周圍を廻り歩く風もある。

出棺時の奇習

その他キリスト教國には隨分これに似たことが澤山ある。が、要するにこの蠟燭を點すのは所謂『惡魔除け』の意味であるらしい。

出棺時にもまた火に關した珍らしい風習がザラにある。

先づ此の方ではデンマルク。この國では出棺時に當つて、棺の後へ火を投ける。之は亡靈を落つかせるためで、かうすれば化けて出ないといふ迷信から來たことである。これと同樣の風習はグリーンランドにもある。卽ち同地では出棺に時老婦人が棺の後へ立つて炬火を振り、大聲を擧げて『もう玆には用事がないだらうね』といふ。矢張亡靈の迷つて來るのを防ぐためである。

またウユルテンベルクの一地方では、牝牛に柩車を曳かせて、その柩車の上に炬火を捧げた婦人が乘つて行く。

東ヨーロツパの山國、ルーマニヤでは、柩を墓地へ運ぶ際には、必ず『トカグル』といふ巨大な蠟燭を點して行く。『トカグル』は大抵は白色のものが、用ひられるが土地によつては赤色のものも用ひられる。

これとよく似た風習がローマにもある。卽ち彼地では、葬送の際には、例へ日中でも、必ず松明を點す。

以上の諸風習は各々形式こそ異ふが、趣意は要するに、『惡魔拂ひ』にある。つまりかくすれば死者は勿論のこと、生き殘つてゐる者も、惡魔の禍から免れ得るといふ迷信から來たことなのである。

埋葬時の火と燈明

埋葬時にも種々の奇習がある。

ローマでは棺を埋める時、ランプとかカンテラとかをその墓穴の中へ入れる。

またイタリヤの地中海沿岸地方では、火や燈明の代りとして、死體を納めた櫃やうのものを眞赤に塗る習慣が廣く行はれてゐる。

これは何れもかのラプランドの土人が、埋葬時に鋼鐵と火打石とを墓穴の中へ入れるのと同趣意のもので、要するに、黄泉の道は暗く且つ嶮阻であるから、燈火がなくては死者が困るだらうといふのである。

臨終の水

喪儀中の風習に火及び燈明に關するものはまだ隨分あるが、水に關するものも多いことは前述の通りであるが、次にバウリザルトリの研究に基づいて、その珍らしいものを紹介しやう。

北部ヨーロッパ——特にオランダでは、臨終者のベッドの上に一桶の水を置く習慣が古くから行はれてゐる。これは死にゆく人の靈魂が、肉體から離れた際、その水によつて淨められて神の前に出るといふ迷信から來たものであつて、當人の息を引き取ると早速取捨てるが、その際それを人は勿論、動物、穀物、果物、或は草木の上などにこぼしてはならぬといふことになつてゐる。

ところが、ワドシャガ地方では、死者を再び蘇生させやうといふので、その水を死者の面部に注ぎかける。ひどい奴は二桶も三桶もの水をブッ掛けるといふが、これは聊か話が大袈裟過ぎやうだ。しかし、何れにしても一滴や二滴ホンの形式的に注ぐのではなくて、相當多量に浴せ掛けるものらしい。

死體の洗滌

死體を水（或は溫湯）で洗滌する風習はヨーロッパでも廣く行はれてゐるが、その方法は土地によつて異り、中には隨分風變りのものもある。

我國では、死體の洗滌卽ち湯灌は大抵死者の近親者によつて行はれるが、ルーマニヤではまるでアベコベで、死人の緣者はこれに當ることを禁ぜられてゐる。しかし、全く關係のない者になさしむるのではなく、生前親交のあつた親の知己に依頼するのが慣例である、いくら生前に親交があつたからとて、湯灌係は餘り有難くはない。差詰め當日は腹痛でも起したくなるのが人情だ。そこで、それにはチャンと奬勵法が設けてある。卽ち、この大役を完全にしおほせた婦人は、埋葬當日、僧侶から祝福されることゝなつてゐるのである。

南部ロシヤのユダヤ人も、湯灌の際妙なことをやる。先づ湯灌に取掛る前には必ずその死骸に向つて、『寛恕あらんことを』といふ意味の祈誓をする。そして、スッカリ洗ひ淨めてしまふと、死體を眞直にして淸水を注ぎかけ、三度『トホイル』（淸淨の意）と唱へた後、新しい白布で全身をよく拭ひ、最後に鷄卵で胸腹部を磨いて置く。まことに念の入つた湯灌ではある。

その他、ギリシヤの或地方には、湯灌をした後、死體にスッカリ香油を塗抹する風習があり、

セルビヤの田舍には、蟲の息の重病人を湯灌して、死ぬ前に死裝束を着せる處がある。

かく湯灌の方法は土地によつて區々だが、これに用ひた水や器物の始末に就いても、また處によつてそれぞれ變つた習慣があり、その中には隨分奇拔な風俗もある。

東プロシヤのそれなどは確かに奇拔なもの〳〵一つであらう。この地方では、湯灌に用ひた水を門前へ十字形に流せば、死者が遂つて來るのを防止することができる。だが、もし之を葬式の日にさし迫つて行ふと、死者の靈魂は終にその適歸することになると信ぜられてゐる。然して、また湯灌に使用した水壺或は洗面器（陶器）は、柩車が動き出した時に、その車輪へたゝきつけて打壞してしまふが、その破片を踏むと必ず何か不幸な目に遭ふといふ迷信があるので、破壞すると直ちに破片をすつかり拾ひ集めて、なるべく人の通らない場所へ埋めることになつてゐる。

これと同じ迷信がメクレンブルク地方にもある。同地では、わざ〳〵車輪へ投げつけて破壞するなどといふ手數のかゝる眞似はしないけれども、矢張湯灌に使用した器具は、踏むと不吉だといふので、なるべく人の眼にかゝらないところへ取捨てる。

ボヘミヤやシレジヤでもこれと同斷で、その水は通常屋簷の下に流し、その器具は寺院の木立の中とか、壁に密接した場所とか、平常人の立寄らない處を選んで埋める。

以上は何れも要するに、湯灌に用ひた水や器具を不吉なもの、禍をもたらすものとして忌避する例であるが、これと全くアベコベの意味の迷信も尠くない。

例へば湯灌の時に死體を拭いた布帛を果樹の幹に縛りつけて置けば、枝も撓むほど實がなるとか、農作物の種子を湯灌に用ひた水にひたしてから蒔くと決して鳥が啄まないとか、毛深くて困る者はその水で洗ふがよいとかいふのがそれである。

出棺の水

出棺の前後にも水に關する種々の奇習がある。次にその二三を記して見やう。

スイスの或地方では、人が死ぬと時を移さず、その部屋の中に懸つてゐる聖水をはじめ、あらゆる器物中の水を捨てゝしまふ習慣がある。

また東部ギリシヤのユダヤ人間には、人が死ぬと家中の飲料水は全部流し棄てて新しく汲みかへる風習がある。

また西部ボヘミヤには、棺が家を出ると、室内の机や椅子を覆へし、壺の中の水を棄て、棺側にあつた聖水の容器を破壊する風俗がある。

以上は何れも屋内の水を捨てる例であるが、之と恰度反對の例、卽ち人が他界した場合には必ず水を盛つた器を屋内に置く例もある。

例へばサクソニヤの一部では、人が死ぬと、その死床の下に、水を一杯滿した水桶を置く。かうして置けば、その水が死體から發散する惡臭を吸收するから室内が臭くならないといふのである。プロシヤの或田舍にも同樣の風習があるが、此處では、かうして置けば死骸が腫れ上らないのみならず、腫物がその水に溶解してしまふと信ぜられてゐる。

また、南ロシヤの農民間には、人が死ぬとその居室の窓框の上に水を盛つた器を安置する慣習がある。何でも、靈魂が彼岸へ旅立つ際、この水を飲んで大いに元氣をつけるのださうである。

その他、ギリシヤの或地方には、棺を擔ぎ出す時、これに水瓶の水を注ぎかける處があり、東プロシヤの一部には、湯灌をした女がその水を殘して置いて、出棺の際、棺或は柩車の背後へ注ぎかける風習がある。が、それは何れも死者の供養するためではなく、靈魂が歸つて來るのを防止するためである。つまり、靈魂は水を渡る術を知らないといふ迷信から始つたことなのである。

墓に水を注ぐ風習

インドの回々教徒間には、埋葬が濟むこ、その墓石の上に水を注ぐ習慣があるこのことであるが、ヨーロッパのキリスト教徒間にも之と同一の風習を認め得る例へば、ギリシヤに於ては、埋葬後僧侶が柄の水を墓上に注ぎかけて『爾は地なり、爾は地に歸り行かざるべからず。』と唱へるのが埋葬時の通則であり、ルーマニヤでは、夫に先立たれた女、或は妻を亡つた男が再婚せんこする場合には、先づ亡き人の墓へ詣て、その墓石上へ水を注ぎ、鄭重にその冥福を祈念するのが通例である。

決闘奇談

決闘の現狀

凡そ洋の東西を問はず、國家が未だ封建の狀態にあつた時代には、存立の要件こして勢ひ武道を尚ばなければならなかつた。從つてこの武道にたづさはつてゐた或階級の人々の間に自己の武士道を擁護し、發揮する必要の起つた場合に、當然採らるべき手段は決闘、平たく云へば果し合ひであつた。これが最も正々堂々たる方法だつたからである。かくて、因襲の久しき遂にこれが完全せる一箇の形式こなつて後世に傳はり、武よりも文を尚ぶ今日に於てもなほ或る國に於てはそれが依然こして行はれてゐる。然して最も盛んな國はドイツこフランスであるのであるが、それは表向だけのことで、事實は默認の形になつてゐるらしい。殊に大戰前のドイツに於ては、これが軍隊——こいつても、士官に限つてゐたのであるが——竝びに大學生の特權であるかのやうに考へられてゐた。今日でも事實上大學生の間には決闘によつて受けた創傷の多いのを一つの名譽こして誇る風がある。フランス人の決闘好きなことは古來有名で、アンリー四世の治世にはこれがために命を落した貴顯紳士の數無慮四千人を超したこ稱せられ、イギリス人が決闘を名譽の業こ考へるやうになつたのは、實にこのフランスの盛んな決闘熱に感化された結果であるこ云はれるくらゐであるが、近年は餘はご下火になり、稀に行はれるそれも殆んご形式的なもの——卽ち以前のやうに生命を賭して闘ふのではなく、ピストルなら双方各一發宛ブッ放して、當つても當らなくつてもそれでおしまひ。劍を以て闘へば互に手先の爭ひをやつてゐる間に、何方か一方が一寸徹傷を負へばそれでもう事件は落著で、双方こも握手でもして別れるこい

ふ程度のものとなつてゐる。

イギリスでは、紀元千八百五十二年十月十九日に二人のフランス人が闘ひ、その一方が非業の最後を遂けて以來、決闘なるものは全くその跡を絶つた、とネルソンの百科辭書には記してある。またアイルランドでも十六七世紀頃には之が隨分流行したらしいが、現在では殆んど見られなくなつた。が、その代りに、彼等の移住地たるアメリカに於ては時々行はれるらしい。

決闘は北方民族固有の風習

專門家の説によれば、決闘はローマ帝國を滅亡の淵に逐ひやつた北方民族の固有の風習であるとのことであるが、確かに南方人は昔から北方人ほどこれに興味を持たなかつたやうである。

これは今から二十年ばかり前の話であるが、イタリヤのベリンゾナといふ所に住んでゐたゲッタとソラトといふ二人の青年が、或る一人の美少女のことから衝突した。いはず知れた戀愛の葛藤である。そして遂に『それでは決闘によつて事を解決しやう。』といふことになつたが、二人とも北方人のやうに氣が荒くなかつたので、さうしても劍で殺し合ひをする氣にはなり得ない。そこで新奇獨特の妙案を以て勝敗を決することにした。

當日二人は、雪頽崩で有名なかのスプリユーゲンの山道へ出かけて行つた。そして、二人とも殊更に、吹雪を眞向に受ける山腹の急阪を選び、しかも一日の中で最も危險な二時間卽ち九時から十一時までの間、其處に佇立つてゐることにした。つまり萬事の裁決は雪頽崩に委せやうといふのである。

恐ろしい頽崩は幾度か落ちて來た。が、不思議とそれは何時も二人の立つてゐる山道を避けて通り過ぎるので、雙方とも些の怪我もしなかつた。

第二日目も第三日目も彼等は約束通りに實行したが、依然として勝敗は決しなかつた。

ところが第四日目のことである。怖ろしい巨大な雪塊が、ゲッタの佇立つてゐた直ぐ上の方から轟然として滑り落て來た。萬事休す！不幸なゲッタ青年は一堪りもなく谷底に生埋にされてしまつたと思はれたが、頽崩の過ぎ去つた跡を見ることゝ不思議や彼は微傷すらも負つてゐなかつた。かくて五日目となつた。ところが、その決闘の次第がその筋の耳に入つたものと見え、二人とも有無を云はさず憲兵屯所へ拘引されてしまつた。しかし双方とも全然直接行動に出たわけではなかつたのだから、結局大目玉を頂戴したゞけで許された。が、もはやこの奇想天外の方法で勝

敗を決するわけには行かない。そこで遂に籤を引いて、勝つた方が故郷に殘り、敗けた方は潔くアメリカに移住するといふことにした。勝籤はソラトのものであつた。

果してソラトがその美しい娘の唇を得たかどうかは知らない。が、ゲツタは渡米して今も彼の地に居るといふ話である。

勿論南歐の人間だとてこんな妙な決闘ばかりやるわけでは決してないが、尠くもかういふノンキなことは北歐人にはできないだらう。若しこれがドイツ人だつたら、必ず銃か劍かで手取早く勝敗を決してゐたに違ひない。ノンキな決闘といへばも一つかういふ例もある。

やはりイタリヤであつた珍事件である。

或る新聞の主筆が、その政敵から次のやうな果し狀を貰つたものだ。——

手紙で勝負

「謹啓、恐らく何人も足下の如き陋劣なる人物に對して、正式に決闘を申し込む者は有之間敷と愚考仕り候。依つて小生も略儀ながらこの文を以て足下の耳を打撲致す次第に御座候。希くば足下は小生のために耳を打撲されたるものと覺悟被成度、なほ小生がステツキを用ひざりしは、足下の幸福と思召されたく候。頓首」

ところがその主筆先生、餘ほどの暇人だつたと見えて早速これに答へて、

「我が好敵手よ。仰せの趣悉細承知仕候。小生は貴命の如く、足下に依つて耳を打撲されたるものと存じ厚く御禮申述候。併し、小生も足下の例に倣ひ、玆に六連發のピストルを以て足下の頭を射撃致し候。五候へば足下はこの最後の行を讀まるに際し、既に死したるものと御覺悟被成度候。小生は謹んで足下の死屍に對し敬意を表し申候。頓首再拜。」

といふ返事をした。

これではまるで漫畫の仇討のやうなもので、力の入らないこと夥しいが、かういふ馬鹿化たことを大眞面目でやるところは如何にも呑い國の人間らしくて面白いではないか。

我國でも所謂果し合ひや仇討が公認されてゐた時代には隨分珍妙な果し合ひや、仇討が行はれたものらしいが、ヨーロッパでも決闘が流行した時代には、到底事實とは思はれないやうな珍事件が彼方此方に起つた。

以下二三の例を記して見やう。

珍妙な決闘

今から三十年ばかり前のことである。

ホンガリヤの首府ブタペストで、エム・カール・シュシイといふ男が、或る婦人のことから一人の青年と爭論を始め、終にお定りの決闘をすることになつた。が、この男は生來血を見ることを好まなかつたので、劍や銃で鬪ふ氣にはどうしてもなれなかつた。そこで實に珍妙な方法を發案した。——黒と白との二つの玉を、屍灰を入れる甕の中に入れて置き、それを各自一箇づゝ取出して、黒玉に當つた者は潔く自決しやう、といふのであつた。

そこで早速双方とも介添人を選んでそれを實行した。ところが皮肉にも發案者たるシュシイ先生自身がその黒玉をつかんでしまつたのである。しかし、彼には自殺する丈の勇氣がなかつた。その噂は忽ち全市に擴つた。紳士の體面を汚損した奴といふので誰も相手にするものはなかつた。昨日まで親しい間柄であつた友人すらも寄りつかぬといふ有樣。流石厚顔無恥なシュシイもその地には居堪らなくなつて間もなく姿を晦ましてしまつたが、それだけでは帳消しにはならなかつた。

自轉車上の決闘

毎年毎年、決闘をやつた週年の期日になると、如何して探し當てるのか、その時の敵手の青年から彼の卑怯を罵つた手紙がやつて來る。一再ならず居所を變じたが、やはりその當日になると……『雨滴も石を穿つ』といふ諺の通り、一年も缺かさないこの恐るべき手紙の迫害が遂に効を奏したのであつたらうか。恰度二十週年目の決闘期日に當る日に、哀れなこのこの男はとうとうピストルで自殺をしてしまつたといふ。

これは先年パリーで二人の青年がやつた奇抜な決闘である。

その二人の青年は各々片手に短い棒をもつて、二十メートルの距離を隔て立つてゐた。そして、一聲の合圖とともに彼等は自轉車に飛び乘つて、全速力で近づいた。雙方が摩れ違ふ拍子にその棒で擲り合はうといふのである。が、双方ともわきへそれてしまつて旨く出會はなかつたので、今一度やりなほしをした。すると今度は怖ろしい勢で双方の自轉車が眞直に衝突して、二人とも五六間づゝ跳飛ばされた。驚いたのは介添人である。早速馳けつけて抱き起して見ると、一人は腹部に重傷を負ひ、一人は脚を挫折して人事不省に陷つてゐた。けれども二人とも棒は手にしつかりと握つてゐたといふことである。

婦人の決闘

今日までの記録に依ると、婦人の決闘も隨分あつたやうである。一體女は男よりも殘忍性に富んでゐる。いざとなると實に大膽になり驚くべき殘虐な行爲を平然としてやつて退ける。こは多くの專門家の說くところであるが、確かに決闘の方法も婦人のそれは概して男子のそれよりも兇暴野蠻の樣である。

先年フランスのコールノーヴといふ所で、バーネットとコールテーアといふ二人の若い女が決闘をやつたことがあるが、その時彼女等の用ひた武器は大工の鑿であつた。若い娘が鑿を逆手に振かざして闘つてゐる樣を想像して見るがよい。恐らく猥な氣持にならない男はないだらう。

アメリカの私刑

私刑の起原

表には人道の大看板を掛けて間斷なしに人道の大廣告をし、恰も人道の總本家といふやうな顏をしてゐるアメリカ人も、裏面では、彼等が獸畜と同視するアフリカの蠻族さへもなし得ないほどの非人道的行爲を平然として行つてゐる。『私刑』は實にその代表的のものである。

リンチの起原に就いては種々な說があるけれども、普通に信ぜられてゐるところによれば、この國の獨立戰爭の當初、ヴァジニヤ州の有力者チャールス・リンチなる者が、自己の居村及び近在の獨立反對者や王黨の間諜を捕へて私かに死に至らざる程度の笞刑を加へたのが抑もの始めで「リンチング」といふ名稱も、彼の名リンチをもじつたものであると云ふ。

併しよく調べて見ると、名稱はともかく、私刑そのものはチャールス・リンチの創作ではなく、初期の植民が本國イギリスから輸入したものらしい。その故は、當時既にイギリスでは「リドフォード・ロー」スコットランドでは「クーバー・ロー」と稱する「リンチ」と同一形式のものが存在してゐたからである。

アメリカに於ける確かな記錄は、千八百二十三年頃からある。(ブローリー氏著『米國黑人社會史』)この時代には年に一人か二人——但しそれは黑人だけであるが——で、而も餘り世人の注意を惹かなかつた。が、千八百三十五年、セント・ルイ市に於て、マッキントッシュなる黑人が焚殺されてから、私刑は餘ほど形を備へた習慣となつた。然して、千八百二十三年から同六十年までに行はれた私刑の數は尠くも六十件に達するのである。

それから少し記錄が中絶するが、千八百八十二年から同九十二年までは一箇年平均二百三十五人——但し是は黒白人混合總數——それから千九百三年までは一箇年平均百四人の犧牲者を出した。然して、この二十二箇年間の總數は、黒人二千〇六十人、白人千百六十五人の多數に達した。（ブーカー・テイー・ワシントン著『黒人の話』八八頁）

また「アウト・ルック」誌の記事によれば、千九百十三年には總計五十一人、千九百十五年から同二十年までは、年に五人乃至八十三人、最近のところでは千九百二十二年に五十七人、翌二十三年には二十八人となつてゐる。要するに少くも隔週一人、多い年には毎週二人づゝの犧牲者を出してゐるわけである。これによつても如何にこの病が廣く深く人心に喰ひ入つてゐるかを知るに足るであらう。

私刑とは如何なるものか

私刑とは一體如何なるものか？

スタンダード辭書には『リンチ法とは、全く審問を省くか、或は急造裁判所として行動する不規則なる自選の一團體が審問をなし、簡略に處罰を執行することをいふ』とある。またゼームス・ブライス子爵は、その名著「アメリカン・コンモンウエルス」中に『私刑はヨーロッパ人及びニュー・イングランド地方の人々には戰慄すべきものの如く見ゆるとは雖も、心のまゝに行はるゝ暴虐とは距離甚だ遠きものなり。注意深き觀察者の言に依れば、これは餘りに屢々濫用せらるゝことなく、その行はるゝ順序も概して規則的なる形式に依り、而も公平なる精神を以てせらるといふ。然らば如何なる事情の下に發生するやと云ふに煩瑣なる審理、手續又は採證方法、或は過輕の刑罰が、人口稀薄なる地方に於て行はれ、萬一にも犯罪者か相當なる處罰を免るゝ恐れあり、緊急之が處置をなすの必要生ずる場合、時に或る自選陪審員之を審理し、又明白なる罪跡ある時は、審理を行はずして犯人を處罰す。斯かる場合に於て、何故警官を潤澤に配置せざるかの疑あるべきも、ミシガン州及びウィスコンシン州の一部の如き犯罪稀なる地方にては、警官を常設して費用を負擔せんよりも、寧ろ人民自ら法律を執行するを以て經濟的と信ずるが故なり。』と說いてゐる。

これらの說を見ると如何にももつともらしく、目くぢら立てゝ非人道呼はりするほどのことではなささうだが、事實は決してそのやうな正々堂々たるものではなく、實に殘虐な、行爲で、血に餓ゑた猛獸の狂奔怒號とでも言ふより外に評し方のないものである。殊に最近數十年間に於け

る私刑の犠牲者は十中八九まで黒人で、しかもその中には罪狀の明白でないものも尠くない。非人道こ云ふも決して過言ではないのである。

マーク・トウエインの名著「インノセント・アット・ホーム」の中に、ネッド・ブレークレーなる船長が、ペルー國領チンチャ群島に於て、ノークスこいふ水夫を私刑にした時、士官等は船長に對して處罰するには先づ審問をなすべきであるこ極力主張したが、船長は『此奴を埋葬するまでは少々手が離されぬから、審問は後にして呉れ』こ答へたこいふ話があるが、實にこの『審問は後にして呉れ』の一句こそは、固い文字で千言萬語するにも勝つた私刑心理の解剖である。

私刑の目撃談

これは今の咄ではなく、十五六年も前のさる旅行者の目撃談だが、リンチの實況が眼に見るやうにマザマザこ書かれてゐるからその大略を記して見やう。

南部アメリカの或る都會の近郊に於ける出來事である。

或日クランフォルドこいふ若夫婦がサム・ホースこいふ黒人の下男に惨殺された。加害者のサムはいち早く逃走を企てたが、忽ち警吏の手に捕へられて、町の警察署に護送されることゝなつた。こころが、加害者が黒人だこいふので大いに激昂した村民は、『黒奴をやつつけろ、リンチにしろ！』こ口々に叫んで押寄せ、こうこうサムを警吏の手から奪ひ取つて了つた。

惩ういふ事は我國なごでは烏渡見られないが、アメリカではリンチが人民の當然の道徳的要求こ默認されてゐるのだから、のべつこまでは行かないまでも、年に二度や三度は必ずある。時には警察署の監房から奪ひ出すこごすらもある。

扨てサムを奪ひ取つた村民共は、暫くの間リンチの方法について相談したが、結局焼き殺すこに一決した。するこ、忽ちその噂が廣がつて、八方から物好きな見物人が集つて來た。

犯人のサム・ホースは轡て刑場に引出された。立木に鎖で繋がれて、その周圍には薪が堆高く積み上げられた。するこ一人明晃々たるナイフを持つて飛び出した奴がある。何をするのかこ思ふ間もなく、いきなり黒奴の右の耳を斬り落した。血がサッこ迸る、こ群集は一齊に歓呼した。するこ又一人同じやうにナイフを手にした奴が飛び出して來て此度は左の耳を斬り落した。群集は再び歓呼した。待つてましたこばかり又一人ッカッカこ傍へ來て、矢庭にナイフをヅブリこ横腹に突刺した。

『止せ、止せ』こ、五六人が飛び出して來て、『殺しちやいけない。まだこれから熱物の御馳走

をしてやるんだから。』

『殺しやしない。烏渡弄つてやつたんだ。』

そのうちに薪が燃え出した。群集は一度にワット歡喜の聲を擧げた。中には躍上つて喜んだ者もあつた。そして、火焰に包圍されてヒイヒイ悲鳴を揚げて狂ひ廻るのを宛も曲藝でも見物するやうにキャッ〳〵と嬉しがつて見てゐるのであつた。

『彈を打つちやァ駄目だぞ。今グッバイにしたんぢやつまんねえからナ』とこんなことを大眞面目で怒鳴つてゐる男もあつた。

やがて皮膚の焦げる異臭が蒸せ返るやうに鼻を衝いて來た。全身火に包まれた黒奴は、それでもまだ死力を奮つて逃出さうともがいてゐた。そして、折々物凄い、宛も野獸のそれのやうなうなり聲を揚げて、繋がれてる木が根こぎにされるかと思ふばかりに躍り上つた。が、そのうちに多分足が燒けて支へる力がなくなつたのであらう。バタリと横に倒れて、暫くの間ピクリ〳〵と戰いてゐたが、到頭最後の息を引取つた。

其時、群集は一時にドッと押寄せて、各自に燒け殘りの棒や木切をとつて黒奴の半燒けの死骸をメチャ〳〵に突き壞して了つた。そして或者は燒けた灰を、或者は血の染みた土までをハンケチに包んで、意氣揚々と凱歌を擧げて退散した。

これがリンチの實況である。人間の生きながら燒かれるのを見せ物でも見るやうな心持で見物し脂や血のにじんだ灰を記念として持ち歸る。暗黒アフリカの人喰人種の蠻習かと思ふと、これが人道の總本家のアメリカで、しかも今でも現に折々行はれる風俗だから驚く。

（最後の一項内田魯庵氏著「貘の舌」による）

イギリスの大學生

オックスフォード

ロンドンはパヂントン停車場から發つて、暫く東北へ走ると、車窓の兩側にはこの國の田舍に特有な牧場が展開する。やがてビスケットの産地として名高いレディングも過ぎて、初めから約一時間半の後、オックスフォードに着く。

停車場を出て少しばかり行くと、右側に城趾がある。城壁の銃眼などは、なほそのまゝに遺つてゐるが、内部は今この町の市役所になつてゐる。それと向き合つて、保守黨の

倶樂部がある。いかにもイギリスらしい氣持である。

城趾と倶樂部との前を通り過ぎると、間もなくカーファックスの四つ角に出る。この大學町の賑ひの中心で、此處まで來ると、上下、縞柄の異つたダブダブの服を着て、きまつて兩の手をそのポケットに突込んだ學生連の姿を見る。高等學校の學生が白タオルを腰にブラ下げて、『變りズボン』のポケットに突込んだ學生連の姿を見るのと、同一轍である。

この四ツ角を過ぎて眞直ぐにハイ・ストリートを進まうが、或は左か右かに折れて行かうが、ごつちにしてもわれ〳〵は、大學そのものゝ中へ突入することになる。

宛然一幅の風景畫

オックスフォードの精華はカレッヂにあると言つても差支へない。

その古びたルネッサンスの建物と、歴史に富む市中の寂びた空氣とは、この學校都市を特種の色に染めてゐる。本來學校のためにできた町で、人口七萬といふが、それは停車場（ステイション）附近の貧民窟や附近に散在する小町を入れてのことで、町の大部分は隨所に點在するカレッヂの建物と運動場と、それから前栽に裕かに花木をあしらつた風雅な住宅とからでき上つてゐる。町らしい町は、カーファックスを中心とする十字街に限られてゐるから、學生の遊樂氣分をそゝる恐れは全くない。

オックスフォードの附近は、なだらかな丘陵とテイムズの支流とをうまく織り込んだ一幅の風景畫で、漫然散歩に出掛けても、自然の空氣を心ゆくばかり吸ひ込むことができる。大學では講義は午前中だけで、午後は運動をやらねばならぬことになつてゐる。運動にはすぐ學校の傍を流れるテイムズ河で端艇（ボート）を、またよく手入が屆いた一面の青芝の上でフットボール、ホッケー、テニス、クリッケットなどの運動競技を行ふ。日本のやうにカラカラに乾いた運動場で埃りまみれになつて『オーイチニ』をやるのとは違つて、廣々とした運動場で柔かい芝生を踏みつけながら走り廻る壯快さは、とても言葉にも筆にも現はすことができない。

この運動場の維持にはなかなか骨を折つてゐる。學生が運動をやる前後に、馬につけたローラーを引き廻して地ならしをやるし、夏は夏で毎日水を注いでゐる。手入もこんな具合に行き屆いてゐるが、芝生そのものも日本のそれとは大分趣を異にしてゐる。一年中青々としてゐる、嚴寒の候も枯れない芝生は、ヨーロッパ殊にイギリス特有のもので、日本にもこんな草があつたらさと思ふ位である。

水の都

オツクスフォードの町は、テイムズ河、オツクスフォード・キヤナルそれにチヤーチ・ウエルの三河川によつて三方から取り圍まれてゐる。

例の有名なボート競漕の練習は、クライスト・チヤーチに近いローウアー・リヴアーで行はれる。毎年二月の末頃には、カレツヂ同志の競漕があつて、オツクスフォードの市民は、恰も自分等の子供を見るやうな心で、寒風を衝いて走る男々しい若人の筋肉の動きに熱狂し、各カレツヂの應援團は、メガホン片手に、或ひは徒歩、或ひは自轉車で見物の中を縫つて走りながら、漕手の激勵につとめる、その樣子は中々勇壯なものである。

ケンブリツヂとの競漕に出る選手は、各カレツヂの選手とは全く別で、始めから各カレツヂの優秀な選手を選拔して、終始練習に努めるのである。

このローウアー・リヴアーには貸ボートもある。遙か上流に溯つて、ウツドストツクの邊りにイギリス王族の古邸の跡を尋ね、河畔の『鱒(トラウツイン)の茶屋』で晝のお茶を享樂(エンジヨイ)して歸るのも一興である。殊に大雨の降つたときなどは、ボート・ミドウやクライスト・チヤーチ・ミドウなどの河水が氾濫して、宛ら湖のやうな趣を呈する。その間を或ひは漕ぎ、或ひは帆をかけて縱橫に馳驅するのは中々壯快なものである。

けれども、二三人の同士とともにゆつくりとしたボート遊びに耽らうと思ふならば、リバー・チヤーウエルの方が適してゐる。この小河はマーストン村の牧場の間を縫ひ、大學運動場と、ニユー・カレツヂのクリツケツト・グラウンドとの東側を流れ、モードレン・カレツヂの東南、モードレン橋を潜り、同じ名のモードレン運動場の周圍を一廻りしてテイムズ河に注ぐのであるが、河岸(かし)一帶は白楊、オークそのほかの亭々たる大木に取圍まれてゐるから、おのづから幽邃掬すべきものがある。

田園の都

散歩にはオツクスフォードの郊外到る處可ならざるはない。先にも記したやうにカレツヂの學生は、午後二時から四時まで必ずボート、フツトボール、テニスホツケーその他の運動をとらねばならぬので、週間(ウイークデー)には散歩の機會(チヤンス)がないが、その代り日曜日には、これらの運動一切が嚴禁されてゐるので、遠くまで足を伸ばすものが多い。

しかも、オツクスフォードの町は、それ自身が既に立派な田園都市である。大學運動場、バムブ

リー街、ウツド・ストツク街なぞ、春から夏にかけて種々の灌木の花やベコニヤ、フリーヂヤなぞの草花が咲き亂れて、この附近を步き廻るだけでも十分の快味を味ひ得る位である。その上これらの灌木の中に、原種を日本に仰いだ木瓜、山吹、躑躅なぞを見出すのは、日本人にとつては、先づ嬉しい故國の追憶の種となるのである。

その外、いろ〳〵の意味で郊外散步の目標となるのは、ブレンハイムの舊王邸、ショトバーの丘、ワイタムの森マーストン村なぞである。ブレンハイムの舊王邸はオックスフォードの北方約七八哩のところにある。古木鬱蒼たる森に包まれた岡と、深く落ち込んだ池とが具合よく配置された、周回數里に涉る一大庭園で、雉、兎、山鳥なぞから白鳥、鴨、鷸なぞの水禽に至るまで、ところ得顏に、悠々と遊んでゐる。その閑寂な景色はそゞろに奈良を想はすものがある。

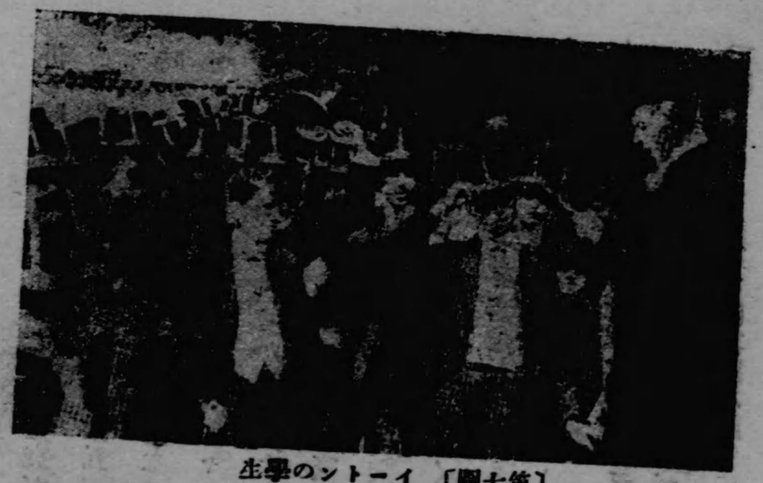
歷史的な大學

大體にオックスフォードは、その歷史から言つても、丁度奈良の僧院が發達して大學となつたやうなもので、その附近の風景、古い建築物に富むところは、最も奈良に酷似してゐる。現在のカレッヂ二十一の起原も新しきあり、古きあり、おの〳〵その沿革を異にしてゐるが、最も古いのは十三世紀に溯ることができる。

併し時代の變遷に伴つて榮枯盛衰があつて、必ずしも古いカレッヂが盛んだといふわけには行かない。ニュー・カレッヂなぞは五百五十有餘年前に創立されたもので、その建物の外觀も創立當時のまゝに保存され、現に盛んなものの一つである。併し、諸カレッヂ中で最も勢力のあるはモードレン及びクライスト・チャーチであらう。

モードレンはニュー・カレッヂより約八十年後に建てられたものであるが、その設備といひ、位置といひ、恐らく各カレッヂの冠たることができやう。このカレッヂの中庭は全部石疊になつてゐて、その西北の二階の窓に突出した小さな演臺がある。ヨハネ祭の折、そこから僧正が說教を試みるといふ樣式は今でも固く守られてゐる。大學の裏には廣々とした庭があつて、數十頭の鹿が柔かい芝生を喰んで遊んでゐる。それにこの學校は丁度チャーウエル河に沿つてゐるので、その一帶の水鄕を校內に取り入れ、縱橫に流れる河水に沿つた堤の兩側には數百年の老木が植込んである。夏期でも此處を散步するこゝしろ原しすぎるやうに思はれる。

このモードレンは、約二百年前ゼームズ二世が學長選擧に反對を試みたことで有名だが、今日ではイギリス皇室とは密接な關係にある。現皇帝も現皇太子も等しくこの學寮で三箇年の間、一



〔第七圖〕イートンの學生

般學生と起居を同じうして螢雪の功を積まれたのである。

クライスト・チャーチはその建物の古雅雄大なことでは

モードレンに勝つてゐるが、四圍の景色はモードレンに一

歩を讓るやうである。この兩カレッヂともに學生は名門の

子弟が多く、イートンやハロウを出てこゝへ來るものが多

い。

大學の組織

そこで大學そのものゝ話だが、一口にオックスフォード大學といつても、日本の綜合大學の制度とはまるで違つてゐる。丁度日本の高等學校の寄宿舍が幾つもあつて、そのおのゝ〳〵が固有の歷史と特徵とをもち、學生は何れもこの各寄宿舍の中に立籠つて（特別の事情あるものは市中の公認下宿に宿泊することを許されるが）人格を陶冶し、

〔第八圖〕イートンの學生その母姉を母校につれてくるところ

の小かる

庭るなら

身體を鍛錬すると同時に、全寄宿舍共通の講義を聽きに出掛けるといふ具合になつてゐる。この寄宿舍を稱してカレッヂといふのである。

日本と違つて國家から全く獨立した大學だから、その經費の一切はカレッヂの學生の負擔となつてゐる。このカレッヂは、おのゝ〳〵由緒ある古い修道院型の寄宿舍、それに附隨する敎會、庭園、運動場、圖書館を始め、あらゆる運動器具——ボートのやうなものまで各々別に持つてゐるのだから、その建物什器の維持費だけでもなかゝ〳〵かゝる。その上、寄宿舍專屬のコック、小使の給料はもとより、僧侶の手當や大學全般の講義を受持つ敎授の俸給までも支拂ふのだか

ら、とても並大抵のことではない。一年三學期、一學期八週間だから、聽講時間はまことに僅かなものだがこの一流のカレッヂに入つて相當のことをやつて行くと一箇年一萬圓はかゝる。質素にしても五六千圓、貧乏なカレッヂに入つても三四千圓はどうしても出さなければならない。つまるところ、オックスフォードやケムブリッヂは、日本の學習院にも一つ輪をかけた貴族教育の本場である。それにも拘らず一向世間に批難がなく、依然として斯界の渇仰の的となつてゐるのは彼等の自覺が彼等をして一面貴族富豪であるといふ自恃の心を養ふと同時に、一面國家の指導階級としての實力と品性とを兼ね備へることに努力せしめるからであらう。イギリスのやうな工業國が、未だしつかりした社會制度を維持してゐるのは、一つは貴族富豪の大多數がかういふ嚴格な教養を受けて、指導階級としての地位を辱しめないためにもよるのである。

（[illegible]）

スペインの鬪牛

殘酷な遊戯

物の本で、さては繪畫や歌劇で誰知らぬ者もないまでに紹介されてゐるスペインの名物『鬪牛（トレヤ）』。それは如何にも劇的なものゝやうに思はれる。が、事實は實に殺伐な、到底正視するに堪へぬほど殘酷な遊戯である。恐らくこれくらゐ血生臭い競技はないだらう。

然るにこの殘虐非道な競技が、スペイン人にとつては最も面白い、愉快な娯樂物なのだから驚く。全く彼等がこれに熱狂することは、トテモ我國人が角力や野球に熱中するやうなものではない。その季節（シーズン）になると彼等の社交や談柄（はなし）は殆んど鬪牛で持切りで、『鬪牛を知らなくては人交りができない』と云はれるくらゐである。

鬪牛の沿革と現狀

鬪牛は果して何時頃創まつたものか、それを知るべき確かな文獻がないが、多分十二三世頃、ムーア族によつて創始されたものであらう、といふ說が最も有力である。然し、それが現今のやうに盛んになつたのは近世に入つてからのことらしい。現に中世時代には、宗教家側から猛烈な反對が起つたゝめ、久しい間中止されてゐた。現今でも一部の人々は極力これが廢止を主張してゐるが、先づ當分實現され得る見

込みはない。何しろ國民の大多數がその愛好者なのだから、如何に一部の宗教家や道學者がヤキモキしたところで如何ともなるものではない。恐らく彼等にムーア人の血が流れてゐる限り、この競技は止まないだらう。

定設闘牛場

從つてこの國には到る處に立派な定設闘牛場（プラザ・ドトレオ）が設けられてあつて、春秋の二季の季節（シーズン）中——春季は耶蘇復活祭から七月上旬まで、秋季は九、十の二ケ月間——は毎日曜日に會合が催される。尚、素人や未熟連の會合は、恰もわが花相撲の如く季節には關係なく絶えず開催されてゐる。殊に古來『闘士（ドレロ）の養成地』と稱せらるゝ南スペインのセヴィラ地方では、殆んど毎日のやうに素人有志の會合が催されてゐる。

定設闘牛場は前に記した通り國内到るところにあるが、その中で最も大きいのはマドリードの闘牛場（プラザ・ドトレオ）である。この闘牛場は有名なローマの演武殿（コロシウム）を摸して築造したもので、その規摸はあくまで宏壯雄大、優に二萬人の觀客を收容し得る。

しかも此處は建物が大きいばかりでなく、所屬の闘士も全國から集つて來た猛者揃ひだから、競技も田舍の闘牛場のそれとは比較にならぬほど面白い。闘牛好きのスペイン人

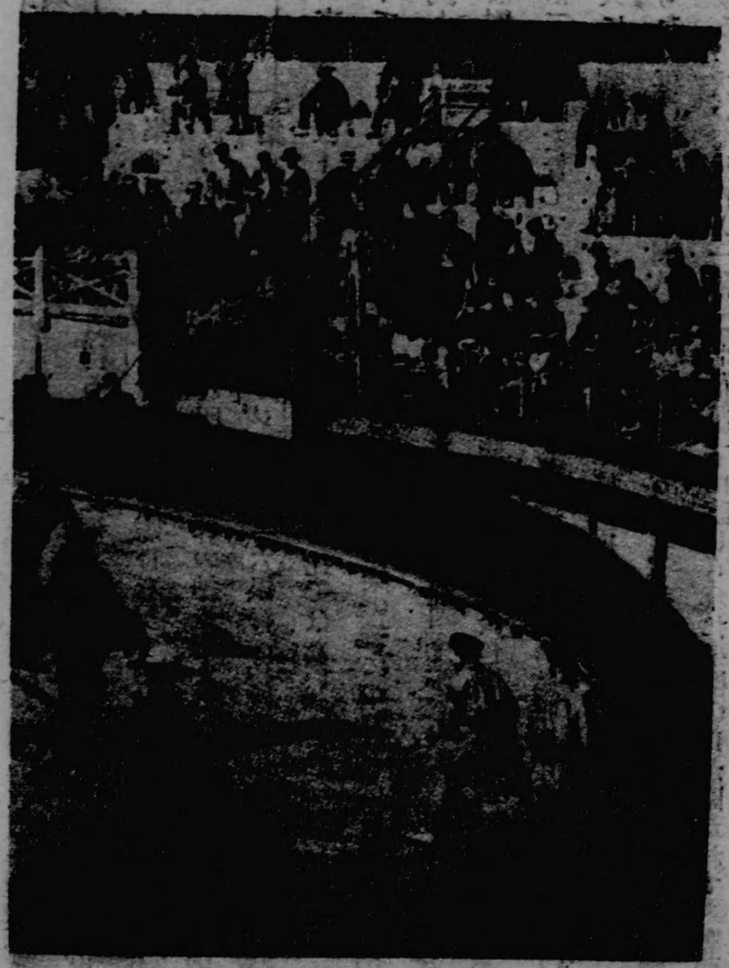
が、『マドリードの闘牛場だけは是非觀て置かなければならぬものだ』と云ふのも無理はない。

驚くべき人氣

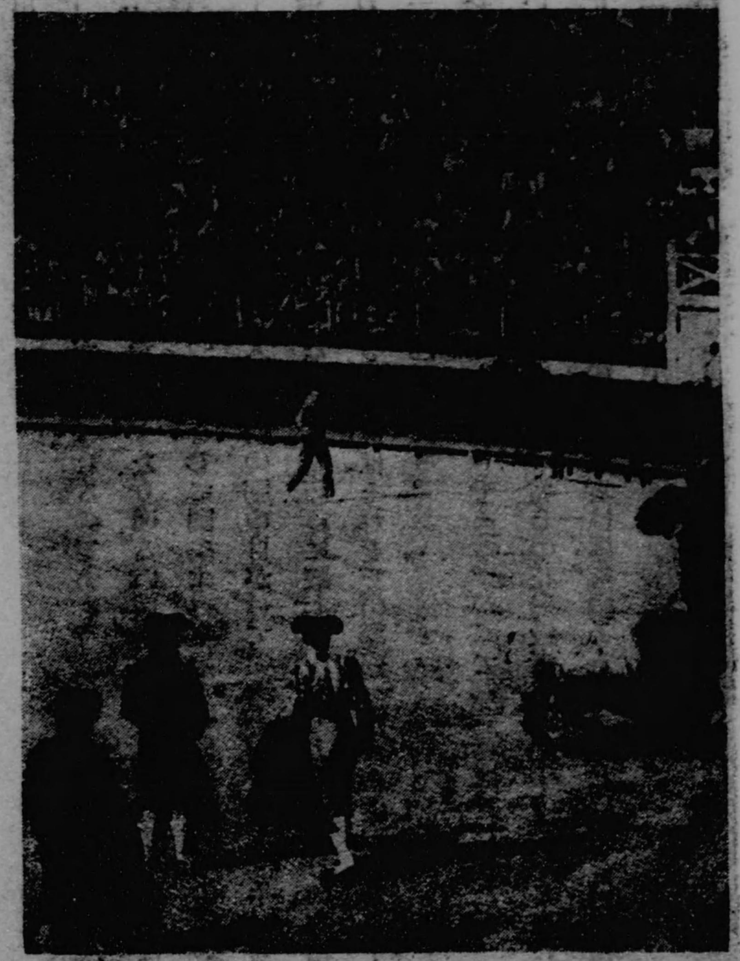
そんな風だから待ちに待つた開場の日が來ると、マドリードの市中は全國から集つて來る闘牛同好者で非常な賑ひを呈する。宿屋も汽車も電車も滿員といふ騒ぎ。もとより出好きな所謂社交界の紳士淑女は、みなあらん限りの綺羅を飾つて集り、貧者は晴れ着のシャツを一六銀行へ持込んでも切符を購ふといふ有樣で人氣の立つことはトテモ我國の大角力や野球戰の比ではない。

かくていよ〳〵競技開始の定刻になると、先づ奏樂の音につれて、當日の闘牛場の最高權威者たる總裁——これは豫め知名の市民の中から選ばれる——が入場して、正面の特別席につく。と、此度は劉喨たる喇叭の音とともに、黄に紫に赤に緑に金色燦然たる式服に身を固めた數十人の闘牛士が二列縱隊をなして足並も輕く入場し、數萬の觀客の歡呼の中に場内を一週した後、闘技場の中央に整列して、總裁から牛槍（トリ）の鍵を受け、再び序列を正して退場する。

間もなく再び劉喨たる喇叭の音が響き渡る。と、手に手に尖槍（パイカ）を携へた一隊の闘牛士が騎馬で出場する。次いで場内の一隅、觀客席の下に設けられた牛檻の口が開かれて、數頭の獰猛な牡牛



【第九圖】



スペインの鬪牛

が飛出して來る。

競技の實況

いよいよ競技が開始されるのである。

眞暗な檻の中からいきなり明るい廣場へ放たれた野生の牡牛は、狂氣のやうになつて暴れ狂ひ、猛然として鬪牛士へ突掛る。敏捷な鬪牛士は巧みに身をかはすと同時にその巨大な怪物の胴中目がけて尖槍を突き徹す。牛は物凄い唸り聲とともに飛び上る。驚いて竿立ちとなる乘馬を巧みに馭しつゝ介添人から代りの尖槍を受取つて、再び暴れ狂つてゐる手負牛に近づき、今度はそれをその頭部へたゝき込む。サッ！と迸る血汐にあたり一面、鬪牛士も馬も唐紅に色彩られる。おゝ、何といふ殘酷な行爲だらう！だが、場内は狂喜した觀衆の歡呼の聲で耳も聾せんばかりである。かくて第一幕は終りとなる。

次いで第二幕。今度は一隊の鬪牛士が、當日の花形役者、鬪牛士の横綱ともいふべき頭目役（エスパタ）を先頭にして徒歩で出場する。彼等の中の或者は鐵端（バータ）のある長さ二尺ばかりの投槍を、また或ものは風呂敷のやうな形の赤布（ムレタ）を携へてゐる。

やがて前回と同樣に例の口から見るからに獰猛さうな牡牛が飛び出して來る。と、先づ投槍を

持つた者が、進み出て、手にした投槍を牛の肩目がけて投げつける。それでなくとも既に半ば狂氣のやうになつてゐる牛は、いよ〳〵怒つて、恐ろしい唸り聲を上げてむかつて來る。

何しろこの鬪牛に使ふ牛は、そのために特に南米あたりから取り寄せた野生の奴だから。牛とはいへその獰猛さは虎や豹のやうな猛獸と大差ない。檻の中に入れられてゐても、人間の姿を見ると忽ち頭を下げ角を振つて示威運動をやらうといふしろものだ。――現に先年もこの鬪牛用の牛がマドリードの或停車場から鬪牛場へ運ばれる途中、どうしたはづみだつたか、檻の中から飛び出して數十人の男女を角にかけたことがある。

とにかく、さういふ恐ろしい野獸が死にもの狂ひで暴れるのだ。その物凄さ！トテモ常人には傍へなど近寄れるわけのものではない。が、流石は本職、鬪牛士は驚かない。例の風呂敷のやうな赤布一枚を以てその恐ろしい野獸に打向ひ、あくまで敏捷果敢な秘術を盡してこれを飜弄する牛は一層怒つて猛然として襲ひかゝる。觀客の激勵熱狂はその高潮に達する。

そこで頃はよしと、いよ〳〵頭目役が劍と赤布とを持つて現はれる。この頭目役と牛との鬪ひが當日の呼びものとでもいふべきものなのだ。

頭目役の苦心

頭目役（エスペク）は前にも記した通り角力の横綱、のやうなものだから無論優秀非凡な技倆の持主だが、何しろその猛けりに猛けつてゐる牡牛を、一人でしかも一定の時間——通例十五分間——内に仕留めなければならない。もしその時間内に仕留めることができなかつたら、忽ちその人氣は消滅してしまふ。從つてもはや頭目役の地位に止つてゐることは許されない。またこへ規定の時間内に仕留めることができても、その手際がまづかつたら、眼の肥えてゐる觀客のことだから到底滿足するものでない。ぞうしても頭目役としてその名聲を保持するには、一太刀か二太刀で完全に仕留めなければならない。こいふのだからなか〳〵大變だ。

だから、ぞうしても頭目役は無理をする。尤も今日では鬪牛士も仲々ずるくなつたから昔のそれのやうに無暗矢鱈と生命を安賣りするやうなことはしない。が、何しろ敵手が猛り狂つた野獸のことだから、さう易々と仕留られるものではない。自然手際よく片附けるには無理もしなければならない。こいふわけで、今日ではそのために生命を失ふものが尠くない。

世界の不思議

モナコの話

世界に國は多いが、モナコくらゐ奇妙な國はないだらう。先づ第一に、面積がタッタ八平方マイル、人口が二萬たらずしかない。何しろ、ものゝ二時間も歩けば全國を一廻りできるのだから面白い。

しかも、その歷史は極めて古く、今から三千五百年の昔、既にこのモナコの港は、フエニキヤ人が通商貿易のため往來するところとなつてゐた、こいふのだから、明らかに此處は、ヨーロッパ大陸中で、最も早く開けた土地の一つである。そして、無論その頃から王統連綿として今日に至つたこいふわけではないが、こにかく、それ以來數千年間、この猫額大の國がヨーロッパの政治的變化の一切に多少こもその關係をもつてゐるのだから愈々面白い。

これだけでもたしかに『モナコは世界の不思議』だが、この國にはまだ、もつこ奇拔なことがある。即ち賭博が公許されてゐることだ。飮む、打つ、買ふの三つのうち、飮むこ買ふこは世界

て……いや、まあそれはどうでもいゝ、今はモナコの話だ。

〔第十圖〕　モンテ・カルロ

中何處へ行つてやつても別に叱られはしない――といふこと、うるさいのは、直ぐアメリカでもか？なぞと故障を申し立てるに違ひないが、安心したまへ、アメリカでも金さへ持つてゐれば少しぐらゐ色彩鮮かな顏をして濶歩したところで別狀はないから。一體、金もないのに道樂をするなどいふことは、根本的に間違つ

で、まあここに行つてやつたところで、大抵叱られはしないが、他の一つは、まるで危險思想の兄弟か何かのやうに毛嫌ひされ、もし、これをおほびらに享樂しでもしやうものなら、忽ち檻の中に止め置きを喰ふ。東洋のさる國では殊にこれを罪惡視することが甚しいので、見附つたら最後、小つぴどい目に會はされる。そこである者は倉の中に隱れ、またある者は山上に登つて、これを享樂するといふことだ。ところが、モナコでは何時如何なる場所で開張しても、絕對的に叱られない。のみならず、國内には王宮よりも、博物館よりも、何よりも壯にして大なる公認賭博場なるものが設けられてあつて、世界各國から集つて來る、突張つた慾の皮の持主や、運命論者や、世間知らずのノラ息子といつた輩の一人一人をして、歡樂極まつて文字通り哀傷を感ずるまで享樂せしむるやうに、あらゆる設備が整つてゐるのである。

然り而して、その公認賭博場から上るカスリやテラ錢は、モナコ公國大藏省の手を經て、或は大公の衣服の料となり、或は國の土木事業費となり、或は文武百官の生活の料となる、といふ次第なのである。

公認賭博場

この榮あるモナコ公國の唯一の財源たる『カジノ』は、朝の十時から、夜の十一時まで明いてゐる。が、世界中から集まつて來た夥しい『椋鳥』は、みな朝早くからその門前に出張して列を作る。——整列するのぢやない、例の他人のお尻に喰つついて珠數繋ぎになるのだ。いやでもかうしないと、席が取れない……んださうである、彼等に云はせるとネ。——まだカジノの役員は、小使すらも出勤しないであらうと思はれる頃から、この入口にガン張つてゐて、押すな押すなになつた頃、その位置を後から來たせつかちに賣りつけて朝食を喰ふといふやうな手合もある。

しかし、いくら待つても入場を許されない者がある。それは、モナコ公國の國民諸君と、未成年者と、フランスの或種の官吏——例へば學校教師などだ。自分の國の民を入場させないとこ ろは、流石に考へた、いくらおやぢが悪くごく儲けても、片つ方で子供に費はれたんぢやなんにもならないからである。フランスの官吏を入場させないのはフランス政府から叱られるからだ。で、このカジノの入口では、嚴重に各自の旅券を取調べる。

「カジノ」は、パリーの國立オペラの建築技師ガルニエの設計にかゝり、結構輪奐の美を極めたものである。何でも時々博突に負けた者がヤケ腹を立てゝ、洋燈のホヤをたゝき毀したり、悪い奴が盆の上の金銀をカッ攫ふため故意に電燈のスイッチを捻つたりすることがあるとかで、構内の各室には、御丁寧にも電氣と、瓦斯と、洋燈と三種の燈火が併用されてゐる。

小氣味のいい勝負

賭博臺は總計で十二あつて、一臺づつ丁度撞球臺を縦に二個つないだやうな形である。お客はその兩側に陣取つて金を賭けるのだ。

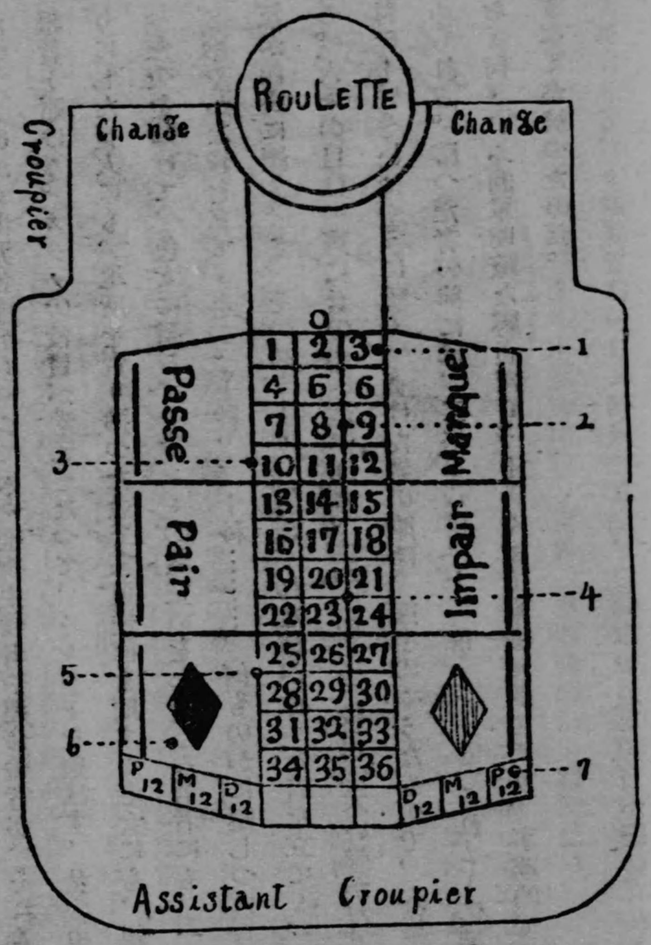
賭博の種類は、「玉ころがし（ルーレット）」と「三十四（トラント・エ・カラント）」と稱するカルタ遊びとだ。が、モナコの賭博は、この「ルーレット」の方が主だ。

「ルーレット」といふのは、第十一圖に示したやうな、圓形の器械で、その中心にある把手（イ）を廻せば、内側の圓盤（ロ、——これには圖に示した通り三十六個の溝がついてゐる）と外側の圓盤（ハ、——この部分には、〇から三十六までの數字を、）外側に、黒赤互ひ違ひの縞を内側に記してある）とが、各反對の方向へ向つて回轉する仕掛けになつてゐる。で、勝負の時にはこれを回轉させると同時に小さな球を（ロ）の部分へ轉がし込む、すると、その球がしばらくの間、圓盤

ここもに廻つた後、ある場所へ來て止まる。其の番號へ賭けた者が勝さいふわけだ。——こゝに揭げた圖では二十九に止まつてゐる。

さて、いよ〳〵賭場が開くと、「昨日も三萬ばかり負けたが、ナーニ、三萬や五萬、今日は一つ、目が出るまで三十六一點に張り通してやらう」と云つた顏の恐ろしい大きな圖體のメリケンだの、「あゝ、折角、先祖から傳はつた大事の地所を賣つたお金ももう五千フランしか殘つてゐない。今日當「……」と、いつた樣子のフランス人らしいお婆アさんだのが、「今日も昨日のやうに目がついてくれるさいゝがナ。昨日はまつたく有難かつた。何しろも

〔第十一圖〕　モナコのルーレット



〔第十二圖〕　賭博臺（半分）

ルーレットの賭方の例

一、「三」一つに賭けたるもの。——勝てば賭金の三十五倍十得

二、「八」と「九」と二つに賭けたるもの。——賭金の十七倍を得。

三、「十」「十二」「十二」の三つに賭けたるもの。——賭金の十一倍を得。

四、「二十」「二十一」「二十三」「二十四」の四つに賭けたるもの。——賭金の八倍を得。

五、「二十五」より「三十」迄の六つに賭けたるもの。——賭金の十倍を得。

六、「黑」全體に賭けたるもの。賭けたる金高だけを得。

七、「初の十二」「一二」より「十二」迄」に賭けたるもの。——賭金の二倍を得。

うこれつきりといふところで三十六倍と來たのだからな。ウフ、、、」ここでも云ひたさうな若僧だの、ここにかく世界各國からやつて來た唯物主義者や運命論者が、それ〳〵に思惑をつけて金銀貨を賭ける。カジノの役員が堂元となつて、ルレットを廻はす。盆の中の球は數千金を一點張りにした巨人にも、地所を賣り拂つた金で家運挽回を期する老女にも、親父が血の汗を流して蓄へた金を賭けて、色女に贈るプレゼントの品定めをしてゐる若者にも、一向頓着なく、カラ〳〵こ冷やかな音を立てゝ走る。十秒、二十秒……、何ものかに壓しつけられたやうな重苦しい空氣が四邊に漂ふ。こ、その時コトリ、氣まぐれな球が微かな音を立てゝ、一つの溝に因緣をつける。人々の目は一齊に盆の中へ注がれる。「三十四！」、役員の太い聲がだしぬけに、まるで「氣を付け！」こいふやうに響く。負けた者の賭は、熊手のやうなもので、落葉か何かのやうにかき集められる。勝つた者の前には、二倍、八倍、十一倍……こ、それ〳〵に拂戻金が押しやられる。おゝ何こいふ簡單明瞭な勝負だらう！あくまでも機械的であり、事務的である。そして、それですべてが終つたのだ。

かうして、カジノでは一日に何回こなく、この冷やかな勝負が續けられる。そこには何等の拘束もなければ、情實もない。人格も、知識も、爵位も、國家的背景も、輸贏を爭ふべく何等の價をなさないのである。全く小氣味のいゝ世界、小氣味のいゝ場所だ。

年收一千萬圓

カジノ始まつて以來、此處で輸贏を爭つた人間の數は恐らく何百萬人、何千萬人こいふのだらう。そして、その中には無論、一擧に何萬何十萬こいふ金をつかんで、意氣揚々こ引き上げた者も尠くはないだらう。が、「ルレット」にしろ、「カルタ」にしろ、畢竟は運任せのもので、その間に何等奇策を運らすべき餘地のないものだから、大體に於ては、何時も堂元たる「カジノ」二人が儲けるわけになる。

最近の統計によれば、日々賭場で取扱ふ金銀の高が、一日平均二十萬圓を下らず、會社一年度の純益金が九百萬圓乃至一千萬圓、額面二百圓の株に對する利益配當が、百二十圓乃至百五十圓だこのこと。一私立會社が、たこへ二時間か三時間で一廻りできるほどの國にもせよ、ここにかく一個の獨立國たるモナコの國費全部を負擔した上、巨額の經費を費して、なほ一年に一千萬圓の利益を擧げるこは！讀者よ、何こ驚くべき話ではないか。

だから、先年（一九八九年）、カジノの營業期間が向ふ五十ヶ年間延期された時には、額面五百

フランの株が、一躍して四千七百七十フラン——約九倍半といふ恐るべき高値を呼んだといふことだ。現今いくらで取引されてゐるか自分は知らないが、恐らくもつと高くなつてゐることだらう。

惡辣な手段

もと〳〵惡どい仕事なのだから、その利益を擁護し助長するためには、實に惡辣な手段を弄してゐる。カジノに使はれてゐる役員雇員の總數は、約三千人といふことだが、その中には、隨分奇怪な仕事をしてゐる者もある。例へば、モナコの國内到る處——ホテルにも、公園にも、酒場にも料理屋にも、必ずその姿を見受ける男女のボン引だ。此奴は絶えず職業眼を働かせて土地馴れぬ椋鳥を見つけてゐる。そして、これは思ふと、手をかへ品をかへてカジノ行きを勸誘する。

會社の中には、また「アントレナール」とて、會社の金で博奕をやつて見せて客を釣り込むのを仕事としてゐる者もあれば、自ら賭博必勝の秘術を心得てゐると稱して、不案内の客に金を出させて賭の代理人を勸める役もある。うつかりこんな手合に引掛つたらおしまひだ。初め一寸勝たせて客に興を持たせた上、だん〳〵深みへ連れ込んで、結局元も子もなくさせてしまふ。カジノ始以來此奴等のために身を過つた者はどれほどあるか知れない。

それからまた『出來事』を製造する役といふ甚だ穩かならぬ職がある。此奴は、會社のためにならぬお客——と云へば先づ無暗に勝つお客だ——を、賭場から追ひ立てるために、故意に喧嘩を吹きかける役だ。一見お客のやうな顏をしてゐるから、吹き掛けられた對手はまさか、それが喧嘩屋だとは思はない。大抵ムキになつて怒る。『うるさい』『默れ！』『何を！』てなことで忽ち『出來事』が突發する。さうなると他の客は迷惑だから當然ブツ〳〵云ふ。即ち、占めた〳〵だ。待つてましたさばかり、今度は制服姿の役員が飛出して、他のお

〔第十三圖〕 賭博の光景

容の邪魔になるから、お氣の毒だが、喧嘩は公園に行つて……ナンテこゝはまさか云はないがこにかくその二人を外へ連れ出してしまふ。流石は、凄腕のモナコ公認賭博株式會社重役の案出した營業法だけあつて抜目がない。

自殺者數
三千餘人

かういふ恐ろしい陷穽が次ぎから次ぎへこ設けられてあるのだから、大抵の人間はそれに引つ掛る。すべて、賭事こいふものは、一度その味を覺えるこ、なか〳〵止められるものでない。結局行くこころまで行つてしまふのがおきまりだ。こころが悪いこゝに、モナコには枝ぶりの好い樹木は餘りないが、飛び込むには絶好の場所がいくらでもある。別に汽車に乘つて、日光、淺間、琵琶湖なんて、半日も一日もかかるやうなこころへ安住の地を探しに行かなくこも、一歩カジノを出れば、君子の國ならば差詰め『一寸待つて下さい』と云ふやうな高札の立つてるであらうこころの場所が、鼻の先きにあるのだから、ブン廻しの球に自己の所信を否定された運命論者や生存の意義を確め損になつた唯物主義者共は、フラ〳〵フラ〳〵こ文句も後悔もなく其處へ引きつけられてしまふのである。そこでまた統計だ。その統計によるこ、カジノ開場以來、モンテ・カーロに於て自ら殺した者が、三千有餘人こいふのだ。無論、統計殊にかういふこゝの統計には幾らか漏れがあるものだから、實際の數は恐らくそれより何分か、或は何割か多いにちがひない。何?それだけお客があれば葬儀屋商賣が成り立つて諸君、笑談ぢやあない。對手は揃ひも揃つて腹の空つた亡者だよ。

だが、いくら腹の空つた亡者でも、自分の所有地内に轉がつてゐれば、何こかしなくてはならない。そこで、モンテ・カーロには『ポンピエ・クロックモール』こいふ、消防夫のやうな服を著た、死骸取片附專門のお役人がある。

このお役人が、海岸でも公園でも、市中でも、こにかく仕事のありさうな場所は夜も晝も絶えず巡邏して、亡者を見附け次第、身元調査も檢死も一切ヌキにして、ごん〳〵墓場へ持つて行く。手廻しはいゝ。墓場にはごんな時でも、チャンこ穴が掘つてある。

一挿話

大分話がくすんで來たから、一寸息ぬきに、此間聽いた痛快な話を一つ吐き出さう。

それは、かの未曾有の大戰が突發した前年のこゝだ。このモンテ・カーロのカジノへ毎日のやうに出入りする一人の青年紳士があつた。何時も賭場へ入るこ、

第何番かのルーフレットの近くに立つて、熱心にその一廻一轉を注意してゐた。折々は小型の手帳を出して何か認めてゐることもあつた。が、不思議なことに、何時もたゞ見てゐるだけで、賭けやうとはしなかつた。さうかうするうちに約二ヶ月ほど經過した。

と、ある日、何と思つたのか、またごういふ成算があつたのか、その青年紳士は、長い間注意に注意を加へたそのルーレットのある一ツの目に對して、數萬金を賭けた。豫て、擧動不審の男として注意を怠らなかつた監理人はもとより、一座の定客連も、餘りのことにびつくりした。

やがて、勝負は開始された。そして、直ちに決着した。一同は再びびつくりした。球は、その青年紳士の豫定した點に、冷然として納まつてゐたのである。モナコ公國開闢以來の出來事だ。

だが、青年紳士は表情すらも變へなかつた。堂元の積み上げた夥しい黃金と、なほそれに倍する全額の信用手形とを、携へてゐたスーツ・ケースに掻き込むと、悠然として其處を立ち去つた。そして、待たせて置いた、見るからに輕快な自動車へ飛び來つて、全速力でフランスの國境へと疾驅した。

それからやゝしばらくして、その疑問の青年紳士は、ロシヤの貴族だといふことが、入口の番人によつて場内の人々へ傳へられた。その夜、モナコ公國警視廳は、警吏の非常召集を行つて、國内のあらゆる『危險區域』を嚴重に警戒したにもかゝはらず、二人のピストル自殺者と、三人の投身未遂者とを出した。

それ以來、件の青年紳士が、奇蹟的成果を納めたテイブルに集まる者が激增した。そして、『機械にもそれ〳〵に個性がある』といふ評判が立つた。その結果、モナコ公國公認賭博場のルーレットは、全部新しく造り更へられた。

ところで、そのロシヤの青年紳士が、カジノの賭場を流して去つてからいくばくもなく、當時の露都ペテルスブルグに於て一大事件が突發した。盧無黨と無政府黨と革命的色彩をもつた無産階級者の一團體と、この三つの聯合大デモンストレイションである。その運動は、ロシヤ大革命の烽火ともいふべきであつたと傳へられてゐる。そして、その重大事件の發頭人は、件の青年紳士その人であつたといふことである。

黃金至上主義者の偶像ともいふべきモナコのカジノと、『働かざるものは食ふべからず』主義者の革命運動！何といふ皮肉な對照だらう。

さて、話はまた本筋にかへる。

監獄のない國

モナコにはも一つ奇妙なことがある。それは外でもない、監獄がないことだ。

こいふこと如何にも天下泰平のやうで、これは監獄ではない刑務所こいふものだ、なごご講釋しなければならない厄介な建物をフンダンに持ち合せてゐる君子國の住人は、いささか羨ましく感ずるかも知れないが、何も監獄が無いからこて必ずしも天下泰平こきまつてはゐないから、さう急いで羨なには當らない。

天下泰平ごころか、國が國だけに、世界中から山師、破落戸、醜業婦、等、等、等、至つて柄の悪い分子が續々こ押し掛けて來て、國内は正に百鬼蕩行こいつた爲體。カジノはいふに及ばず、海水浴場、公園、射的場、ゴルフ・リンク、酒場こ到るこころに、こんな手合がごろついてゐて、喧嘩もすれば、詐欺もやる。賭に負ければ自棄酒をあほり、勝てば勝つたで又喰ひ醉ひ、果てはごころも時も忘却して、あらゆる醜體を演ずる。

だが、何事も金づくの國のこと、大抵の犯罪は罰金で帳消しだ、もし、禁錮入獄の必要があつた場合には、隣町のニース（フランス）の監獄を拜借する。まだ變つたことが澤山ないが、餘り長くなるからこのくらゐで一先づ打ち切りにしやう。

物騒な世界一

アメリカの新犯罪

世界一はアメリカの名物であつて、それがまたアメリカ人の大きな誇りである。そして、最近ニュー・ヨーク市の人口が、ロンドン市のそれを凌駕したこと、即ちニュー・ヨーク市が世界隨一の大都會こなつたことは、彼等の最大の誇りなのである。その世界第一——ごうも世界第一ばかり出て恐れ入るが、その、仕方がないも一つ、世界第一の大都會こなり上つたニュー・ヨーク市なるものが、一面に於ては、その物騒なことにかけても世界第一こいふのだから、恐れ入る。

ハンド・アップの辻强盜、銀行破りの黒手團（ブラック・ハンド・ギャング）等、々、々の大規模な犯罪が彼の地の名物であることは、讀者も既に御聞き及びのことこと思ふが、最近の統計によるこ、强盜に押入られる家が毎日平均百二十軒、殺人强盜の犧牲になる者が、これも毎日五六十人、それから金庫破りの犯行が毎

日十五件、そして、それらの犯人の百人の中の十五人までは逮捕されるが、あとの七十五人は、それなり行方をくらましてしまふのだとは驚いたもの、しかし、それでもニュー・ヨークの市民は、一向氣にもしないらしい。尤も氣にしたところで仕方もない。

だらしのない警官

何しろ黄金本位の國だから、巡査も月給だけの働きはする、百圓これば百圓だけ、二百圓貰へば二百圓だけの勉強はする。が、身命を賭しても犯人を檢擧して市民を高枕安臥せしめやう、なぞといふ考は毛頭ない。だから、これは危いと思へばテンデ傍に寄りつかない。鼻の先で強盗が仕事をヲッ始めても、見て見ぬ振をして引返へす。でも偶にコソ泥ぐらゐは捕まへるが、これも對手が魚心の持主なら、此方も直ぐ水心を出して妥協する。賴りないこと夥しい。

かく巡査がなつてゐないところへもつて來て、アメリカといふ國は、例の通り法律が各州によつて違ふ。甲の州では體刑に値ひする罪でも、乙の州では先づ罰金ですむ。丙の州で犯せば罰金刑を喰ふことでも、丁の州では何でもないといつたあんばいで、その間に統一もなければ、聯絡もない。だから、甲の州では血眼になつて探してゐるが、乙の州では、のほゝんだ。無論、重罪

〔第十四圖〕ラジオ持つたアメリカの巡査

犯人なら甲州から乙州へ取押へ方を賴むから、一通り捜査するくらゐなことはするが、自分の州のことさへ滿足に行かないのに、ごうして他の州のことまでやり了せやう。まづ十中八九までは捕まりつこない。

司法制度がヨタで、警官が腰抜けと來り、やア、惡黨の天國だ。

だから、素寒ピンはいゝが、多少ものを持つてゐる人間は片時も安心してはゐられない。何時持つて行かれるか判らないし、持つて行かれたが最後、到底それが出て來つこはないからだ。何しろ泥棒も夜半コッソリ這入つて來るくらゐの程度ならまた防ぎ方もあるけれど、いきなり傍へ寄つて來て、ピストルを突きつけ

る。下手をすると、生命までも持つて行く。五人も十人も白晝公々然と表から這入つて來て、ズラリとピストルをならべる。といふ物騒なしろものが多いのだから、トテモ防ぎのつくものではない。

そこで、アメリカでは、この恐ろしい難に備へるため、その所有物に保險をつけて置く。無論これくらゐな危險な保險はないから掛金の率は隨分高いが、ごうせ持つて行かれたら一錢も返つて來つこないのだから、いくら高くても高價なものを持つてゐる者は掛けて置いた方が、萬一……ではない結局得なのだ。

半分は嘘の盜難

ところが悪い奴は、種々の奸計を用ひて、その保險金を詐欺しやうとする。

最近ニュー・ヨークのレオン・ホーヂといふ私立探偵は、「ニュー・ヨーク中央區に於ける毛皮類の盜難は、四十パーセント乃至六十パーセントまで贋僞の屆出である」と云つた。「嘘の皮」といふたとへが現實化したわけだが、これに對しては、警察當局も裁判所當局も等しく是認を與へてゐるといふ。それにしてもこの夥しい贋僞の盜難屆は果して何を意味するか、といふと驚くべし、それ殆んどみな保險金詐取の目的から出たものなのだ。……

五十萬圓の毛皮の行方

最近あるビルヂング內の毛皮商へ夜半盜賊が押し入つて、價額約二十五萬ドル（五十萬圓）の毛皮類を盜み去つた事件があつた。

被害者は五萬ドルの保險金を要求し、保險會社は一應現場を取り調べて、疑ふべき點を認めなかつたので、要求された金額を支拂ふことに決定した。ところへ現れたのが前記のホーヂ探偵だ、彼はこの盜難をテツキリ贋僞の盜難だと睨んだので、種々苦心の末遂にその眞相を明らかにした。

壁の穴

盜難にかゝつたといふくだんの店は、壁一重でビルヂングの廊下に接してゐたが、その壁には大きな穴がうがたれ、誰の目にも盜賊はこの穴から店內に侵入したものとしか思はれなかつた。ところがホーヂ探偵は、父が大工だつたところから大工道具の構造を熟知してゐたので、その壁の中にめり込めてあつた木片の切れ目を鑑定して、直ちにそれが決して廊下の側から切つたものではなく、店內から鋸で挽き切つたものであることを發見した。

そればかりではない。件の穴は店内の側の方が大きくて、廊下の方が小さい。若し盗賊が廊下から壁をこぼちはじめたものこするこ、その反對になるべき筈である。何故ならば、厚さ二分の一メートル餘もある壁に穴をあけるのは、仲々容易なことではない、從つて仕事が進むにつれて困難の度が增し、且つ疲勞が加はつて、穴はだん〳〵小さくなるのが普通だからだ。この點から見て、この壁の穴は、盗賊が外から侵入したことを證明するものこはならない。

棚の釘

ホーヂ氏は店内を點檢して更に確實な證據を發見した。

即ち前記の穴のあけられた部分に近く内部の壁にしつらへてあつた上下二段の棚のうち、もこのやうになつてゐた下段の方には何等の異狀をも認めなかつたが取り外づされてあつた上段の方には、明らかに何人かが内部から之を引きぬいたこ推定さるゝ痕跡が殘つてゐた。——棚に殘つてゐた釘がみな曲つてゐて全然もこの釘穴に合はなかつたのだ。——若し盗賊が室外から「押しぬいた」ものなら、釘が全部曲つてゐる筈がない。もちろんこの場合、盗賊が穴から入つた後、何等かの必要上棚を引き抜いたこも考へられぬではないが、もしさうだこするこ、棚が邪魔になつてくだんの穴からは小さい子供でも出入りができない筈である。

嘘の盗難の一例

これは怪しい。恐らく店主は詐欺の目的で、畫の間に毛皮を何處かに持ち運んで置いて、壁に穴をうがち、盗難を裝はうこしたものに違ひない。こ、ホーヂ氏は斷定したのである。

これも矢張り最近ニュー・ヨークであつた事件だ。……ある夜半、某警察署の「盗難報知ベル」こいふのは、例の、それが裝置されてゐる戸や何かに盗賊がふれるこ、直ちに電流が通じて、ベルが鳴るこいふ仕掛だが、アメリカでは、その仕掛の電線が直接最寄りの警察署につながつてゐて、盗賊が戸を開けるこか、窓のガラスをたたき破るこかするこ同時にその家の番地の附いたベルが鳴つて、何處に盗賊が入つたこいふここが、チャンこ判るやうになつてゐるのだ。だから、眞實の盗難ならば、十中の八九までは直ちに犯人を逮捕するここができるのだが、虚僞の盗難に對しては全く何の用もなさない。こいふわけは、虚僞の盗難を製造してやうこする輩は、たゞ警察のベルを鳴らして、警官を呼び寄せさへすればいゝのだから、戸を開けるなり、窓を破壞するなりしてしまふこ、そのまゝ一目散に逃げてしまふからだ。

こゝろで、その盜難報知ベルが鳴つたのだから、當眞の警官は驚破、盜難だ？こいふので、直ちに自働車で現場へ驅けつける。

現場に到着して見るこ、入口の戸が開け放しになつてゐて、店内は足の入れ場もないほご取り亂されてゐる。まさに盜賊は、入口の戸を破つて入つたものこしか思はれぬ。が、頭腦の緻密な探偵は、それだけで滿足しはしなかつた。彼は鋭い感覺を働かせて、店内を殘るくまなく檢めた。果然、彼は怪しむべきものを發見した。——店内の一隅に置かれてあつた陳列戸棚を動かして見るこ、その背後の壁に大きな穴が……しかも、内部から掘り掛けて中止したものこ明らかに認定さるゝ穴がうがたれてあつたのだ。

それ以上云ふ必要はあるまい。だが、讀者は、ごうしてそんなへマな眞似をその店主はしたのだらう、こいふ疑問を懷かるゝであらう。それはかうなのだ。

いふまでもなく、その商店の店主は、前の毛皮商こ同手段で保險詐欺をしやうこ企てたのだ。が、餘程、慾のツ張つた奴だこ見えて、店内から持ち出した商品をシカゴに送つて賣り捌かうこした。こゝろが例の盜難を裝ふための穴は、最初は造作なく開くこ思つてゐたのが、いざ取掛つて見るこ、何しろ人目を忍んでやるのだから、なか〳〵仕事が捗取らない。そのうちにシカゴでは、くだんの商品を賣りに出した。ぐず〳〵してはゐられないこ思つた店主は、何時貫通するこも知れない穴の方は斷念して、戸口から强盜が押入つたやうに裝つたのだ。

盜難保險の盜難？讀者よ、なんこ驚くべき新事件ではないか。……次ぎはアメリカで最大の財産犯罪、「小切手僞造事件」の話。

小切手僞造事件

× ×

わが國ではまだ充分に普及してゐない。が、アメリカでは、——イギリス、フランス、ドイツ等に於ても同じ——極く下流の人を除くの外、卽ち銀行に多少なりこも預金のでき得る人は、日常の支拂ひにこの小切手を使用するのが普通になつてゐて、「小切手は我が通貨だ」こ言はれてゐる。つまり、例へば私が一銀行に當座預金をするこ通帳こ小切手帳こを與れる。——こ云つても無論その銀行が規定してゐる最低額以下の金額では駄目だが——で、もし、私が肉屋にでも八百屋にでも金を拂ふ必要が起れば、それを現金で拂ふ代りに、小切手にその金額を記載し、署名して之をその肉屋なり八百屋なりに渡す

するとその肉屋なり八百屋なりは、それを自分の取引銀行に持つて行つて、その額面の金額を自分の預入欄に記入して貰ふ。かくて、私の取引銀行と、その肉屋なり八百屋なりの取引銀行とは手形交換所で、お互の銀行に宛てられた小切手を交換し、交換尻を決濟する。しかも、この銀行間の決濟も、貨幣や紙幣を以てするのではなく、日本なら日本銀行、アメリカなら聯邦準備銀行といふ中央銀行又はこれに類似の大銀行に於ける預金帳簿上で振替へられるだけなのだ。つまり、歐米の諸大國では、銀行券や不換紙幣よりも、小切手が普通の支拂要具となつてゐるのだ。

そこで、自然この小切手を僞造したり、變造したりする奴が出て來る。殊に何事も大規模なアメリカでは、僞造、變造の小切手も、表示金額何萬ドルといふ大ものが決して珍らしくなく、また僞造變造の方法も驚くべき大仕掛のものが少くない。アメリカで銀行犯罪の研究家として知られてゐるエドワード・エイチ・スミス氏の調査によれば、現在アメリカ全州の手形交換高は一年にザット五千億ドルに達するが、その中で必ず五千萬ドルの小切手、手形の僞造及び變造が發見されるといふことだ。五千萬ドルといへば約一億圓の大金だ。一年間に一億の小切手僞造！物騒な話ではある。

惡漢の組織

この犯罪を歷史的に觀察すると、はじめは主として僞造が行はれた。然して、その最も盛んであつたのは、一千八百六十年から十九世紀末までの間で、その後二十世紀に入つてからは、僞造よりも變造の方が多くなつた。僞造時代に鳴らした惡漢には、ウォーター・シェリダンとか、スペンス・ペチスとか、ウエード・ウイルケンスなどといふ强者がある。

こゝろでこれらの惡漢共は、みな一人で仕事をしたのではなかつた。チャンと組合を組織してやつたのだ。先づ一番上には親分がゐて、僞造事業に關する一切の費用を負擔し、次ぎにはベンマン（筆蹟者）といふ役があつて、他人の署名の文字や、金額の數字を僞せて書く。この二人がいはゞその僞造團の幹部格で、その下には幾人かの下手がゐる。此奴らは出來上つた僞造小切手を行使するほか、僞造に關する一切の對外活動をやる。こいつた組織になつてゐた。しかも、これらの惡漢團は、常に他の徒黨と連絡を取つて、極めて組織的に、大仕掛けの仕事をやつてゐたのである。

銀行家側の對策

これに對して當時の銀行は如何なる對策を講じたかといふに、無論はじめは警察や私立探偵に依頼して張本人の逮捕を謀つた。が、捕まるのに何れも一番下の者ばかりで、肝腎の幹部格の奴はごうしても捕縛するここがで來なかつた。そこで、これではいけないこいふので漸次小切手や手形に技術的工夫を凝らして、根本的に僞造變造を防止する途を講ずるやうになつた。

かくて先づ第一に着手されたのは、用紙の改良であつた。が、それは結局徒勞に終つた。用紙そのものは立派に贋造を防止するに足るものが出來上つたのだが、用紙ばかり改良しても、表面の文字や數字の變造を防止し得ない以上、大した効果はないこいふここが判つたからだ。

そこで今度は、インキの改良が企てられた。發明家達は、われもくここれが研究に志し、いろ〳〵の種類のインキを造り出した。が、何れもみな、或種の酸類やアルカリ性の溶劑にあふこ苦もなく抹消されてしまふものばかりで、これなら如何なる藥品を用ひても大丈夫こいふものは出來なかつた。結局インキの改良も失敗に終つたのだ。

折角、用紙を改良しても一向贋造を防止する役には立たず、インキの改良は全然失敗に終る。ここに於てか、發明家達は、更に何等かの防禦方法を考案しなければならなかつた。が、早速には仲々いゝ方法も見出せなかつた。

僞造王現はる

ここころが、十九世紀末に至つて、或發明家が、パーフオレイター（穿孔器）こいふ器械を發案した。これは現在、世界中の銀行で用ひられてるるもので、小切手や手形の面に、その額面金額を小さい孔で打抜く器械である。何しろこれは、金額の數字を紙に打抜くのだから、インキで書いた時のやうに抹消されるおそれは絶對にない。されば、この器械が發見さるゝやアメリカ中の銀行家は雀躍して歡び、もう永遠に小切手の金額が改竄されたり、僞造されたりするここはあるまいこ考へた。

ここころが此處に一奇才が現はれた。名はチャールス・ペッカーこいひ、後年「僞造王」の綽名を取つた程あつて、實に恐るべき僞造の名人であつた。

時は一千八百九十五年、彼は一商人こしてサン・フランシスコに現はれ、同市のネヴアダ銀行に若干の預金をして取引を開始した。そして、或日のこと、彼は、同じくサン・フランシスコにあるクロッカー・ウールウオース銀行搬ひの額面金額十二ドルの小

切手を手に入れた。それは改良用紙に最上等のインキが用ひられてゐた上に、穿孔器で十二ドルの數字がハッキリと打抜かれてゐた。

然るに彼は先づこの小切手の印刷された部分と署名の處とに、一面にバラフィンを塗りつけた後、漂白液に浸して、番號や日附けや金額の數字を全部抹消してしまつた。そして、それからインキと或藥品とを用ひて表面の色上げをし、光澤をつけて元形と寸法相違のないものに仕上げた卽ち署名だけしてある全く新しい小切手を得た譯である。が、まだ「十二ドル」といふ數字——穿孔器で打抜かれた穴はそのまゝ殘つてゐる。これがあつたのではどうすることもできはしない。

そこでベッカーは驚くべき巧妙な方法を用ひてその小孔を抹殺してしまつた。果して彼は如何なる方法を用ひたか。讀者よ、この恐るべき天才は、その小孔に豫て溶してあつた製紙用パルプを一々克明に塡充したのだ。そして、それが濟むと、よく乾かして、今度は再び銀行のと全く同型の穿孔器を用ひて、二萬二千ドルの數字を打抜いた。……かくてクロッカー・ウールウォース銀行拂ひの金十二ドル也の小切手は、外形少しも違はずに金二萬二千ドル也の小切手に早變りしてしまつたのである。

彼はこれを自分の取引銀行であるところのネヴアダ銀行に持參して、マンマと二萬二千ドルの現金を受け取るや否や、早速サン・フランシスコにグッバイした。

最新式の防禦裝置

このベッカー事件は、アメリカ全國の銀行業者竝びに預金者を震駭させた。そこで、發見家達はまたもや別の防禦方法を案出しなければならなかつた。かくて穿孔器が破れて以後、幾多の發見家の慘憺たる苦心によつて、コルゲイター、二重印刷器、インプレグネイター等の器械が發見された。が、そのうちコルゲイター——小切手面に金額の數字だけを恰度浮彫のやうに浮かす器械——は、いろ〳〵の形式のものが造られたが、結局穿孔器以上の功績を殘さなかつた。何しろ紙面を浮き上らせただけのことだから、その小切手を硝子板か何かの上に置いて、紙切りナイフか、親指の爪で擦れば浮上つた部分は、極めて容易に平滑になる。從つて何の役にも立たなかつたのだ。

次の二重印刷器は、同時に小切手の表裏に數字を印刷するといふ工夫だが、インキの問題で行詰つてしまつた。いくら表裏に印刷しても、インキが藥品によつて容易に抹消される以上、結果は片面に刷つた場合と大差ないからである。

最後のインプレグネイターといふ器械は、前二者を巧みに折衷したもの——即ち、コルゲイターの場合のやうに、小切手面に數字を浮かして、その浮上つた部分に、機に敗けない上等のインキを注入するもので、恐ろしく念が入つてゐるだけに、僞造、變造は十中八九まで防止できる。これでも絶對に安全だとはいへない。しかし、とにかく、今のところこれ以上の器械はないので、アメリカの銀行業者は殆んどみなこれを用ひてゐる。

かく銀行側の防禦が嚴重になつたので、小切手僞造、變造者連も一寸手が出せなくなつた。そこで、近來、彼等は、從來のやり方を捨てゝ、全く新規な方法——銀行員中の惡い奴と結託して、初めから僞の小切手や手形を振り出すといふ方法を執り出した。要するに小切手の詐欺の徑路は最初は、僞造が多かつたが、中頃に變造が主として行はれるやうになり、最近では、方法こそちがふが、再びもとにかへつて僞造が行はれ出してゐるといふわけである。

歐米のポスター

ポスターの全盛地

世界で最もポスター宣傳の盛んな國はイギリスで、ドイツ、フランス、イタリヤ……等のヨーロッパ大陸の諸國がこれに次ぐ。アメリカでは、以前には隨分盛んであつたが、今では壁張り物は殆んど見られなくなつた。尤も議都市の町外れ、又は郊外の大道に沿つたところには、今なほそれを散見するが、それは必ず一疊敷きくらゐもある大物に限られてゐる。かくアメリカの市街から並形ポスターの消え去つた理由は、……なぞと大きく出たところで、その眞因は、到底われ〳〵門外漢にはわからないが、多分それは、スピードの速い交通機關——特に自動車が極度に發達したため、また市民の生活が餘りに落附きのない、あわたゞしいものとなつたために、小型のポスターなぞでは、到底宣傳の目的を達することができなくなつたからではあるまいか、と自分は思ふ。

ボヴリル停車場

とにかく、最近アメリカでは、小數の大物を除くの外、壁張り物は殆んど見られなくなつた。これに反して、イギリスでは、國内到るところに、ポスターの貼附を見出し得る、壁の上、街路に沿つた倉庫なぞは無論のこと、汽車の停車場、地下電車の停車場、車内、エレベーターの中なぞ殆んど空處なきまでに貼附されて、

〔第十五圖〕　ロンドン北西鐵道會社案内所入口

ゐる。曩名なごは何處にあるか判つたものではない。之についてこんな話がある。ある男がイギリス通になるつもり……であつたかごうかは知らぬが、ここにかくまだ案内も知らぬのに一人で内地の旅行に出懸けたものだ。出懸けたのはいゝが、歸つて來てから大いに通を氣取つて曰く「イギリスこいふ國は實に妙な國だ。同じ名の停車場かいくらもある。一番多いのはボヴリルこいふ停車場だが、こいつが半日ばかり乘つてゐるうちに四つか五つあつた」だこ。諸君ごう思ひます。本當にイギリスには、同じ名の停車場が四つも五つもあるこ思ひますか。……ふざけてはいけない。第一、ボヴリルな

〔第十六圖〕　洋服屋の廣告ポスター

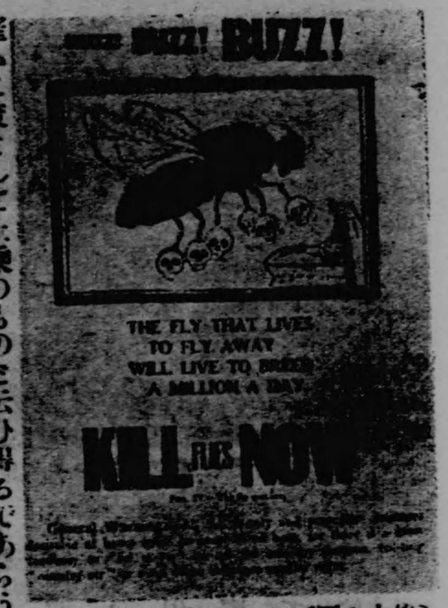
どといふ處はイギリス中探したつて一つもありはしない。奴ざんポスターを停車場だこ思つたのだ。ボヴリルこいふのは、よくイギリス人がか弱な兒供なごに飲ませる肉のエッセンスだが、そのポスターには他のポスターのやうに繪を用ひず、たゞボヴリルこいふ名だけをゴチック風の太い字で表はしてある。それが繪入の美しいポスターで埋まつてゐる停車場の内壁の眞中邊に嚴然こ納つてゐるのだから、見れない者には宛も停車場の名のやうにも思はれるのだ。

プーア・メンス・ギヤラリー

とにかくそれくらゐイギリスでは、ポスター宣傳が盛んであり、その方法も進んでゐる。現下院議員のフレデリック・ハイアムといふ人などは、さきの歐洲大戰中、盛んにポスターで軍事宣傳をして偉功を奉し、その功勢によつて『サー』――準男爵とでもいふべき稱號を頂戴したくらゐだ。實際目のさめるやうな色合や奇拔な趣向のポスターは人の注目を惹きやすい。だからさま〴〵のポスターが美を競ひ奇を爭つてゐる街路沿ひの壁前などには、知らず識らずの中にこれに惹きつけられて、人だかりのするものだ。こんな關係からイギリスでは、ポスターの張り出し場所を「プーアメンス・ギヤラリー」即ち貧民の美術館などと呼んでゐる。

政戰とポスター

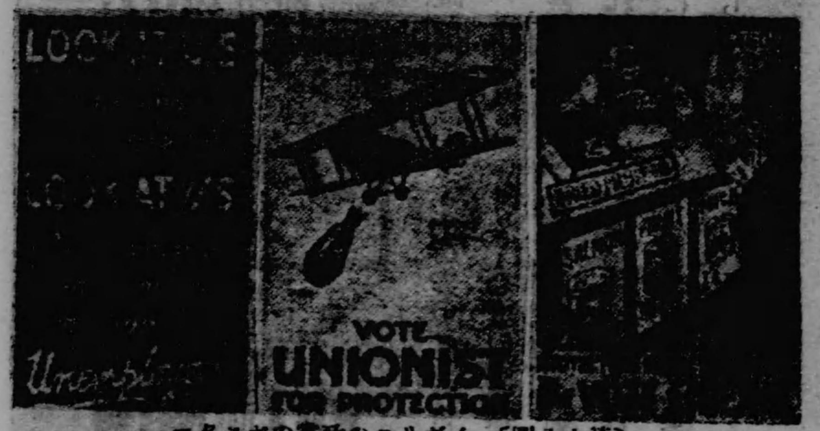
そんな風だから、イギリスでは、商品や芝居、映畫等の廣告宣傳にはもとよりのこと、種々の催しもの――例へば、展覽會、音樂會、講演會、運動競技會……といつたものにも盛んにポスターが利用されてゐる。先の勞働黨内閣瓦解後の總選擧には『未曾有のポスター戰』と稱せられたくらゐ、ポスターによる宣傳が激しかつた。



〔第十七圖〕イギリス府の發行したポスター（驅除宣傳に用ひたもの）

反對黨の壯士などが彌次を飛ばして演說の防害を試み、ために目的を阻害されることの多い今日、いざ明日は關ヶ原といふ場合、或は一選擧區に一時に遊說することの困難な折などに、立候補の主旨や政見や、各黨の政綱などを簡單に巧みな意匠で、色彩りよく、ポスターとして張り出すなどは確かに策として上乘のものと云ひ得るであらう。

我國でも、いよ〳〵今度の總選擧は普通選擧法によつてなさるゝのだから、これまでのやうに候補者が村長さまを先棒にして戸別訪問をしたり、珍品によつて愚民を釣つたりすることは許されない。從つて、候補者たるものは、いやでも應でも自己の政見を何等かの方法によつて選擧民に徹底させるより外はない。かうなると矢張りイザ鎌倉といふ場合に役に立つものはポスターだらう。



〔第十八圖〕イギリスの政黨のポスター

英米のポスター

ところで、現今の歐米のポスターにはどんな畫風の繪が用ひられてゐるか、といふと、先づ、英米物には何といつても印象派のものが多い。特に地味なイギリスでは、圖案色彩ともに極めて落付いたものが喜ばれてゐる。從つて美しいことは實に勿體ないくらゐ美しいが、これは奇拔だ、と思ふやうなものは餘り見當らない。奇拔といふ方面からいふと、イギリス物よりアメリカ物の方にその長所を見出し得る。が、アメリカでも、一流の商店や名の賣れた商品の廣告には奇拔といふことを避ける風がある。

從つて、新奇な繪畫の流派ができても、イギリスやアメリカには仲々その手が廻つて來ない。かの立體派（キユービスト）の一派と目すべき幾何學派（ジヨメトリスト）なごは元來イギリスの產物であるにもかゝわらず、かういふ類のものは、イギリスやアメリカのポスターには餘り用ひられてゐない。

〔第十九圖〕お茶の廣告

表現主義のポスター

ところが、ヨーロッパでもドイツやイタリヤでは、表現派や未來派の繪畫が盛んに用ひられてゐる。殊にドイツのポスター意匠には表現主義に影響されたものが非常に多い。

表現派の作品といふと、讀者は直ちに奇怪な不可解な構想を想像するであらう。そして、アンナものが公衆に對してどれほど迄の引力を持ち得るかといふ疑ひをさしはむであらうけれども、表現派の作品といつても、さほど不可解なものでもなければ、いたづらに奇怪を好んだものでもない。勿論、表現主義は、再現の藝術、現實描寫印象主義などに反抗して起つた藝術であるから、從來の自然再現の藝術を見馴れたわれ〳〵の眼

は、ある物體からそのエッセンスを抜きとつて、強く單純化したものとも云へるでらう。それだけに、その作品は何人にも極めて強い印象を與へる力を持つてゐる。或は

〔第二十圖〕フランスのポスター
（化粧品の廣告）

には、雖分眼新らしく感ずる。だが、山はあくまでも山であり、河はあくまでも河であつて、それは表現主義の藝術家にも同じものに見えるのだから、表現されたものと雖も、それ以外のものである筈はないのだ。一口に云へば表現派の藝術

〔第二十一圖〕ドイツのポスター
（タバコの廣告）

あるものは餘りにグロテスクに過ぎるかも知れない。不可解に陷る恐れがあるかも知れない。けれども人はみな誰でも先天的に未知から既知へ進まうとする慾望を持つてゐる。殊に近代人の知識慾は強い。不可解なものを見て、どうして、そのまゝ看過してしまふものでない。必ずそれに目をつける。目をつければ……つまりそれでいゝのではあるまいか。廣告意匠としてはそれで充分ではあるまいか。

政府のポスター

表現主義の廣告ポスターは、一千九百十二年に、畫家オスカー・ココシュカが「嵐」といふ雜誌のために作つたものが、その最初のものだと云ふ。して見ると誕生以來まだ十五年ばかりにしかならないわけだが、今ではもはや動かすべからざる地位と勢力とを得てゐる。諸種の社會運動や政治運動の宣傳ポスターは、事實上、この樣式のものに限られてゐると云つていゝ。

此處に掲げたのは、何れもかの一千九百十八年の總同盟罷業（ゲネラルシトライク）の際に、政府が出した就業勸告の宣傳を置き、上中下の鐵白には、「不秩序と[illegible]殺戮とによつて若き自由の息の根を止めるな。さもないと汝等の子供たちは餓える。」そといふ文句が巧みに配してある。つまり、汝等がいつまで

〔第二十二圖〕　ドイツ政府の發行したポスター（その一）

も混亂狀態を續けて、多數の犧牲者を出してゐるこ、折角生れたこの自由の共和國も、成長を見ずして亡びるぞこ、勞働者たちをいましめたものなのだ。赤族を抱へた子供はドイツ共和國を意味する。

第二十三圖は、右上に工場の圖を、左上に勞働者たちが仕事を止めて集つて協議してゐる圖を配し、下に棺の側に女親が死兒を抱いて立つてゐるこ、その傍に幼い女の兒が泣いてゐるさまが表はしてある。上中下三段に記された文句は「働かない者は、自分の子供の墓穴掘りだ」宛も廢墟のやうな工場、仕事を止めて集つてゐる勞働者の群、心配こ飢餓このため痩せ細つてゐるその家族……何こいふ悲慘な構圖だらう。親こして、夫こしてその家族のこさを愛へぬ者はない。從つて家族の苦しむのを見れば、固い決心も弛んで來る。その人情の機微な點をひしこ摑んで、勞働者の弱點をつき、再び勞働にかへらせやう、そして、共和國の成長を保護しやうこいふのである。

〔第二十三圖〕　ドイツ政府の發行したポスター（その二）

ヨーロッパの迷信

悪日と不吉な數

文明開化を誇るヨーロッパ諸國にも、やはりいろ〳〵の迷信がある。そして、それを仔細に研究してみると、キリスト教から來たものが非常に多いことを發見する。

イスパニヤの首府マドリードの住民が、その町の位置が全ヨーロッパ諸國の首府の中で最も高いといふので、この町には『天帝の加護が特に大だ』と信じてゐるなどは、その最も顯著なのもだが、これと大差のない迷信は、いくらでも見出し得る。

例へば、ヨーロッパ人は、一般に金曜日を『悪日』としてゐる。この日に人を招待することか、旅立ちをすることか、新規の事業に取掛ることいつたことは努めてさける。

時には、汽船のやうなものでも出帆を見合せることがある。と、いふと、當然讀者は、何故金曜日が『悪日』なのだらうと疑問を挟むであらう。が、それはまことにたわいもないことなのだ。つまりいとも尊き神の子、エス・キリストが、ポンテオ・ピラトのために、十字架につけられた日が金曜日だつたから不吉だといふのである。

また、十三といふ數が非常に『不吉な數』だと考へられてゐる。十三日、十三番地、十三號室、

茶番のやうな事件

或は電話番號の十三番などはみな嫌ふ。人氣商賣のホテルなどでは、故意に十三號といふ室をヌキにして置くくらゐだ。が、殊に、十三人同一の食事につくことは、最も不吉だと云つて忌む。だから、お客を招待する場合、主婦は、御膳走に頭を惱ますことは無論だが、來客の數が十三人にならないやうにと大變な苦心をする。こんな話がある。

ロンドンの話だ。ハイドパークに近いお屋敷町、ケンシントンに、豪奢な生活を營んでゐる一人の寶石商があつた。この寶石商の奥さんが、或年恒例によつて自分の誕生の祝宴を、ロンドン一流のホテル『カルトン』の大食堂で開いた。招待されたのは何れも社交界に名の知られた紳士淑女ばかりで、總計十二人。時間を嚴格に守ることを以て最大の誇としてゐる毛唐人のことだから、『かういふ時には、少し遲目に行つた方……』がなんてことは考へない。定刻の時には、何れも一點否の打ちどころのない流行服に身を固めて勢揃ひした。もちろん

ところが、その時、思ひがけない大事件が突發した。その奥さんの御主人、即ち寶石商の旦那さまが、どうしたのか突然腹痛——だか何だか知らないが、ともかく急に病氣になつてしまつた

のだ。それで祝宴はオヂャン。ごうして、そんなここが、社交を以て生命こしてゐる毛唐衆に許されなものでない。さあ事だ。御主人が出席できなければ、ティブルの人數は當然恐るべき十三人こなる。カッギ屋の細君は、すつかり悄氣てしまつた。

けれごも、時計は些の同情もなく食卓開始を促した。全くごうしていゝのか、カッこ逆上てしまつた細君には判斷がつかなかつた。が、いつまで逆上てばかりもゐられないので、暫く丹田に力を入れて沈思默考した。そして、遂に素的な名案をヒネリ出した。お供をして來てゐた下男をゼンツルマンに作り更へやうこ考へたのだ。早速下男は最新流行型の禮服を借著して、堂々たる紳士になり濟ました。……

それで、その下男が神妙に御役目を濟ましただけだつたら、このお茶番のやうな出來事は當事者以外の誰にも知れはしなかつただらう。從つて、われわれの耳になこ入らなかつたにちがひない。たこへ入つたにしても、「へエー」こその時には愚嘆これを久うしたであらうが、今頃はいさかの未練もなく忘れちまつてゐるに相違ない。今頃それを思ひ出して、かく書いてゐるには、それ相應の理由が、ごうも少し七くごいから手取早く片附けやう。

その下男先生餘ほご好男子で、そして、腕こきであつたものこ見え、その祝宴中に、マンマこ誂りに座つた淑女——しかも既に所屬のきまつてゐる淑女を手に入れてしまつたのだ。

暫くの間、二人の關係は、何んにも知られなかつた。が、それは結局、露はれないですむごこではなかつた。しかし、確實にその下男の虜さなつてしまつてゐた件の夫人は、何人の諫言にも耳をかさなかつた。事は意外の方面に進展した。網えず第六感を極度に働がせて、ゴシップ種を渉獵てゐる、社交界の不良老青年ごもは、鬼の首でも取つたやうに喜んだ。赤新聞の編輯人達は彼等のモットーこするこころに從つて、この「珍らしきローマンス」を世人に吹聽した。侮辱された夫は、フンガイして……だが、かういふ場合にも、紳士の襟度を示すべく教育されてゐた彼は、たゞ離婚の告訴だけを提起した。……

下らぬ迷信が飛んでもない事件を生み出したわけだが、下らぬこ云つてもこれを信ずる人達にこつては、決して下らぬこごではなく、何よりも重大なこなのだから厄介だ。だが、何故ヨーロッパ人は十三こいふ數をそんなに忌むのだらう?外でもない、それはかの「最後の晩餐」——キリストがローマ兵に捕らへらるゝ前日の夕、愛する弟子達こ俱にした晩餐の人數が十三人であ

つた。そして、その中の一人が、その後間もなく非業の最後を遂けた。こいふこころから來てるのだ。

頭痛とヨハネの頭

その他、まだキリスト教から來たと思はれる迷信は隨分澤山あつて、一々數ふるに暇なきほどだ。

その中で殊に奇なのは、ヨハネ――キリスト十二使徒中のヨハネの頭の形を木片に彫りつけて持つてゐて、頭痛の時に、それで頭をなでるこかさするこかすれば、立ごころになほるこいふ迷信である。

ヨハネの頭は、頭痛が起るやうな粗製品ではなかつたこいふ洒落かも知れないが、大眞面目でさう信じてゐる者が隨分多いのだから、立派な迷信だ。尤も信ずれば鰯の頭も何ごやら、これも頭だ、しかも、キリスト十二使徒中にその人ありごと知られたヨハネの頭だ。或は本當に利くかも判らない。信仰できる人は信仰して見るこだ。ナニ頭の形なごはごんなのでもよいだらう。しかし、ごうしても氣の濟まぬ人は、天國へ行つて見て來るよりほか仕方がない。

西洋の吉兆と凶兆

かうすれば吉だこか、あゝすれば凶だこかいふ迷信もいやになるほごある。先づ卑近な例を擧げれば、朝起きた時、上靴の右こ左こを間違つて穿くこ、その日にはロクでもないこごばかり起る、こいふ。尤も靴をアベコベに穿くなんてこごは先づ寐ほけてゐるか、あわてゐるか、他のこごに氣をこられてゐるか、何れにしても、頭の調子が餘つほごドウかしてゐる時でもなければないこごだから、そんな日には、ごうせ仕事をしたこころで滿足なこごができさうもない。この迷信もそんなこごから起つたものだらう。

それから、食卓で鹽を取りやりするのは不吉だこいふ。また、赤葡萄酒（ボートワイン）を下座がら、上座へ廻すのもいけないこいふ。ごちらも、ごうして不吉なのだか、誰に聞いても「さあ」でなければ「知りませんネ」だが、ドイツ、イギリス、フランスの諸國では、それが迷信から進化して作法の一項目になり濟ましてゐる。厄介だが心得てゐるないこ恥をかく。うるさい婆にでも見られやうものなら容赦なく叱られる。

戸外へ出る。そして、誰ごでもいゝ。ごにかく二人並んで歩いてゐる時、後から來た人間がそ

の二人の間を割つて通り抜けると、その二人はどちらも不幸な目に會ふといふ。

またドイツのカッギ屋連中は、一旦家を出たら忘れ物があつても、取りに歸つてはいけないだの、他處へ行く途中、非常に年をとつた婦人と行逢つたり、野兎がその道を斜めに横切つたりした場合には、一旦自分の家へ引返して、また出直すがいゝだのと、隨分下らないことを大眞面目で信じてゐる。

大部、不吉だのいけないだのといつたものばかり竝べてしまつたが、西洋にも吉兆として喜ぶ迷信も尠くない。

例へば、路上で蹄鐵を拾ふと非常に喜ぶ。どういふ理由でだか自分は知らないが、とにかく毛唐衆がこれを尊重することは、一通や二通ではない。誰でもこれを拾ふと、チャンと家へ持ち歸つて大切に保存して置く。またある者は、居間の入口やストーヴの上などに掲げて置く。何でも、かうすれば悪い病の侵入を防ぐことができるのだそうだ。例のスペイン風が流行つて、昨日も百人、今日も二百人といつた調子でバタ〳〵死んだ時など、ロンドンですら何處の家へ行つて見ても、これが掲げてあつたものだ。錆びた蹄鐵で、スペイン風邪を撃退しやうなんて、異人さんも

なか〳〵愛嬌がある。

それから、これは本當かどうか、自分は不幸にして實見しなかつたから斷言できないが、何でもアイルランドでは、出産の時に、赤兒の頭が薄い膜で包まれてゐれば、その子の將來は非常に幸運だといつて祝ふ。しかも、その膜にはいろ〳〵のまじないの効能があるといふので、高價で賣買されると、いふことだ。――その由來は、第一世ナポレオンが、この吉相を持つて生れたといふところから起つたのだとか。蓋し風變りな迷信の一つと云ひ得る。

子供についての迷信

子供と云へば、わが國でも、子供が生れると同時に、犬や猫を飼ひ始めると、きつと、その子供が、犬猫が、どつちかゞ死ぬといつて、飼養を見合せる風があるが、ヨーロッパでも、これと同一の迷信が廣く行はれてゐるやうだ。

また、ドイツあたりでは、小兒が初めて穿いた靴を大切に保存して置くが、そうしなければ小兒が無事に生長しない、といふ迷信からなのだ。親が子供の幸福を希ふ心は、東洋でも西洋でも變りない。どうか無事に成長するやう、そして、立身出世して呉れるやうと、そればかりを念じてゐるのだから、たゞへ、明らかに迷信だと判つてゐるても、それが子供の身に不

幸を招く、禍を來たすと云はれると、つい弱氣を出して、『まあ、迷信でも何でも、悪いといふことは避けた方がいゝ』と考へるのが通例だ。だから、子供についての迷信は、死に關するそれとともに、迷信の中では最も數も多いし、行はれてる範圍も廣い。また眞面目に取扱はれもする。それだけに第三者から見れば、實に莫迦々々しいこと、噴飯に價することが多い。かういふ話がある。

或時――といつてもそう大昔でもない。つい三四年前だが、ハツキリ判らないから假りに或時として置く。で、その或時だ、ドイツのブランデンブルクの一都會で、赤んの坊品評會――例の日方を調べたり、丈を計つたりして、最も發育の好い赤ん坊に賞與を與れる會が催された。何しろ初めての試みだから、さぞ當日には、物好きな母親達がワンサワンサと押し掛けて來るにちがひない……と、主催者は考へたのだらう。會場には、その町で最も大きい建物であるところの公會堂が、これに充てられた。

ところが、いよ〳〵その當日になつて見ると、何といふ皮肉な結果だつたらう、さても收容し切れないほど押しかけて來るにちがひないと期待されたところの『赤ん坊の所有者』達は、たつた三人だか五人だかしか來なかつたのだ。主催者諸君も、わざ〳〵出張した大勢の醫者達も、それよりもつと大勢の看護婦さんも、文字通り呆氣にとられざるを得なかつた。そこで、よく〳〵事情を調査考究して見ると、讀者よ、笑つてはいけない、その地方では、赤ん坊の身長を計つたり、目方を量つたりすると、無事に生長しないといふ迷信が非常な勢力を持つてゐることが判つたのだ。

まるで嘘のやうな話だが、凡そ迷信といふものは、それを信じない者から見れば、何れもみな嘘のやうにしか思へないものなのだ。

子供についての迷信には、まだこんなのもある。――生後一年經たぬ赤ん坊に鏡を見せてはいけない。もし見せると、自惚の強い兒になる。

小兒を窓の上に持ち上げたり、或はこれを跨いだりしてはいけない。無事に成長しないから。

小兒が石遊びを好む時には、必ず戰爭が起る。

これは何れも北歐の迷信であるが、何處となく質朴剛健な民族の氣質が表はれてゐるところが面白いではないか。

出産と迷信

子供のことが出たついでに、出産に關する迷信を二三記して置かう。

我國でも隨分いろ〳〵樣々のことが云はれ、また實際に信じられてゐるが、ヨーロッパでも同斷だ。そして、その中には彼我殆んど大差のないものも尠くない。例へば安産を祈るために種々の玩具——人形だの金屬や木で作つた牛馬だのといつたものを、肌に着ける迷信は、玩具そのものゝ形こそ違へ、趣意は全く同一である。

〔第二十四圖〕ドイツに行はれる安産のお守

最も普通に行はれてゐる迷信は、『姙婦が食事の時に氣儘を云ふと、好き嫌ひをする兒が生れる』。『眼の中が黄色だと女兒が生れる』といつた至極罪のないものだが、ドイツやオランダの或地方には、『姙娠してゐることを隱し立てすると、唖の子が生れる』、といふ殘酷なものもある。また、『陣痛が始まつたら、豌豆を一握み煮立てると、樂に生れる』などといふ莫迦々々しい迷信もある。

運動家の迷信

緣起がよいとか、惡いとかいふことは、誰でも多少は氣にするものだが、人氣家業に携る者や勝負事——といふと何だか博奕を意味するやうに聞えるが、此處では無論賭博ばかりを指すのではない。相撲、拳闘、野球、庭球……其他あらゆる運動競技をも包括する廣い意味の勝負事だ。で、その勝負事をやる者は、殊にそれを八釜しく云ひ立てる。

宇津木といふ人の書いたものによれば、先年の大震災で燒けた本所相生警察署の近くに、輕部砂糖、玉子などを賣る乾物店があつて、その店頭には、いつでも、意地の惡さうな老婆が坐つてゐるが、妙なことにはその老婆が、前の横綱大錦や、今の常の花にとつてはまるで厄病神のやうなもので、場所へ行く時、車の上でこの婆さんの顏をチラとでも見やうものなら、その日の勝負は乾度負けで捨てたやうに負ける。大錦が大鳴戸、藤の川、鶴渡りなどにやられた時は、いづれもこの老婆を見た日だつたといふので、常の花は、松坂町の方から大迂回して場所入りをするのが例になつてゐた。ところが嘗て同部屋の御西山から『常關も婆さんに負けてはいけねえ』と云はれたので、何處つかいふので再びその乾物屋の前を通ることにしたが、いよいよ車がその店の前

に差掛ると、あの鬼をも取拉ぎさうな豪の者が、外套で外をかくして小さくなつてゐる、といふ話だが、かうした迷信は、彼地のスポーツ・マンの間でも盛んに行はれてゐる。

今では引退して居酒屋のおやぢか何かやつてゐるが、一時はヨーロッパの拳闘界にその勇名を唱はれた、イギリスの拳闘家ゾエ・ベケットが、嘗て彼の後援者であるところの一貴族と、ロンドンの繁華な通りを歩いてゐると、偶然、一人の片眼の男にすれ違つた。すると、何と思つたのか、ベケットは矢庭に被つてゐた帽子を脱いで、ペッ〳〵と思ふさま唾液を吐き散した。驚いたのは連れの殿様だ。何といふ下等な真似をするのだらう。と暫くは氣に取られて見てゐたが、こうしちやゐられなくなつて、『一體どうしたのだ』と、苦々しさうに問ふた。

『あゝ御前、失禮しました。餘り狼狽たものですから』

『狼狽たつて……唾液を吐くのは何かのまじなひかね』

『いや、實は我々の仲間では、片眼の男に道で逢ふと試合に負ける……だがその時、直ぐ帽子を取つて、思ふさま唾液を吐けば、その厄を免れる、といふことを言ひますので』

と、すつかり感心してしまつたといふ話が傳つてゐる。

かういふ例は、まだいくらもある。アメリカの何とかいふ野球團は、偃僂で片眼といふ念の入つた片輪者をマスコットとして、大事にしてゐるさうだし、イギリスの飛行家には、黒猫を神様か魔法使ひのやうに、あがめ尊んでゐる者が尠くない。といふことだ。偃僂や黒猫にどんな力があるか、なぞと四角張つて見たところで仕方がない。他人から見れば實に莫迦らしい、ふき出したくなるやうなことでも、これを信じてゐる當人にとつては至つて重大なことなのだから。しかし、また妙なもので、さういふ信仰を持つてゐる人達が、その本尊樣をないがしろにするとき つと罰を受けるらしい。現にそのアメリカの何とかいふ野球團は、その偃僂男を球場へ連れて行かないと、その日の試合には必ず負けるといふことだ。

寶石にまつはる迷信

寶石についてもいろ〳〵の迷信がある。一體古代人が寶石を身につけたのは、たゞ單に身を飾らんがためではなく、また一には惡魔を追拂はんがためであつたことは多くの學者の說くところだが、現今でも、さういふ意味で寶石を身に着けてゐる人が尠くない。では、如何なる寶石に如何なる迷信が絡つてゐるか——

先づ寶石の王たるダイヤモンドゝこれは、一般に幸運を齎すゝ信じられてゐる。殊にイタリヤ人は、古來これを非常に縁起の好い石ゝして、尊重してゐる。

青玉（サファイア）もまた幸運の象徴ゝして珍重されてゐた。最近ヨーロッパに流行してゐるトルコ玉も幸運を齎すものゝ信じられらるゝゝ考へられてゐる。

猫目石（サベル）はもゝ、幸福を齎すばかりか、超人的な力を與へる寶石だゝ考へられてゐた。だから往時にあつては、最も理想的な魔除けゝして非常に珍重されたものでめるが、イギリスの文豪スコットが、その小説の中に『オパルは幸福を齎すどころか却つて不幸を招く原因ゝなる』ゝ、いふ意味のことを書いてから、遂に人氣がなくなつて、現今では、最も不吉な寶石（いし）ゝなつてゐる。従つて贈物（プレゼント）には絶對的に用ひられない。

琥珀は護符（おまもり）ゝして用ひられる寶石の中では最も古い歴史を持つてゐる。従つて、琥珀についての古い物語りや傳説は無數にあるが、一般に信じられてゐるのは、これを身に著けてゐるゝ、その人の健康狀態によつてさまゞゝに變色するゞいふことだ。元氣の好い時には琥珀の色は晴々ゝ光り輝いてゐるが、一朝風邪でも引くゝ、それは忽ち曇つて來るゝいふのである。また琥珀を頸にかけてゐるゝ、咽喉病にかゝらないゝ信じてゐる者も尠くない。

珊瑚もまた琥珀ゝ同様に、之を帶ぶる人の健康狀態によつて色を變へるゝ信じられてゐる。無論悪魔除けにもなる。中世紀頃までは、珊瑚は主ゝして悪魔除けゝして身につけられたものだゝいふ。

寶石は、また、自分の生れ月に適當したものを用ひるが好いゝ云はれる。即ち——

一月生れ……柘榴石（ガーネット）　二月生れ……紫水晶（アメジスト）
三月生れ……紅玉髄（ブラッドストン）　四月生れ……ダイヤモンド
五月生れ……碧玉（エメラルド）　六月生れ……瑪瑙（アゲート）
七月生れ……ルビー　八月生れ……縞瑪瑙（サードニクス）
九月生れ……青玉（サファイア）　十月生れ……オパル
十一月生れ……黄玉（トパズ）　十二月生れ……トルコ玉

ゝいつたわけで、この表通りの寶玉を指につけるなり、頸にかけるなり、ゝにかく直接肌にふ

れるやうにしてゐれば、決して、惡靈邪魔に襲はれないといふのである。お金持ちは早速ためして見給へ。但し、たとへ效驗がなかつたからとて、僕のところに苦情を持つて來ることだけは御免を蒙る。

まだ迷信はいくらもあるが、餘り長くなるから、一先づこれで打切にする。

歐米の見世物

パリーの寄席

ヴォドヴィル、即ち寄席の本場は、何と云つてもパリーである。ニュー・ヨルクでもロンドンでも隨分盛んだが、矢張パリーには及ばない。尤も、ニュー・ヨルクのヒップヴロム座のやうな大規模の寄席は、パリーにはない。が、その代り數は大變だ。相當有名なものだけでも十ばかりある。小さなものを加へたら、恐らく二十を超すだらう。

その夥しい寄席の中で、最も有名なのは、『オレンピヤ』、『フォリー・ベルゼール』などで、何れも毎日晝夜二回開演する。――晝興行（マチネ）は大抵二時半から五時半頃まで、夜演（ソアレ）は、午後八時半から十一時半頃までだが、眞のパリー氣分を味ふには、晝興行よりも夜演の方がよいこと無論である。

オレンピヤ

『オレンピヤ』は、パリーの大通り、ブルヴァール・デカプシヌにあつて、國立オペラにも近く、常に春風駘蕩たる雰圍氣に包まれてゐる。長い廊下のやうな入口を過ぎると、先づカフエー兼バアといつた風の廣いホールがあり、その奥の帷幕を隔てたところに觀劇場がある。この小屋は長方形の建物を三分して、その一端を酒場とし、殘餘の部分を劇場としたやうなものだ。

酒場には、一流の粹とは云へないが、土地馴れぬ椋鳥どもを魅惑するには充分な美しい肉體と、凄い手練とを兼ね備へた夜の女王達が、媚をたゝへて待つてゐる。また、觀劇場には、普通席の外に『散歩廊下（プロムナアド）』といふ、立見や散歩のできる場所があつて、此處にも妖艶な女が大勢詰めかけてゐる。

演技は、曲藝もあれば、スケッチもあり、バレーもあれば、ダンスもある。また綺麗な顔と、

白魚のやうな手さ、すらりとした美しい脚さを何十さなくズラリと揃へて、南米あたりからやつて來た遊冶郎の胸をドキドキさせる『ルビユー』のやうなものもある。時には、またアメリカインド人の曲乘りだの、アフリカ土人の合唱だのといつた珍物が現はれることもある、さいふ風で、仲々變化があつて面白い。だが、眞に觀劇だけを目的として行く者は尠く、大抵は誘惑されに、又は誘惑をしに出かけるのだ。

〔第二十五圖〕ルピユー

されば、一幕すむさ、われもわれもさ酒場へ行く。中には觀る方はそつちのけにして、酒場に入浸りになつてゐる者もある。觀客がなだれ込むさ、魔性の女さもは好い椋鳥を捕へやうさ右往左往する。ボンヤリ立つてでもゐれば、直ぐ側に近寄つて來る。商賣柄抜目はない。男

女のさんざめき、燻らすシガールの煙、酒盃のふれ合ふ音、陽氣さいへば陽氣だが、何さなく神經を昂奮させる。

いよ〳〵ハネになるさ、幾組かの一夜作りの『つれ合ひ』は、門口に立つ巡査の、半ば皮肉な半ば羨しさうな眼差に送られて、それ〴〵何處へか自動車を走らせる。不幸にして適當な配偶者を捕へ得なかつた者は、ゾロリさ門口のあたりに立つて、『好い人もがな』さ眼を光らせて待つ。

フオリー・ベルゼール

「フオリー・ベルゼール」は「オレンピヤ」よりも一層華やかであり、集つて來る職業美人も多いさいふので、外國人が多く行く。從つて入場料は「オレンピヤ」よりも格高になつてゐる。

この二つは、何れもパリーの代表的の寄席であるが、また、演技の面白いので人氣のある「カジノ・ド・パリー」や「アランブラ」なさも一流の中に數へなければならぬものである。內部の構造は何れも「オレンピヤ」さ大差ない。

要するにパリーの寄席共通の特徴は、陽氣であるさもに何さなくのんびりさしたさころであらう。演技だけを觀に行つてもよいし、たゞ遊びに——的確に云へば素見(ひやかし)しに行つても面白い。こ

の點はユユー・ヨルクの『キヤバレー』なごごよく似てゐる。

ジプシー・ショー

ジプシー・ショーごいつて、パリーならモンマルトル、ロンドンならハムステッド・ヒースごいつた、いはゞ『兄イ連』の遊場に數十數百の小屋掛けを建て連ねて、オール・ゴールの曲も勇ましく活動、小サーカス、木場、メリー・ゴー・ラウンド、射的、ごつこいの類を興行する團體がある。

〔第二十六圖〕

これは一寸珍らしい見世物だ。何しろ、いろ〳〵さま〴〵の見世物が一團ごなつて興行するのだから、實に壯觀だ。尤も田舍に行く時には、この大團體が幾つかの小團體に分れるらしいが、ロンドンやパリーのやうな大都會で興行する時には、少くごも五六十種の見世物が、一人の大親分に統馭されて、いはゞ、淺草の奥山や大阪の新世界を大きくしたやうな見世物町を形成する。そして、二週間なり三週間なり興行するご、また一切の道具を馬車に積み込んで、次の土地へ移つて行く。

ハダカダンス

射的や玉ころがしや吹矢のやうなものは、道具立ても簡單だし大抵一家族でやつてゐるのだから、移轉も容易だが、メリー・ゴー・ラウンドだのサーカスだの曲藝奇術の類だのは、道具だけでも大變なごころへ、一座が大勢だから、いざ引越しだ、旅行だごなるご大事だ。しかし、流石年中、旅ばかりしてゐる連中だけあつて、小屋を取り壞すのでも、荷作りをするのでもうまいもので數百を收容する大天幕でも、半日も掛らないうちに、キレイに荷作りして、車につけてしまふ。消息通の話によるご、何でも彼等の中では、杭を打つ役、支柱を立てる役、天幕を張る役ごいふ風に、チヤンご役割が定まつてゐて、永年、それぞれの役をやつてゐるから、かく巧に且つ迅速にやれるのだごいふ。が、ごにかくうまいものであるに、そればかりやつてゐるから、或地の興行を終へて、他の土地へ移る時には、數十臺、數百臺の大きな馬車が文字通り長蛇のやうな列を作つて行進する。無論、途中に適當の場所があれば、そこに止つて幾日間か興行して

また次へ移るのだが、店を開く場所の見附らない場合には、數日間、時には數週間もの長旅をすることがある。その間は日が暮れゝば、適當の地——町外れの廣場、河畔或ひは山蔭の野原ごいつた場所を選んで露營し、夜が明けることまた鞭を擧げて前進する。だが、露營ごいつても、例のチャンご寢床から化粧箪笥まで完備した客馬車を各家族が持つて、それに住んでゐるのだからたゞ、貨物ご馬の仕末さへすればいゝ。天幕を張る、或は小屋掛けをするなごいふ面倒はいらないのだ。この馬車は、平常は住宅だが、興行中は樂屋にもなる。實に便利に出來てゐる。恐らく、ジプシーの生活くらゐ簡易な生活はないだらう。

かく、何時も全財産を持つて旅行するのだから、汽車や汽船のやうなものを利用するわけには行かない。從つて、彼等の巡業地は大抵定まつてゐる。フランスやベルギーを廻つてゐる團體がイギリスに行く、或ひはイギリスにゐる團體が大陸の方へ出掛けるなごいふことは殆んごない ご云つていゝ。だから、いよ〳〵商賣が暇でやり切れなくなるご、大きい農園なごに、一時定住して果物ちぎりだの、畑の除草だのをやつて、徐に時期を待つ。南イングランドはケントの林檎園、フランスはボルドー地方の葡萄畑なごは、彼等の息つぎ地ごして知られてゐる。

イギリスのローヤルターナメント

イギリスにもいろ〳〵毛色の變つた見世物があるが、最も面白い、そしてわれわれに珍らしく感ずるのは、毎年五六月の交、ロンドンに於て催さるゝ、陸軍の「擬戰（ターナメント）」である。

堂々たる國家の干城が、金を取つて『サーカス』のやうな儘物を公開するなごいふことは、わが國では夢想も出來ないことだが、この國では、兵隊も一箇の技術者くらゐにしか思はれてゐないのだから、その技藝を賣りものにしたごころで、別に不思議でも何でもないのだ。

しかし、ごにかく本職の軍人、それも一年や二年しか在營しないのではなく、五年も六年もの年期を入れた軍人の中の技倆優秀な者が、秘術を盡してやる演技だから、見世物ごしては實に面白い。しかもそれが練兵場や運動場のやうな野天で行はれるのではなく、純然たる見世物小屋で催されるのだ。屋内の擬戰、それだけでもたしかに三シリングや五シリングの價値はある。

ケンシングトンのアヂソン街停車場を出るご、眞ぐ前に莫迦らしく大きな建物がある。これがその『擬戰』の會場ごなる『オリンピヤ』だ。水晶宮、アルバート・ホールごいつもにロンドンの

三大會館と稱せらるゝ大建築だから、流石に堂々たるものである。此處に掲げた圖には、その内部の約三分の二が表はれてゐる。屋根は入つてゐないが、實物には無論チャンと立派な屋根がある。内部の結構は説明する必要もあるまい。

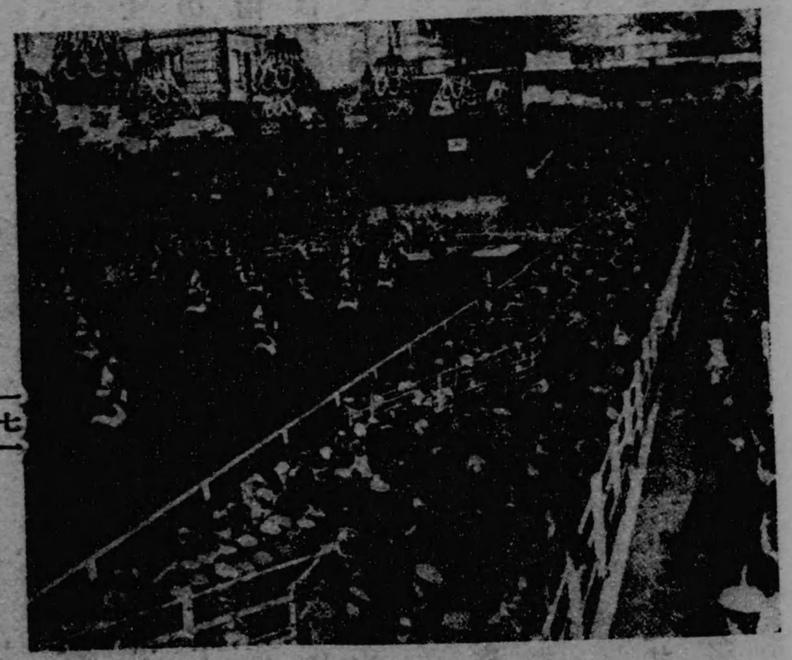
『ローヤル・ターナメント』の期間は通例一箇月で、演技は毎日午後と夜と各一回づゝ、都合二回行はれる。そして、一回のプログラムは十五六種目――奇抜な曲藝もあれば、壯快な競技もあつて誰が見ても面白い。また勇壯な演技もあつて誰が見ても面白い。

奇抜なものとしては、先づ『馬のダンス』といふのがある。これは、圖に表はれてゐるやうな美々しく着飾つた一隊の騎兵が演ずるのであるが、騎手の手綱さばきの鮮かさ、馬の柔順さ、何しろ三四十頭の馬が、華やかなワルツに合せて前へ出たり、後へ退いたり、首を振つたり、四脚を揃へて廻つたり、二頭づゝ寄添つて小きざみに二三歩進んだり、種々様々のことを、一點の狂ひもなくやつてのけるのだから大したものである。下手な曲馬師はトテモ及ばない。

壯快なのは、砲兵隊の『音樂的行進（ミュージカル・ライド）』。各一門の山砲と一輛の彈藥車とを持つた四隊の砲兵が非常な速力を以て馬を走らせつゝ、或ひは縦隊となり、或ひは横隊をなし或ひは8字形を畫く等、

眞に息つく暇もない妙技を演ずる。場内は廣いと云つても練兵場のやうに廣くはない。殊に横幅は狹いから、四隊が横隊になれば、各隊間の間隔は、やつと一間くらゐしか取れない。實に危險な話である。

砲兵隊の演技には、も一つ面白いものがある。それは、眞の擬戰――演習だ。先づ各一門の山砲を持つ紅白の二隊が入場する。演技場の中央部には、幅五間ばかりの河――といつても無論水はない、たゞ十俵のやうなものを積み上げて堤防に擬してあるだけだが――さういふ河が設



〔第二十七圖〕　オリンピア

けてある。

やがて一發の號砲が鳴ると、兩隊の兵士は馬から乘び下りて、大砲や彈藥車の分解に取掛る。と同時に一方ではそれを對岸へ運ぶための鋼索を河上に張り渡す。それが出來上ると、分解した大砲、彈藥車の部分品の一つ一つに鉤を附けて、鋼索に引掛け、一人か二人の兵士がしがみついて對岸へ滑り渡る。その間に二三の兵士は馬を曳いて渡渉する。こいふ風で、またゝくうちに全部隊が對岸へ渡つてしまふ。その間は實くと相當長い時間のやうに思はれるが、實際はもの〻五分間とかゝらない。

對岸へ着くと、また大砲、彈藥車をもと通りに組み立てゝ、馬をつけ、全速力で定めの地點に到達して陣を布く。

轟然一發空砲をブツ放す。少しでも早く發砲し得た方が勝ちなのだ。

要するにこの「ローヤル・ターナメント」は一種の武藝大會だが、簡單な馬術や武術を見せるのではなく、野外でやると同樣の大仕掛な演技を實演するのだから、一寸奇拔である。

サーカス

『サーカス』は西洋の見世物の中で、最もポピユラーなもの〻一つである。現今歐米の何れの地へ行つてもこれを見ないことはない。歐米のみならず我國ですらも屢々これを見掛ける。ことほど左樣に廣く世界に行き渡つてゐるわけであるがその最も盛んなのは矢張アメリカである。

元來『サーカス』興行は古代ローマ時代に創始されたものであるが、近代式の——即ち巡業を主とする『サーカス』は、紀元一千七百七十年に、イギリスのフイリップ・アスツレイといふ坂皿のやうな名前の曲馬師が、ロンドンのウエスト・ミンスター橋畔に、『鉋り立派でない』小屋を造つて興業したのが、そも〳〵の始めだと云はれてゐる。

しかし、『サーカス』が今日の盛況を見るに至つたのは、十九世紀の初葉にヘンガラー、サンガー、バーナム・エンド・ベイレイなどの大曲馬團が出來て以來のことでそれまでは『サーカス』と云つても、殆んど名のみのものであつたから、世間からも輕視されてゐるなかつた。だから、『サーカス』の歷史は隨分古いが、それが流行し出したのは、こゝ百餘年間のことなのである。

現今、世界で最も『サーカス』興行の盛んな國は前述の通りアメリカだが、そのアメリカで最

〔第二十八圖〕　サーカス

も有名な『サーカス』は、コディ大佐といふ人の創始した『バファロー・ビル』である。何しろ、この一座には、遊藝人、演武者だけが八百人ぢか一千人ぢかゐて、巨象、駱駝、獅子、虎、豹等の野獣が總計百餘頭に牛馬が數百頭も飼養してあるといふのだから、大變なものである。

子供の話

果して日本は子供の樂園か

日本は小供の樂園だといふ。なるほどこれは一應尤もなことである。日本の母親ほどその子供を可愛がるものは、他にはない。彼女達は、始めてその子の初聲を聞いた瞬間から、殆んど、身を忘れ、世を忘れ、親も夫も忘れて、ただ子供のみに執着して、狂熱的の愛を注ぐ。『マドンナの像』は、母性愛の象徴として、歐米人の嘆美するものであるが、市井俚俗の『マリア』は、わが國では到るところに於てこれを見ることができる。また『モニカ』は、母性愛の權化と稱せらるゝが、われ〳〵の母は決して『モニカ』に劣らない。

またわが國は、古來玩具に恵まれた國である。ゼンマイ仕掛の舶來品が侵入して以來、著しく科學化し、醜惡化したとはいふものゝ、まだ〳〵歐米諸國の玩具から見れば、優美であり、その